

りゅうおうの師匠 [ロリコン]

マグダス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ちよいちよい妄想してた「りゅうおうのおしごと」の二次創作です。銀子かわいいですね。こんな子が弟子に来たら娘がいても手を出しても仕方ないよね。

## 目 次

かわいい弟子が裸になつても師匠は「まだ」動じない	1
静かな口り弟子と活発なシヨタ弟子と（ある日の一幕）	—
昨日の事を許しちゃうのは（チヨロインだから）仕方ないよね。	9
12	
そんなに楽しみにしてた？	—
口りでMな弟子はどうですか？	—
ワレ、弟子ノ秘所ニ突入ス	—
弟子を風呂に入れよう。（ついでにいたずら）	—
風呂上がりにもう一回	—
はない幼女	—
弟子（やいち）の居ぬ間に	—
第二の刺客（おとこ） 前編	74
第二の刺客（おとこ） 中編	83
第二の刺客（おとこ） 後編	89
小学生の頂 前編	96
小学生の頂 中編	108
小学生の頂 後編	118

かわいい弟子が裸になつても師匠は「まだ」動じない

「ただいま」

玄関を開いた清滝鋼介は手にしていた手拭いで額に滲む汗を拭う。閉めきつた屋内はエアコンが利いており、滲み出す汗が止まる。

「桂香あ。おうい、桂香ー」

玄関先から娘の名前を呼んだ。特に用件はないが、いないならば自室以外は停めるつもりだった。

返事が無いことに仕方ないといった様子で肩を落とすと下駄箱に手を掛けて靴を脱ぐ。

「ししよう」

パタパタと足音を立てて一人の少女が居間の方から現れる。下駄箱とあまり変わらない身長に、透き通るような髪色と肌、強気な性分を感じさせる大きな瞳。白いワンピースの袖には青いラインが刺繡されている。いつも抱き抱えているトレードマークともいうべきマグネット将棋の「歩」駒をその小さな指に挟んでいた。清滝鋼介の内弟子の一人である空銀子は五歳とは思えない落ち着きで出迎えた。

「銀子、もう帰つてきどるんか。もう少しゆつくりしてきてよかつたのに」

鋼介は将棋イベントに駆り出されるからいい機会だと銀子に帰省を提案していた。連れて行つても良かったのだが、彼女の身体を考えると炎天下に長時間居させるのは体調から厳しいものがあった。将棋に夢中なのは非常に嬉しいが、内弟子になつてまともに家に帰つた記憶が無かつたからだ。この機会に親と顔を会わせさせようという子供を持つ大人としての配慮だった。

「家じゃししようと対局できない」

最低限の言葉数を口にしただけで銀子はそれ以上話す様子は無い。じつと鋼介を睨むように見つめていた。

「なんや?」

視線に気づいた鋼介は下駄箱に靴を入れながら尋ねた。

「やいちと何局差したの?」

「少しゃ」

「嘘。やいちが少ししかやらない筈ない」

「40局くらいや、だいたい」

「…本当は？」

銀子の目に力が籠る。

「…68局です」

「じゃあ私とは70局。今から」

「ちょっと待つときい。今日はデパートで子供将棋大会の仕事やったんや。少し休ませてや。風呂にも入つてベたベたの体をすつきりさせてくれ」

鋼介が手拭いを絞つた。吸つた汗が出てくる気配はない。鋼介なりのアピールだつた。銀子が壁掛け時計に視線を移す。短針は三の数字を僅かに跨いでいた。

「じゃあ四時から」

そう言うと銀子は踵を返して居間に引つ込んだ。残された鋼介は深い溜め息を吐いた。居間に顔を出すと銀子がセパレートタイプのマグネット盤に視線を落としている。

「そういうえば八一はまだ帰つとらんのか」

八一こと空銀子の弟弟子である九頭八一は夏休み中は鋼介の将棋道場や街の将棋サロンを渡り歩いていた。

街のとは言つても鋼介と顔馴染みで席料はツケの場所である。

「まだ帰つてない」

声だけで不機嫌だと解る。体の弱い銀子は以前将棋道場までの道すがらで熱中症で倒れてしまつた。話し合つた末に鋼介との優先対局権を得る代わりに夏の間は道場やサロンに行くのは控えることになつてている。

「やいちは、帰らないの？」

「いや、あいつも帰そとしたんやけどな。あつちの親が「そつちの方が八一は多分幸せです」つて言つてな。八一に聞いたら親に「帰るよりもこつちが良い」つて言つてしもうたんや。そしたら無理に帰す必要も無いなつて思うて」

「なら私も帰らなくて良かった」

「そうはいかん。銀子は女の子や。娘親つて言うんは娘を猫可愛がりしたいもんや。」

パチンという乾いた音が立ち、マグネット盤の盤面を銀子は睨むよう見つめていた。当てつけるように駒音が響く。鋼介の熱弁も当然には解らないらしい。

「そりゃええば二両親は？」

「家」

鋼介から汗が滲む。よく見れば顔が赤くテーブルに置いてある作り置きの麦茶の容器が半分程度の減っていた。

「銀子、お前誰と帰つて来た？」

「一人」

鋼介は急いで銀子の実家に電話をかけた。

「いや、ワシもその向上心は買うたるけどな、親に心配かけるんは勘弁や。電話したら相当心配してたみたいやぞ。」

風呂に入つて汗を流した鋼介は自室で銀子と盤に向かい合いながら小言を口にする。さつきまでの似合わないスーツ姿ではなく、普段から着慣れている和服を着ている。鋼介はあぐらで座り、銀子は背筋を伸ばして正座をしている。

話を聞いているのだろうが銀子は盤面を睨んだままでうんともすんとも言わない。口を固く結び盤の上二視線を走らせて活路を懸命に探している。しばらく息もしなかつた銀子から肩の力が抜けて、大きく息を吐いた。

「負けました」

銀子が頭を下げる。盤の情勢は少し鋼介が優勢に見える程度だ。五歳児とはやはりおもえない判断力だった。

「銀子、もう少し粘らないかん。プロは最後の一手まで諦めたらあかんのや」

「ししようの方が『読んでる』だろうから」

自分が詰んだと判断したら師匠である鋼介はそれを見逃す筈ない  
と思っているらしい。

「それでも、や。案外気付いてなくてひよいひよいと銀子の罠にハマ  
りに行くかもしけん」

「私の罠に師匠が引っ掛かるわけない」

銀子はポツリと呟くと駒を初期位置に並べていく。表情が険しい  
が、どこか違和感がある。

「銀子、もしかして疲れてるんやないか？」

「…まだ平氣」

言われたことで自覚したのか駒を配置する手が鈍る。

「頭が働かないのに上手い将棋が差せるわけない。そやから風呂に入つて休憩や。八一が帰ってきたら一緒に稽古つけたるさかいに」

「嫌」

「強情やなあ。どうしたら聞いてくれる？」

「将棋で聞かせたらいい」

銀子はそう言うと角道を開けた。

「…負けました」

銀子は今にも将棋盤をひっくり返しそうな勢いで盤面を睨み付け  
ていた。自陣の大駒を取られながらも穴熊で活路を見出だそうとし  
て鋼介にそれを咎められるように飛車で金駒を奪われた。それでも  
今度は投了せずに「詰み」が盤に現れるまで粘った。

「粘ったのは認めるけど、勝負は勝負や。約束通り一回休みや」

銀子は立ち上がり、

くつ下を脱いで座り直した。

「どういうつもりや？」

鋼介は渋い顔をしている。

「一回勝負って言つてない」

銀子は言いながら今度は飛車先の歩を上げた。

「…負けました」

銀子は胃から絞り出すような声を発しながら盤を睨み付けている。さつきのような大駒を取られてのじり貧な対局ではなく、最後まで駒を生かそうとしていた。ただ、ケアレスミスで自分から調子を崩し、鋼介がそこを咎めて形勢は決してしまった。

「今度こそ、風呂やぞ。今から帽子や手袋なんて小道具はなしや」

銀子が立ち上がる。

部屋を仕切る障子から顔を出して左右を見て盤の前に戻つてくる。

「ちよつ！」

銀子はスカートの中に手を入れると一気にパンツを下ろした。

「まだやれる」

パンツから足を抜いた銀子は、白の綿パンツを握りしめていた。

「……負け…ました」

悔しさを声に乗せて銀子が頭を下げる。二局目の終着時のように盤を眺めているがその表情は呆然としていた。

「納得したら風呂に行くんやぞ。」

鋼介は銀子のパンツを洗濯籠に入れるために部屋を出た。

脱いで時間が経つたパンツは既に人肌の温度は逃げてしまつて冷たい。汗を吸つて湿つている。

「こんなしてたら風邪ひいてしまうぞ。」

パンツを洗濯籠に放り込んだ鋼介は台所で急須にお茶を淹れて部屋に戻つた。

「銀子オオオ！」

「ししよううるさい」

銀子はまだ盤面を凝視している。

ただ、今の彼女は体勢こそ鋼介が退出した時と同じ正座だつたが、ワンピースが畳の上にたたまれている。全裸だ。

太ももの上に手を乗せて対局の姿勢を取つてゐる。よく見ると腕の袖がカバーしきれなかつた部分が日焼けで赤くしていた。

「まだ」

視線で鋼介に対面へ座る様に促す。その顔はさつきよりも真剣だつた。

「ああつ、もうつ、これで最後やぞ」

そう言うと鋼介は銀子と盤を挟んで対面に座つた。

——自分が勝つ限り銀子は諦めないんじやないか。

鋼介は指しながらふとそんな戸惑うような疑問を抱いた。

目の前の少女は少なくとも羞恥心が無いわけでは無い。たまに視線を向けると体を前後に振つて、股に手を当てて隠す仕草をしている。胸に関しては余り羞恥という感情が芽生えていないのか、ついでといった様子で上腕で申し訳程度に視線を遮る程度だ。日焼けで赤くなつた腕に対して日焼けしていない股や腹、胸は余計にその白さが際立つ。

「なあ、銀子。せめてシャツくらいは着てくれ」

「嫌、洗濯物が増える」

よく見ればワンピース以外に洗濯機らしい物が無い。

「お前、着てたんは？」

「？」

銀子が首を傾げた。顔を上げてキヨトンとしている。どうやらワンピースの下には何も着ていなかつたらしい。鋼介は何度目かわからぬいため息を吐いた。

局面は銀子が優勢を取つている。果敢に棒銀で囮いを食い破り掛けっていた。勝ちを自分からもぎ取ろうとしている。指導対局のつもりがまさかこんなにがつがつと来るとは鋼介は意外だつた。

「ただいまー！」

玄関から元気のいい少年の声が響いてきた。その声に銀子は顔を上げて固まつてゐる。反射的にワンピースに手を伸ばしたようだが、混乱しているのかそれ以上動く気配はない。

「あ、銀子ちゃん帰ってきたんだ」

声の主は声量をそのままに一人言を口にすると、ぱたぱたと廊下を走つてくる。このままでは10秒としない内に障子が開かれてしま

うだらう。あわてて鋼介は布団を入っている収納の引戸を開ける。収納スペースは二段になつていて、下段は荷物で一杯だが、上段は布団が置かれているだけだった。

「銀子、八一に見つかったら面倒や！」

銀子は鋼介の小声に頷くと、猫のような身軽さで布団の上に飛び乗つた。鋼介が障子を閉じる。入れ代わりに廊下側の障子が開いた。

「あ、師匠」

「おう、八一。ただいま」

銀子よりも少し年齢的に大きな少年、九頭八一ははつらつとした様子で立つてゐる。

「あれつ？ 銀子ちゃんは？」

「八一、お帰りなさいかただいま言うんが先やろ。銀子やつたらさつきまで居間で差しとつたぞ」

「銀子ちゃんいなかつたよ？」

「トイレちやうか？ 居間で待つといいたらその内来るやろ」

「じゃあ師匠、それまで一局……」

ガタツ

「何の音？」

「あつ、いやあ、ちょっと荷物を掃除しててな。多分荷物が崩れたんやろ」

音をいぶかしむ八一を鋼介は平静なふりをしながらも必死にごまかす。障子一枚隔てた向こうには何も着ていらない銀子が居ると思うと背筋が冷える。

「手伝い、いる？」

「いや、いらん。それよりも銀子が戻ってきたら相手したれ。銀子の奴、すごいへそ曲げとつたぞ」

「何で？」

「そりやあ、八一だけ将棋道場に行つてたのとか、あいつが帰つてる間中ずっとワシとバーサスやつてたのが悔しかつたんだろうな」

「将棋道場に行けないのつて師匠との約束じやないか」

八一は腹を立てる様子もなく淡々と反論する。銀子の体の弱さを

知つて いるからこその反応だつた。

「それに、今日の師匠にだつて付いていかなかつたじやん」

「……ワシとしては八一だけでも連れて行きたかつたんやけど」

「僕だけ行つたら銀子ちゃんに悪いかなつて思つて」

八一は俯く。

「まあええわ。大舞台つて訳じやないし。とりあえず風呂に入つてき  
いや。上がつたら稽古つけたる」

「うんっ！」

八一は嬉しそうにしながらバタバタと浴室に向かつた。

「ふう」

鋼介は息を吐くと、障子を開けた。するとそこには猫のように丸くなつて眠る銀子の姿があつた。鋼介は今日一番の深い溜め息を吐いた。

# 静かな口り弟子と活発なショタ弟子と（ある日の一幕）

将棋盤をかれこれ十分近く睨んでいた銀子は駒台に手を翳して頭を下げる。

「やっぱり平手でやるには早すぎたな」

正面で胡座に座る鳴滝鋼介は駒台に置かれた駒を返しながら感想を口にする。

確かに銀子の将棋の才能は特筆する物がある。

しかし、最近の鋼介もすこぶる調子が良く、久しぶりのA級入りもあり得る戦績だった。

40歳を越え、気力はあつても体力が落ちているのはどうしようもなかつたが、弟子を取つてから復調の兆候が現れてきていた。

それは弟子に格好悪い所を見せたくないというエゴもあるが、それ以上に鋼介の性格と弟子、特に八一との対局にあつた。

元来世話焼きの鋼介は請われればどこにでも将棋普及に出掛けている。自分が得る物は少なくとも将棋界が賑やかになればとの思いからだ。

しかし、八一との将棋は普通の指導対局とは違い、上手が下手に教えるばかりではなく、時々ながら鋼介も見落としていた場面を盤上に現出させて見せた。

研究が未熟な為に途中から直感で打つてている場面もあつたが、小学生らしい柔軟な思考と、らしくない閃きは大器を感じさせるには十分だつた。

そしてそれは鋼介に新しい視点を与えてくれた。

一方で銀子の将棋は堅牢堅実のとても幼児が打つ将棋とは思えない玄人めいた棋風だつた。

棒銀に執着しているのはアマラらしいと言えるが、ガチガチの穴熊具合は彼女の性格と同じく相手をするのは大変だつた。

王将を駒で囮んだ穴熊を相手にするのは非常に神経を使う。

特に攻め駒を失った穴熊は延命にしかならないが、それだけに銀子は勝機を作ろうと粘りを見せる。

結果として脳を使い過ぎて床に臥してしまってがワンセットだつた。

鋼介としては倒れるまで将棋を差す銀子を好ましく思う。しかし、毎回のようになれてしまつては彼女の体力が持たないと不安もあつた。

なので対局後の感想戦に体力を残す為に勝敗を手早く決めてしまう作戦を鋼介は取つていた。

残念ながら銀子の将棋からは得る物が無かつた。  
そんな損得で弟子を取つたつもりは毛頭ないが、プロの将棋差しとしてどうしても対局相手を踏みにしてしまう。

特に八一という非凡な弟弟子と比べられてしまうこの年下の姉弟子を師匠として不憫に思つてしまふ。

銀子に才能が無い訳ではない。むしろ将来は女流棋士として活躍するには十分な才能を持つている。

しかし、奨励会の三段リーグを抜けるには厳しいと言わざるえない。

女性でリーグを突破した人間はなく、それは言い換えれば将棋界の中心には男性しかいないことの証左だつた。

「よし、今日はこれで終いや」

感想戦を終えた鋼介が盤上の駒を駒箱に入れていくのを銀子がじつと見据えた。

表情からは疲れが見てとれ、背中は丸みを帯びている。

最初は行儀よく膝に置かれていた腕も、今は畳の上に手を付いていた。

感想戦を含めても二時間弱でこの疲弊具合は銀子が将来苦戦する最大の要素だと鋼介は予想していた。

終日で一局を差す順位戦では体力が重要になつてくる。

疲労すれば当然判断力も薄れて悪手を差しやすくなる。

今はまだ長時間の対局を経験することは無い。しかし、いずれ向き

合う問題だった。

「ふう」

銀子が出て行つた部屋で鋼介は溜め息を吐いた。

体力を付けさせるとは言つてもまだ就学前の幼児である。運動を強いてインドアな人間になつてもらいたくない。

ただでさえ頭脳労働の将棋は室内に籠る機会ばかりなだけに意識的に外に出て気分転換をする習慣を持つて欲しかつた。

「師匠！」

そんなことを考えていると小学校から帰ってきた九頭竜八一が勢いよく襖を開けて入つてきた。

夏休みにあちこちの将棋道場に入り浸りだつた八一は移動で小麦色に日焼けした肌をしていた。

「おう、おかえり」

八一は背負つていたランドセルを畳に置くと、さつきまで銀子が座つていた座布団に座り鋼を並べ始めた。

一途に将棋に向かう姿勢に鋼介の口元が緩む。

「師匠、なんでニヤニヤしてるの？」

「ああ、ちよつといいことがあつてな」

手をやり、弟子に指摘された口角を揉んで表情を正す。

「よつしや、それじやいつちよ揉んだるで」

八一が駒を差したこと確認した鋼介は駒を握つた。

鳴滝家では食事の席で将棋の話はしない。

はつきりと決めている訳ではないが、鋼介の娘の桂香が将棋から離れている為になんとなく話題にしづらい。

食事の間も将棋の話をしては桂香に疎外感を与えてしまうし、弟子

二人もオンとオフを切り替える訓練にもなるので都合が良かつた。

昨日の事を許しちゃうのは（チヨロインだから）仕方ないよね。

蛍光灯が照らす室内で今日の対局の盤面を再現した鋼介は手にしているブランデーの入ったグラスを空にする。

その表情は普段の温厚な顔ではなく、今日の対局の最終番、敗着の一手前を再現して眉間に皺を寄せていた。

決して惜しい内容ではない。序盤から相手方が優勢でそのままふつ飛ばされた試合だつた。

これが順位戦ならば悔しいがある意味で納得するだろう。

しかし、今回の相手は今年B級に昇級したばかりの若手棋士だったからくるものがあった。

たまたまにせよ無様な将棋を指してしまったことに変わりはなく、悔しさに歯を食いしばる。

苦境や悔しさにある度に噛んでいたせいで歯の表面のエナメルが砕けて奥の神経が剥き出しになっていた。

出来なくなる前にインプラントをと勧められているが、結局は噛み砕いてしまって放置していた。

若手に大敗したという現実はそれほどに鋼介のプライドを傷付けていた。

グラスに注いだブランデーを一気に飲み干す。

痛みや悔しさを誤魔化すのにアルコールが欠かせない。

焼けるような感覚が喉を通つて腹の奥に落ちていく。

ずきずきとした嫌な痛みが引いていき、ようやく今日の敗北の整理、とはいかないまでも納得は付いてきた。

ようやく落ち着いて来た所に睡魔が重なり、鋼介の手が蛍光灯の紐に伸びる。

「ん？」

紐を握った所で襖がノックされた。

返事を待たずに襖が開く。

真つ暗な廊下に鋼介の部屋から光が漏れて艶やかな光を返した。

「どうした、銀子？」

「電気……、見えたから」

顔を襖で隠しながら銀子は鋼介の方を見た。

どうやら光が廊下に漏れていたらしい。

「こんな時間まで起きとつたんか？」

時刻は午前1時を過ぎていて。子供が起きておくには余りにも長い時間だつた。

鋼介の心配する声に銀子は首を振つた。

「トイレに起きた」

「そか。せやつたら、さつさとトイレ行つて寝なさい。子供が起きていい時間じゃないからな」

銀子に背を向けた鋼介は布団を広げる。

しかし、布団を敷き終わり、襖の方を見ても銀子は全く動いていかつた。

「もしかして、一人でトイレは怖いか？」

最初に思い付いた理由を尋ねたが、銀子は首を振る。

「じゃあ、どうした」

「……一人、……寝れない」

「一人、桂香は……ああ、そういうえばテスト期間だつたか」

銀子は桂香と一緒に普段寝ていた。

今は桂香がテスト期間中で、試験勉強をしなければならないということで、例外に別々に寝ていた。

「でも、別々に寝るんは初めてじゃないやろ？桂香がテストの時は黙つて別で寝てたやん？」

責めていると取られないようにして声が絞り出される。

十分過ぎる沈黙を置いて、恥を堪えるようにして声が絞り出される。

「そうか」

平静な表情で言葉を返した鋼介だが内心では、その子供らしい理由

に驚いていた。

普段、自分や弟弟子の八一相手に生意氣、もとい、剛胆な態度で、今みたいな年相応の反応は新鮮だった。

「しゃーないなあ」

頭を搔きながら鋼介は半歩下がり、部屋に入るように促した。

銀子は鋼介の身体をくぐり抜けて部屋に入ると中央に置かれた将棋盤に吸い寄せられるように座る。

黄色いパジャマが螢光灯の光で色を増した。

「今日はもう終いや。それに今将棋なんか指したら目が冴えて寝れんようになる」

銀子が頬を小さく膨らませる。

「んな顔しても駄目や」

鋼介が人差し指で膨れた頬をつつくと銀子はそれを叩いて払い除けた。

特に話す事も見つからず沈黙が部屋を包む。

指さないと言われても銀子の視線は将棋盤から離れず、本人にその気はないのだろうが、催促されている気分だった。

「一局だけやぞ」

溜め息を吐いた鋼介を、銀子は目を爛々とさせて見た。  
盤に駒が並び、お互いに向き合って頭を下げる。

先手の銀子はいつも通り穴熊に持つていこうとしていたが、鋼介はその前に仕掛けた。

それよりも彼女の指し筋が鋼介の気に触った。

どことなく今日の対局相手に似ているのだ。

直接戦つた数は片手で数える程もないが、いくつかの棋戦での対局の検討は見た事があつた。

よく見れば違いはあつたのだろうが、アルコールの回つている鋼介にはそこまで頭が働かず、直感的な感想が思考を支配する。  
駒を指す手に力が入る。

銀子が駒を指すとノータイムで指し返すという大人げない将棋を指していた。

加えて無意識に勝負の気合いで望む鋼介からは殺氣立つた雰囲気が放たれている。

駒を指す銀子の手が一手毎に重くなり、最後は気圧されるように盤上に手をやれなくなる。

「負けました」

頭を下げる銀子に鋼介は見下ろすと、

「服を脱ぎなさい」

ぽつりと呟いた。

「え？」

頭を上げた銀子の顔は呆然としている。

「前に負けた時に裸になつたことがあつたやろ。あれや、あれ」  
たつぱりと時間が空き、銀子の手がパジャマのボタンに伸びる。  
ボタンを全て外し、上着を脱ぐと立ち上がり、ズボンを脱いで座ろうとした。

「パンツもや。後、上のシャツもついでに脱ぎい」

銀子は戸惑うように鋼介を見ながらもショーツに手を掛けた。  
ゆつくりと踝まで下げて片足ずつショーツから足が抜かれる。  
シャツも脱いだ銀子は秘所を手で隠していた。

「手え、横に」

鋼介の低い声に操られるように銀子の手が秘所から離れる。

「足、開きい」

声に従つて銀子は肩幅に足を広げた。  
薄い肉の双丘が左右に開く。

恥ずかしそうに顔を赤くして銀子は鋼介を見ていた。  
「そんじや」

指が銀子の秘所に伸びる。が、座つた姿勢では盤を挟んだ先にいる  
彼女には届かない。

それに加えて、手が自分に向いた瞬間銀子は後退り距離が更に開いていた。

鋼介は空を切つた手を返して見た。

「銀子」

鋼介は自分の膝を叩いて彼女を招き入れる。

しばらく考えるようすに視線を泳がせていた銀子はのつそりとした動きで鋼介に近寄ると彼の膝の上に腰を下ろした。

膝を抱える手を離させ、曲げたまま左右に開かせる。

内腿に力が入って抵抗を見せたが、鋼介の手が膝の上から腿に来てと身体を強ばらせて抵抗が弱くなる。

手は更に腿を伝い陰核に触れた。

「クリちゃん到着や」

鋼介は陰核を優しく爪で引っ搔いた。が、

「？」

銀子は自分の股、正確にはそこに触れている鋼介の指を不思議そうに見ていた。

「何も感じんか？」

銀子が頷く。

「そうか」

鋼介は室内を見回す。だが、将棋中心に生活している彼の部屋にはそういう道具は一切無かつた。

どうしたものかと下を向いた鋼介の目に手持ち無沙汰そうにグーパーと動かしているのが見えた。

その手を取り、陰核の前に持つてくる。

変だとは思っている様子だが、危険は無いと判断したのか銀子は抵抗しなかつた。

普段から突拍子もない行動をしているからかもしれない。

「何？」

自分の陰核に人差し指をぴたりと着けさせられた銀子はその様子を見ながら尋ねる。

鋼介は自分の人差し指を銀子の人差し指に重ねて、彼女の指に陰核を刺激させる。

「こうやって、自分で気持ちいいところ搔いてみ」

しばらくすると鋼介は自分の指に抵抗が無くなり離す。

離しても銀子の指は一人でに陰部を弾き、膝が動いていた。

「んつ、んつ」

俯いている彼女からは可愛らしい声が漏れる。あえいでいると言うには余りに拙く、漏れ出る声が抑えきれない様子だつた。鋼介は銀子の空いている手を彼女の胸の上に重ねて、隙間から自分の指を通して、銀子の乳首を撫でる。

「はあ」

溜め息のような声が漏れた。

銀子はそれが気持ち良かつたのか鋼介の指を払い自分でも乳首を撫でたが、あまり気持ち良くならないらしく、鋼介の手を取ると自分の乳首の上に誘導する。

「気持ちええか」

銀子がせがむように何度も頷く。

鋼介が乳首に触れている指の動きを早めると、陰核を搔いていた銀子の指も早くなる。

「あつ、あつ、ツアツ」

本能的とも思える声で鳴いていた銀子の身体が小さくなる。  
足を閉じて、間に挟まれた腕を固くする。

胸にあつた手は臍の所まで痙攣で動いた。

「ふう、ふう、ふう」

鋼介に背中を着けて身体を預けた銀子は肩で息をしている。

イツたかを聞こうと思ったが、銀子にその手の知識があるとは思えなかつた。

「どうや？この遊び好きか？」

どう尋ねるか考えて、答えやすそうな言葉で質問した。

身体の力が抜けて一息吐いている様子だつた銀子は小さく頷いた。

――

「お父さん」

声を掛けられた鋼介は身体を動かそうとして節々が傷む。  
いつの間にか寝てしまつたらしく、その寝方も将棋盤に臨んだ格好

だつた。

「お父さん、そんな姿勢で寝たら身体痛めちやうよ」  
襖から顔を出した娘の桂香が心配そうに注意する。

「ああ。今度から氣い付ける」

首を揉みながら鋼介は答えた。

起きたばかりで目の焦点が合わない。

鼻に届く微かな味噌汁の匂いだけが今の時間を示していた。  
眼鏡を外して凝っている眉間を揉み解し、綺麗に掛け直す。  
目を細めて焦点が合ったのを確めると襖の方の桂香を見た。

「もう行くんか？」

「もうも何も七時半過ぎてるよ。予定が無いからってだらだらしない」

「はあい」

大きく伸びをした鋼介が間延びした答えを返す。

「八一は？」

「もう学校に行つたわ」

「そうか」

「じゃあ、私も学校行くから銀子ちゃんのお世話お願いね」

「つ！」

鋼介は冷や水を頭から被つたように背筋が寒くなる。

既に桂香の姿は無く、パタパタという足音も離れていた。

あわてて周囲を見回すと銀子が鋼介の布団で寝息を立てていた。

掛け布団から黄色い服が覗き彼女がパジャマを着ていることが判り、鋼介はほつと肩を撫で下ろす。

改めて思い出すととんでもない事をやつてしまつた。

酔つていたとはいえ少女に手を出してしまつとは。

しかし、未だに手には銀子のすべすべの柔らかい感触が残つていた。

「まあ、銀子も嫌がつて無かつた、よな？」

掌を見ながら誰かに尋ねるようにぽつりと鋼介は呟いた。

立ち上がり、固まつてしまつてゐる腰を捻りストレッチをする。

ゴキゴキと不健康な音を立て、代わりに腰が軽くなつた、ような気がした。

顔を洗つて台所に向かうと二人分の食器が流し台の上に水が張られた状態で置かれている。

引き出しからインスタントの味噌汁を二人分取り出すとその内のひとつを漆塗りの黒い椀に入れ、お湯を注ぐ。

白味噌の匂いが鼻をくすぐる。次いで具材の昆布の香りが続いた。

普段は桂香が味噌汁を作つてくれているが、試験期間中は勉強に集中させる為にこうしてインスタントの食材をフルに活用していた。

昼食や夕食は近所の惣菜屋で済ませていた。

冷蔵庫から梅干しの入つたパックを出し居間に朝食を並べていく。

「おはよう」

眠そうに目を擦りながら銀子が挨拶をしてきた。

「おはよう。顔、洗つてきや。朝飯にしよう」

銀子は頷き、ポテポテとした足取りで洗面所に向かつた。

鋼介は銀子の分の朝食も並べる。

「いただきます」

顔を洗つて来るのを待つて二人は手を合わせた。

それにして、いつもと変わらない様子に鋼介は胸を撫で下ろす。眠そうにうつらうつらしながら白米を食べる姿はモキュモキュと音が聞こえてきそうで、なんとなく小動物っぽい。

あちこちに跳ねた髪を気にする様子もなく白米を食べ進める。

「銀子、寝ぐせがついとる「つ！」

伸びた手に銀子は口に運んでいた白米を箸から落とした。

鋼介の手を見ながら小さく震えている。

「あー」

寸での所で手を止めた鋼介はそのまま手を引っ込める。

「あー、昨日は悪かった。大分酔つてたんや。正直ほんと覚えどらん。でも銀子にとんでもない事を教えたのだけは覚えとる。すまんかつた」

落とした派遣を拾いながら銀子は頭を下げる鋼介を見た。

「…………もういい」

テーブルに残った米粒を皿に擦り付けた銀子がポツリと呟く。

「ついでに、昨日の事は内緒にしてくれんか？バレたら桂香にしばかれる所の話や無いから、頼む」

拝み倒す鋼介をぼーっと見ていた銀子はやや時間を置いて、「わかつた」

とだけ小さく呟き食事を再開した。

いつもと変わらない仏頂面だが、どことなく嬉しそうに見えた鋼介だつた。

銀子は空になつた食器を流し台に持つていく。

先に食べ終えた鋼介が食器を洗つていた。

「銀子、洗い終わつたら一局相手したるわ」

鋼介は蛇口から落ちる水音に負けない声を上げる。

返事は無かつたが、まあ、聞こえてるやろと納得して残りの洗い物に取りかかつた。

いつもなら、洗つていたら無言で銀子が手伝つてくれるが、今日は台所に来る気配は無い。

昨日、もとい今日の深夜の事を思い出しながら洗つた食器を布巾で拭いた。

洗い物を終えた鋼介が居間に戻つて来ると、

「銀子……」

テレビを付けずにマグネット将棋盤を広げている弟子の名前を呼んだ。

俯いたまま顔を上げないこの弟子は僅か振り子のように規則的に前後に揺れていた。

いつもなら駒を握る手を股に差し込み、もう一方の手は胸の上にある。

いつも寡黙な少女は、いつもなら考えられない声を出していた。

「あつ、んつ、あつ」

昨日の今日でコツを掴んでしまつたのか、股間にある手の動きと声が運動している。

乳首はあまり感じないのか当てているだけで手の動きはほとんど無かつた。

テーブルを挟んで鋼介は対面に座る。

やつと存在に気づいたのか、銀子は股にあつた手を放し駒を握つた。代わりに胸にあつた手を股に入れていたが。

「銀子、股に手をやるんはワシと「人きりん時だけな」

「？」

どうして、という風に銀子が首を傾げる。

「お前ん齢でオナニーなんてしどつたらワシがお前に手を出したと思われてまう。事実やけどそれは非常にまずい」

「オナニー……」

噛み締めるようにゆっくりと銀子が口を動かす。

「でも」

こんな気持ちいい事を止めさせるのといった様子で言葉を詰まらせた。

「誰もするなとは言わん。でも、他の人にしてるところ見られたらまずいつて話や。せやからオナニーはワシと一緒に居る時だけや」

尚も銀子は不満そうな視線を鋼介に送る。

「しゃあないな。そしたら手ぶらでオナニー出来るオモチャ買うてきたるから、人前でどうしてもオナニーしたくなつたらそれ使いい」良くな解らないという表情をしながらも銀子は了解とばかりに小さく頷いた。

そんなに楽しみにしてた？

朝、清滝家の食卓は全員揃つて朝食を摂つていた。  
珍しい光景ではない。子供三人はいつも一緒に食べ、鋼介も一日酔いではない日は朝は早い。

「八一くん、次、醤油もらえる？」

「うん」

八一が桂香に醤油の入った小瓶を渡す。

「ありがとう」

礼を言つて桂香は自分の卵焼きに醤油をかけると隣に座つている銀子の卵焼きの脇に小瓶を置いた。

「ありがとうございます」

眠そうに目をしばたかせながら銀子が礼を口にする。

時刻は午前七時前、テレビからは今日の運勢をアナウンサーが大袈裟に声の喜怒哀楽を作つて話していた。

試験中の桂香に代わつて朝食は鋼介が用意していた。白御飯と最近は上手く焼けるようになつた卵焼き、それにインスタントの味噌汁のシンプルなメニューだつた。

朝食を食べ終えると鋼介は新聞を広げた。スポーツ欄を読み、政治欄に目を滑らせ、地域ニュース欄で話の種を探す。

桂香と八一は揃つて登校していき、家には鋼介と銀子の二人だけになつていた。

順位戦やタイトル戦がある日は自分の将棋道場に預けて、昼から行くであろう八一と一緒に帰つて来るというのが一つの流れになつてゐる。

日差しが強い日は桂香と一緒にタクシーで帰る日もあつたが、季節が過ぎて暑さに一段落着いた最近はそんな必要もなくなつてきていた。

テレビに映る謎の人形劇を銀子は眺めている。おもしろくて見ているわけでは無さそうで、テーブルの上に置いてあつたりモコンでチャンネルを次々に変えていくき、結局見るもののが無かつたのか電源

を切った。

「ねえ、ししよう」

銀子が新聞に目を落としている鋼介の肩をつつく。

「ん、なんや？」

「……おもちゃ、まだ？」

恥ずかしそうに咳く銀子の頭に鋼介は手を乗せる。

「ああ、すまんすまん。買ってきて渡すん忘れとつたな。ちよつと待つとき」

鋼介は立ち上ると自室に向かい、小さな紙袋を手に戻つくる。

「ほい」

銀子は渡された紙袋を開けて中身を取り出す。

「？」

銀子が首を傾げる。紙袋から出てきたのは紙箱とショーツだつた。  
「ま、見た方が早いか」

鋼介は銀子から箱を取り上げて中からパッケージに描かれている物と同じ黒いローターを取り出した。

コントローラーにはコードで繋がつておらず、リモートで動くタイプだ。ローターからは15センチあまりの紐が伸びている。

「ほれ」

銀子は渡されたローターを掴むと、使い方を考えるようにじつと見つめている。

鋼介がコントローラーのスイッチを押した。小さな液晶の画面が青く光り目盛りが一つ表れる。

遅れて震えるローターに驚いたようで、銀子は掴んでいた手を離してローターを畳に落とした。

振動する橈円の球体を鋼介が拾う。

「びっくりしたか？ これが約束しとつたおもちゃや。これでクリちゃんいいじつたら気持ちええやろうなあ」

銀子が喉を鳴らす。

「さつそく着けたるからこっちに来なさい」

あからさまににやけた顔で手招きする鋼介の正面に銀子は座つた。

「それじゃ寝てくれるか」

銀子が畳に寝そべると鋼介は彼女のワンピースのスカートを捲り上げた。

白い綿パンが目に入つてくる。真ん中に飾りの小さなりボンがあり、そのしたにはアルファベットが並んでいる。

パンツ越しに銀子の大陰唇に触れる。

少女らしく肉付きの薄い肉花は脂肪を突いている感触は無い。しかし、弾力の低いのが却つて背徳感を助長させる。

腕を曲げて両手を上げた銀子が頭をもたげて不安そうに見下ろしていた。

「そんな顔すな。別に痛いことするわけやないんや」

「うん」

返事をした銀子の表情は晴れない。

鋼介はショーツの両端に手を差し込んだ。

「腰、上げてくれるか」

「うん」

銀子がブリッジの要領で腰を浮かせると鋼介はショーツを下げた。腰を畳に着かせると、今度は足を天井に向けさせて、ショーツを脱がせる。綿の生地は中のゴムの力でたわんで小さくなつた。

足を左右にがに股に開かせる。

日焼けしても赤くなるだけの白い玉のような肌は弾力があり、指に吸い付く。

普段のむつりとした顔を崩し、赤面して恥ずかしがる反応は非常に愛嬌があった。

両足を開いた拍子で未熟な大陰唇が左右に開き、その奥からピンクの小陰唇と膣口が顔を覗かせる。大人の物とは比べられない程に小さな小陰唇は彼女的小指くらいの厚さしかない。

二枚の襞の奥でぱくぱくと動く膣口は鋼介の小指でもぎゅうぎゅうになつてしまふんじやないかと思うくらい小さかつた。

「我慢しよう思うとつたけど。銀子、舐めるで」

「え？」

銀子は言葉の意味がわからないのか呆然としている。

そんな様子をお構い無しに鋼介は彼女の腿を上から押さえると、股に顔の下半分を埋めて膣口を舌でつついた。

「つ?!」

弾かれたように上げていた両手で鋼介の顔を股から離そうとする。しかし、鋼介は前腕で腿を押さえながら、手首を捻つて銀子の腕を掴んで顔から剥がした。

「つ、つ」

目線を上に上げる。銀子の表情を隠すには幼児らしくないスリムなお腹は不十分で、今にも泣きそうに目を赤くして見下ろしている顔が見えた。

慌てて舌を離す。涎まみれの秘所がテラテラと光を返していた。潤んでいた瞳から涙が引いてきたのを見計らい、鋼介は銀子の股に顔を再び埋めた。

少し慣れたのかまだ不安そうに見下ろしてきているが、さつきは退けようとしていた手は鋼介のこめかみにある。舌が膣口をなぞると爪を立てて威嚇するが大した痛みじや無い。

(そろそろ、か?)

こめかみに食い込む爪の力が緩んできたタイミングで鋼介が膣の中に舌を入れる。

「いたつ」

「痛あつ」

銀子と鋼介の声が同時に響く。

眼鏡をしていなかつた鋼介は銀子の指が目に入つたのだ。

その拍子に股から顔を離し、その場でうずくまる。

「あの、大丈夫?」

か細い声で心から心配している様子の銀子が声をかける。

瞬間的な痛みだつたらしく、痛そうな声を出した割には鋼介の方を心配そうに見ていている。

「ああ、大丈夫や」

顔を上げた鋼介は目を手で押さえながらもう片方の手を上げて銀

子に答えた。

「でも」

自分のことのようすに銀子は不安そうな声を上げる。

見ればせつかく引いていた涙が目尻に集まつてきていた。

そのあまりの健気な愛くるしさに鋼介の嗜虐心がくすぐられる。

「……まあ、いたずらしたやんちやにはそれなりのお仕置きせんとい

かんよな、銀子？」

尋ねられた銀子が小さく頷く。

いつの間にか閉じていた足を開かせた鋼介は人差し指を膣に入れた。

内臓特有の柔らかさが指を包み込む。

目をギュッ閉じ、胸の上で両手を組んで耐えている様子の銀子は「痛い、痛い」と口を動かしてはいるものの声は出していなかつた。

その仕草が鋼介の嗜虐心を加速させる。

(それつ)

「くつ!？」

指を曲げて膣壁を刺激すると銀子が驚いたように目を開いた。律儀にも閉じかけた足を開き直す。

(ほいつ。ほいつ)

その様子が可愛く鋼介は何回も指を伸ばしては曲げてを繰り返していく。銀子は指が膣壁に当たる度に身体を固くするが、指を抜こうと離れる様子は無かつた。

「もしかしてお仕置きだから逃げたらあかんとか思うとる?」

鋼介の質問に銀子は小さく何度も頷く。

「そうか」

鋼介は指を曲げたまま膣壁を擦るように腕を引いた。

「痛あ」

声を上げた銀子は組んでいた両手を左右に開き、膝を立てたり寝かせたりを繰り返している。

目尻から涙が流れている。

鋼介は畳に着いている銀子に入れていた指を擦り会わせると濡れ

ているのに気付いた。

(しまつた)

見ると指先に朱色の液体が付着していた。どうやら処女膜を傷つけてしまつたらしい。

(処女膜って一気に破けるんやつたか?)

気付かれないようにティッシュで破瓜の血を拭うと、畳にも付けてしまつた血を拭き取る。幸い流血はごく少量で、ほとんど畳に移つていなかつた。

処女という言葉すら知らないであろう少女の初めてを危うく指で奪いかけたことを焦りながらも、鋼介は脇に放られた今日のメインの品を手に取つた。

「そしたら、今日のメインに行こうか」

「いい」

今にも泣きそうな銀子が即答する。

「お腹、チクチクする」

銀子が言葉を続ける。どうやら傷付けた処女膜が痛いようだ。

「せつかく買つたんや。使わんともつたいないで?」

鋼介は銀子に覆い被さり、足の間から覗く包皮に隠れたクリトリスに、ローターの入つていた紙箱の角を押し付けた。

「絶対気持ちいいから。チクチクするのなんて吹き飛ぶ気持ちよさやから。一回つこうてみよ? な?」

にここにこと笑う鋼介に気圧されるように銀子は頷く。

鋼介は銀子のクリトリスにローターを押し付けてリモコンのスイッチを入れる。微弱な振動が指に伝わると同時に銀子が目を大きく開いた。指が抜かれるまで開いていた足をトラバサミのように勢い良く閉じる。

ローターにやろうかどうか迷つてゐるのか、臍の下までやつて來た両手はあと少しが伸びない。指を曲げては伸ばしてを繰り返した。

「んっ」

幼いながらもしつかりと感じてゐるようで小さな吐息が漏れた。

「気持ちはえか、銀子？」

「……うんっ！」

クリトリスにローターを当てながら尋ねる鋼介に銀子は声が出ないのか頷いて返した。

しかし、身体をよじつているばかりで絶頂する気配は無い。

考えてみたら成長期前の子供に絶頂を期待するのは間違いかもしれないと考えた鋼介はローターを銀子から離した。

「あっ……」

名残惜しそうに銀子がローターを見つめる。

「どうや？ 気持ちよかつたか？」

「……うん」

「そりや良かつた。またしたいか？」

「うん」

指でクリトリスをいじりながら銀子は頷く。

「じゃあ、今日の事は桂香たちには内緒に出来るか？ 出来るならまたしたるわ」

鋼介は質問に頷いた銀子の頭を撫でた。

――――――

「八一くんドレッsing、次もらえる？」

「うん」

八一是持つていたドレッsingの容器を桂香に渡した。

「ありがとう」

受け取った桂香は礼を言つてドレッsingをサラダにかける。

今日の朝食は試験が終わつた桂香が作つている。手作りの味噌汁に玉子焼き、そしてサラダという一見すると試験中とほとんど変わらないメニューだ。

しかし、味噌汁には豆腐に昆布、なめこが入つていてインスタントよりもあつさりしているのに旨みがあり美味しかつた。

キヤベツときゅうりとトマトのサラダは昨日スーパーで買つた惣菜だが、鋼介にはそもそも頭にすら無かつた。

「やつぱり桂香の朝メシが一番や」

「ふふつ、ありがとう。でも、それ私が試験が終わってご飯を作つたら毎回言つてるよ?」

「本当の事やからしやあない」

「あつ、そ」

素つ気ない返事をする桂香だつたがその顔は嬉しそうに笑つていた。

「銀子ちゃんもドレッシングいる?」

桂香は銀子のサラダにもドレッシングをかけようか尋ねる。

銀子は頷く。その顔は何か耐えるように表情が固い。

「大丈夫?」

銀子が何かと我慢する性格なのはここにいる全員が良く知つている。

桂香は心配そうに銀子の顔を覗き込んだ。

「大丈夫」

心配させたくないのか表情をほぐして銀子が答える。その顔には赤みが差していた。

「熱は、無いみたいね」

銀子の額に手を当てた桂香はそう言うと鋼介を見た。

「お父さん、どうしようか? やつぱり病院に連れていった方がいいよね?」

「そうやな。とりあえず昼まで様子を見て熱が上がるようやつたら連れていくわ」

「そう。銀子ちゃん、気持ち悪くなつたら我慢しないでお父さんに言うんだよ」

「うん」

優しく諭すような口調の桂香に銀子はゆっくりと頷いた。

「それじゃ、行つてきます」

「おう」

玄関先まで桂香と八一を見送った鋼介は居間に戻る。

二人が学校に行くと家の中は水を打つたように静かになつた。い

つもなら銀子が将棋盤を出してくるが、今日はテーブルの前で膝に手を着いている。

「いやあ、ヒヤヒヤした」

鋼介が銀子のスカートを捲る。。

銀子はローターと一緒に入っていた白のナイロン製ショーツを穿いていた。股間部には小さなポケットが着いていて、ローターが中で振動している。

モーター音を遮っていたスカートが捲られたことで微かに部屋に響く。

「意外と静かやな」

鋼介はローターを指でクリトリスに押し付けた。

銀子は黙つてそれを見ていた。俯いている横顔は今にも泣きそうにしている。

しかし、それと同時に視線は自身の股間に釘付けになつている。鋼介の指を食い入るように見つめて、正座をしている状態で膝を細かく動かしてローターの位置を調整していた。

口りでMな弟子はどうですか？

パチッと乾いた音を立てて鋼介は駒を指した。

相対している銀子は相変わらず表情は乏しいが、駒に手を伸ばす気配は無く、盤面を読んでいる様子も見られない。

紅く染まった頬に潤んだ瞳をしていたが、これは対局する前からだ。

「いくら負けたからって相手に当たつたらあかん」

突拍子ないが温かい普段と打つて代わり口調は非常に冷淡だった。銀子は鋼介の顔を見れないのか俯いたまま口を結んでいる。重い沈黙の中で盤面は進んでいく。

原因是日課になつている八一とのバーサスだったので、銀子は初めて五タテ、全敗を経験したのだ。

それはプライドを深く傷つけたようで、普段どんなにひどい負け方をしても静かに不機嫌になる彼女が駒を投げた事からも判然としていた。

そうしたい気持ちも解らないではない。棋士は誰しもが負けず嫌いだし、プロを目指すからにはその気性が強いのは悪いことではない。表に出すのも身内であればそこまでの問題は無いと鋼介は思つている。

ただ、駒を投げてしまつたということは反省して欲しかった。

二人が本気でケンカを始める前に八一を買い物に連れていつた桂香に感謝しなければならない。機嫌を損ねた銀子は手が負えない。だからこそ、年上の八一に引いてもらつたのだ。

駒は勝負に使う大切な道具であり、それを雑に扱うのは礼節以前に棋士としての心構えの問題だ。いくら幼いとはいえ甘やかす訳にはいかない。むしろ幼いからこそ徹底して大事にすることを教えないではならない。

それを解らせるために多少荒療治だが一つのやり方を試す。

「こつちに来い」

対局はまだ途中だが、呼ばれた銀子は立ち上がり、鋼介の脇に立つ。

「膝の上にうつぶせに寝なさい」

これから何をされるのか察した銀子は唇を小さく噛みながらも自分の非を理解しているのか素直に鋼介の膝の上に腹這いになる。

鋼介がスカートを捲るとバックプリントされたキャラクターが顔を出した。

「解つどるな？ これはお仕置きやぞ」

銀子の頭がうなだれるように縦に動いた。

それを確認した鋼介は白い綿ショーツに手を掛けると、膝の所まで一気に下ろす。銀子の身体は上半身は膝の上だが下半身は膝を畳に付いた格好のために樂々とショーツは下がつた。

もつちりとしながらもきめの細かい白い肌にはまだ青々とした蒙古班が残っている。

普段は駒に触れる指がまさぐるように白肌を撫でる。

時折首をもたげる銀子だったが、何か言う様子は無い。鋼介の顔のある方向とは逆、さつきまで自分の座っていた方向の駒置きに顔を向けている。

「じゃあ銀子。お仕置き行くぞ」

鋼介が振りかぶると銀子は身体を固くし、その拍子に膝に力が入ったのか尻の位置がわずかに高くなる。

バチンッ

「っ！」

薄い肉付きの内の一一番厚そうな場所を選んで叩くと小気味良い破裂音が鳴り響き、銀子は悲鳴とも言えない声を上げた。

バチンッ

バチンッ

バチンッ

数発しか叩いていないにも関わらず、銀子の肌は赤く染まる。

予想外に赤くなりやすい肌に鋼介はまだ続けようとして上げていた手を下ろした。

普通の少女ならば羞恥と苦痛で泣きそうなものだが、銀子は涙を目

に溜めて泣くのを堪えていた。

(やり過ぎたか)

熱を持った尻に手を乗せながら反省する鋼介。だが、股の間が濡れているのを見つけると気持ちを切り替えた。

「反省したか、銀子」

コクンと銀子が頷く。

「そしたら次は八一の分や」

バチンッ

鋼介は言つてから間髪入れずに手首のスナップを使って赤くなつた場所を狙つて叩いた。

「うつ」

声に構わず何度も打つ。

尻に白い場所が無くなる頃に打ち止めた鋼介は痺れた自分の手を振つた。

「もうせんて約束するなら終いにしたるぞ」

涙を流しながらも最後まで泣かなかつた銀子は真っ赤な顔で頷く。「ワシも好きでこんなことしとるわけやない。それは銀子も解るな？」

銀子が頷く。

「もうせんて言いや。そしたらパンツ履いていい」

「……もう、駒……投げない」

「よし」

鋼介は銀子の横腹を掴んで膝立ちさせてショーツを引き上げる。

そのまま正座しようと膝を曲げる銀子だつたが、尻が踵に着くと跳ねるように膝立ちに戻り、踵が触れた場所を擦り顔を歪ませる。(こりや、まずいな)

痛くない場所を探して何度も正座に挑戦した銀子は結局、割り座：女の子座りをして尻を浮かせて座る。

このまでは痛いと桂香に訴えることは容易に想像ができる。そうなれば腫れている理由を説明しなければならず、事態が露見するのは避けられない。

「銀子、今日は内緒にしてくれるか？」

鋼介は上手い理由が思い付かず、思いきつて正面から銀子に相談する。

しばらく考えるように鋼介の顔を見ていた銀子は、

「……いい」

と言つて元の対局位置に戻つた。

夕食の席でも八一と銀子はお互に気まずそうにしながらも、きっかけを掴めない様子で無言で箸を進める。

能天氣な八一もさすがにケンカ手前まで険悪になつてしまつて振り上げた拳を下せられないのだろう。明日になれば気持ちも落ち着いて銀子を許すだろうが問題は銀子の方だ。

負けず嫌いが行き過ぎて強情な性格な彼女が素直に謝るとは想像しにくい。

いくら八一が年上らしく、下手に出ていても限界がある。

「八一」

「なに、銀子ちゃん」

食べ終えて食器を流し台に持つていく八一を銀子が箸を置いて呼び止める。

鋼介と桂香はひやひやしながら見守る。

「ゴメン」

短く素つ氣ない言葉だったが、八一は意外そうな表情をした後、

「いいよ」

と言つて流し台に向かつた。

鋼介たちは目を合わせてお互いに安堵する。

せつかく高め合えるライバルがいるのに下手に距離をつくられずに鋼介は安心する。

もしここで八一が自分も悪かつたと反省してしまつては銀子の劣等感が増し、八一の方も銀子と勝負するときに無意識でも勝敗を調整してしまう懸念があつた。今夜にでも八一に諭すつもりだつたがそ

の必要はなかつたみたいだ。

とりあえず一安心して自分の分の夕食を片付けると鋼介はコップに注いでいた晩酌の一杯を一気に飲み干した。

「お父さん、飲みすぎ」

厳しい顔をした桂香は鋼介をたしなめて一升瓶を取り上げた。

鋼介は研究の手を止めて時計をみると、12時を過ぎていた。

そろそろ終わろうかと駒を取ろうと手を伸ばした時、襖が開き銀子が奥に立つて鋼介を見下ろしていた。

「どうした銀子。眠れないんか？」

銀子は答える様子は無く、鋼介の隣に座る。彼女の口数の少なさにはなれていが、いつも座る対面ではなく隣に座つたのが鋼介には気になつた。

「ホンマにどうしたんや。あ、もしかしてまた尻叩いてほしいとかか？」

からからと笑う鋼介だった、銀子が膝の上に手を置いかれて声が止まる。

「まさか、アタリか？」

頷くその姿は入ってきた時よりも小さく見えた。

「いや、でも、桂香がいるし」

昼間は家の中に自分たちしかいなかつたからこそ音を気にせずに尻を叩いた。しかし、今は就寝しているとはいえ身近に桂香がいることを考えるトリスクがはね上がる。

万が一にもこの事がばれる事態は避けなければならない。  
「明日、桂香たちがいない時でエエか？」

銀子の身体は全く動く気配は無い。長考している時のよう斜め下を向いている。

(こんな時今までその頑固さは出さんでも。なんとか音を立てない方法は無いか)

鋼介は腕組んで考える。

「そういうや銀子。尻叩かれた時濡れとつたよな？」

「……濡れてた？」

やつと口を開いた銀子は鋼介の顔を見てキヨトンとしている。どうやら言葉の意味が解らないらしく、教えてと言わんばかりの顔で鋼介を見上げた。

「（）や、（）。今はサラサラやけど尻を叩かれて股んとこ濡れとらんかつたか？」

銀子は自分の股間に手をやると、パジャマ越しになぞるようにしてスジを撫でた。

服がたわみが伸びてうっすらと白いショーツが透けている。

痕跡があるはずもなかつたが銀子の手は何かを探すようにスジの上を移動する。

「濡れてない」

「そりや、風呂に入つてパンツ変えたし、時間もだいぶ経つとるからな。そや。前みたいに銀子の中に指を入れて濡れんかつたら尻を叩くつて言うんはどうや？」

「……痛いからやだ」

「前みたいに処女膜破つたり……ゲフツ、痛いことはしないって約束するからな。な、エエやろ？」

「……わかつた」

銀子はそう言うと立ち上がり、恥ずかしげもなく堂々と薄生地のズボンを踝まで下げ、足を抜こうと腿を上げると鋼介が制する。

「すぐに穿けるように全部は脱がんときい」

銀子もこれは恥ずかしいのか、コクリと首を縦に振ると足を下ろすとこれからどうするのという視線を鋼介に送る。

鋼介は盤に座らせようとして思い留まる。昼に駒を丁寧に扱うようになつたのに同じ将棋の道具である盤を自分がぞんざいに扱つては示しが付かない。

盤を端に寄せてスペースを作る。

「（）に寝や」

指指して指示すると銀子は小股で数歩足を進めて出来たスペースに寝そべると、脱ぎかけのズボンが鋼介の膝に当たり足が伸ばせずに

膝を立てた。

いくつあるのか解らないが昼に見たときと同じような綿のショーツを穿いている。桂香もそうだつたようにこの年頃の下着としてはこんなものなのだろう。

「尻上げや」

鼠径部を絞めているゴムが伸びているところから露見することを用心して、鋼介はショーツを膝まで下ろす。

ぴつたりと閉じた綺麗な一本筋からクリトリスが確認できる。つきたての大福のように柔らかそうな恥丘は一際白く見えた。

「したら入れるで」

予想通りの感触の肉丘を割り開いて指を挿入していく。その中は絡み付くように纏わりついで狭い。銀子は目を閉じていたが、膣内を刺激されることの違和感からからひくひくと瞼が動く。

既にその大半を喪失している処女膜を気にせずに指を奥に差し込んでいくと弾力のある壁に触れた。

「つ！」

空を搔いていた銀子の手が止まる。

鋼介はが弾力の表面を指で探し凹み、子宮口に指先を添えた。

「銀子、どこ触られてるか判るか？」

指先で口の表面をくすぐる。

「……お腹の奥」

「痛いとかこしょばいとかは？」

「……無い」

銀子は違和感が我慢できる程度に慣れてきたのか、目を開き、指が膣内を這つても反応は薄くなる。

頬を赤くしている彼女は、膣壁を押されるとさすがに顔を歪めるが、すぐにひきつって止まつた息を深く吐いた。

「それじやあゆっくり動くで」

鋼介の人差し指が少しずつ引き抜かれていく。指はうつすらと愛液らしき物で濡れている。

あと少しで抜けるという所で動きを止めると銀子が頭を上げて鋼介の顔を見た。

「なんや？」

「別に」

銀子が頭を下ろす。

鋼介は再び指を膣内に挿入していくと、今度は細かくピストンを繰り返す。

「はつ、はつ」

最初は無反応だった銀子も幼いなりに感じたらしく、ほんの少し愛液を分泌し息を上げる。刺激が強いようで鋼介の腕に手を伸ばしたが、長さ的に手首を掴むのがやつとでほとんど意味は無かつた。

銀子の身体が痙攣する。伸ばした手を畳に付いて足首が伸びた。身構えていた身体から力が抜けて、深い息をするのもどことなくリラックスしているように見えた。

虚ろな目をして口を半開きにした銀子は余韻に浸るように自分のスジを指でなぞる。

深夜の静寂の中に銀子の息使いだけが響いている。

「イツたみたいやし、これで今日は終いかな？」

# ワレ、弟子ノ秘所ニ突入ス

「土曜日、友達のところに泊まるけど、いい?」

「わかつた」

寝間着を抱えた桂香は廊下から顔を出して居間で晩酌をしていた  
鋼介に声を掛けた。

「それでみんなの食事だけど」

「気にせんでも適当にスーパーで出来合いのもんを買って食わせるか  
ら心配無用や」

「そう。ならいいけど」

同窓会に向かう母親のように家族のことを気に掛ける姿に、声には  
出さないが鋼介は心の中で謝った。

一家の財布を桂香に渡してしまつて久しい。男親だけでは至らない  
ところばかりで、何とか暮らしていたのは桂香がしつかりしていた  
からだ。八一と銀子を内弟子として迎える時に家の切り盛りを桂香  
に任せ、自分は家長として稼いでくるのが主の人間に戻った。

まだ高校生の娘に負担を掛けている自覚がある。それでも自分が  
管理するよりも家庭が円滑に回るのだから仕方ない。父一人子一人  
ならば家庭内別居のようにそれぞれの生活スタイルで過ごせただろ  
う。しかし、年端もいかない子どもを預かっている以上はそうは言つ  
ていられない。身内感覚を持つても、よそ様の子を預かることに  
変わりなく、自分では世話をしきれる自信がない。なので責任は持つ  
ので、桂香に八一たちの生活を任せたのだつた。

将棋差しの娘としてではなく、優しい姉として桂香は実によく世話を  
焼いている。八一は小学生らしく桂香の胸に興味津々といつた様  
子だ。よく懷いている八一に桂香も弟として可愛がつている。

反対に銀子は持ち前の人見知りと働くを取つてしまつて  
いる。同姓だからすぐに仲良くなると思つていたが、気難しい銀子の  
扱いに苦労しているようだ。桂香の方もどう接していいのか測りか  
ねているのか、対応が八一に比べて素つ気ないような気がする。言葉  
数の少ない銀子と、よく話す八一を単純に比較するわけにはいかない

が。

そんな多大な負担を掛けている事実があるので、たまには年頃の娘らしく過ごすことには申し訳なさ半分、心配半分といったところだ。翌日はショッピングに行くと言うので、父親としてせめてもの労いの気持ちで諭吉を少し強引に渡した。

「ゞちそうさん」

会計を済ませて店を出た鋼介の肌を冷えた風が撫でた。日が沈んだ町には一足早く冬の気配が漂う。もう少し暖かい格好をしてきてもよかつたかもしれない。

娘には出来合いを買って食べると言つてしまつたけれど、結局は夕飯は外食で済ませてしまった。

一応は幼い弟子たち連れて買い物には行つた。しかし、商品に目移りしてしまい、銀子がバックに入つたお好み焼きを指差したために、ならばということでお好み焼き屋で夕飯になつた。

「ほな帰ろうか」

店の前の縁石で遊んでいた八一は、食べたばかりだと言うのに走つて帰つてしまつた。

「仕方のないやつや。それじや銀子、ワシんらも帰るとしよ」

「うん」

鋼介は銀子の隣を歩いて帰路に着く。道中で気分を悪くするような季節は過ぎてゐるが、一人で帰るのは心配を掛けると理解しているのか、銀子も避けたりせずに一定の距離を保つてゐる。

車のライトが二人を照らす。住宅街を少し離れた此所は日中でも歩行者は少なく、日が落ちた今は見える範囲に人影はない。

「なあ」

「なに?」

「わざわざワシに合わせてゆつくり帰らんでも八一と一緒に帰つてもよかつたんやぞ」

「大丈夫」

「そうか」

会話が続かない。

「ししよう」

「なんや？」

「八一が寝たあと、ししようの部屋に行つてもいい？」

「別にええけど。ええんか？」

どうやつて誘うか考えていた鋼介だったが、意外な申し出に目を丸くして銀子を見下ろす。八一が寝てからとわざわざ前置きしたといふことはそういうことだ。

本人は何もなかつたように鋼介を見返していたが表情は固く、不安の色を隠せていない。スカートの裾を掴んで強がついていても弄ばれる自分を想像しているのかもしれない。

剛介は銀子に手を伸ばすと、彼女はその手を握つて帰つた。

「痛くないかー？」

「大丈、ぶつ」

幼い秘辱を無骨な指が前後する。膝を立てて寝そべつている銀子の脚が更に左右に開く。

前回の破瓜未遂が相当痛かつたらしく、鋼介の指が奥に進もうとしただけで拳を畳に擦りつけている。脛への侵入具合を気にしているのか鋼介の肩の辺りを見ているが、それ以上先を見る勇気はないらしく、鋼介の腕が動き始めると天井に虚ろな瞳を向けている。

それでも、体内を動く異物の感触には敏感に反応してしまい、指が肉襞を撫でる度に唇を噛んでいた。

傍らにある将棋盤はきつちりと詰まれている。結果はもちろん鋼介の勝利だ。まだ指導の途中だったが、桂香が友達の所に泊まりに行き、八一も寝てしまつていてる状況に、性欲の辛抱が出来なかつた。

盤を退け、銀子を優しく押し倒し、パステルイエローのパジャマのズボンを下ろす。綿のパンツの上から秘割れを指でなぞる。

盤が横にやられた時点での鋼介が襲つてくるのを察していたのか、銀子はいつもの愛想の足りない表情の中に微かな恐怖を隠した姿は年相応の幼女の物だつた。

パンツを下げる、ぴつたりと閉じた秘割れを押しのばす。柔らかい触り心地を楽しみたかったが、銀子の表情に恐怖が増してきたので止める。今日は明確な目的があるので昂りすぎるのは問題がある。

「あー、銀子。今日はお前の処女膜を綺麗にするぞ」

「処女、膜？」

「ここや、ここ」

鋼介が指先で膣口を舐めると銀子の表情が陥しくなる。

「まあ、ほんと無くなつてると思うけど、ここらで一回きちんとやつておかんとな。幸い今までパンツに血が付いたことはないけど、偶然破つて見逃したら一大事やからな」

「痛いの？」

天井を見ていた瞳が鋼介を映す。

「ちよびつとだけな。まあでも、大人になるうちに誰でも経験するもんやし。出来るだけ痛ないようにするからワシに任せてくれんか？」  
「…………うん」

「それじゃあ、ほい」

鋼介がハンドタオルを銀子に差し出す。何に使うのか解らないといつた様子でタオルを眺める銀子の唇を鋼介が指差す。

「噛んどきや」

小さな口がタオルを食んだ銀子の瞳がこれでいいのかと尋ねると、鋼介は満足そうに頷く。

帯を外し、和服の襟をはだけさせた鋼介はトランクスから勃起した逸物を出した。頭では冷静に年上の余裕を持つてエスコートをしようと思つても、生理的な現象はどうしようもない。

久しぶりの出番に逸る愚息をなだめながら、深く呼吸をして昂つた気持ちを抑える。しかし、少し落ち着いた逸物でも幼い秘辱を裂いてしまいそうだ。それほどに銀子の身体は小さい。まだ小学校にも入つていないので当然だが。

興奮して顔が熱い。それなのに思考は冴えていてすぐに代案を導き出す。

逸物を握つて擦る。目の前に最高のオカズがあるのですぐに達しき出す。

てしまう。脈打ち、白濁液が銀子の上着を汚す。

久しぶりの射精に張り切つたのか、予想外に勢いよく飛んだ精子は銀子の顔を越え、彼女の髪を白く染めた。

当然ながら全ての白濁液が髪まで達する事はない。勢いの弱かつた分は銀子の顔を汚し、顔の左に白い液体が縦に点線を書いている。精子が乗つて開けない瞼を震わせて助けを求めるように銀子の右目が鋼介を見下ろす。

ティッシュを渡し、顔を拭くのを待つて逸物を再び秘辱にあてがう。先程よりも小さくなり、頭も冷えてきた感覚はあるが、銀子を弄んでいてはすぐに復活するだろう。落ち着いている今が良いタイミングだ。

「小さなつとるうちに入れるで」

何のことかときよとんとしていた銀子の顔が、処女膜を貫く逸物の衝撃に激しく歪む。さつきまで恐怖の表情を浮かべながらも、どこか他人事のように呆然と行為を受け入れていた銀子は、体に走る痛みに当事者だつた思い出したように鋼介の腕に爪を立てた。

曲げていた足が伸びて踵で畳を叩く。律儀にハンカチを噛んでいた姿に感心したが、よくよく見ると息を吐く余裕もないらしく、鼻息を荒くしていた。

首には細い筋が入り、僅かに頭をもたげている。

年齢的に本来ならば未開であるべき場所に、体格が大きく違う相手を受け入れたのだからその反応は当然なのかもしれない。

銀子の膣内は成長の遅い体と同じように小さく狭い。逸物が收まりきれず根元は外に露出しているのを感じる。

寄る辺ない根元とは逆に、きつく締め付けられている亀頭には銀子の体温が伝わってくる。ぴつたりと隙間なく締めて、逸物を離すまいとしている。正しくは許容範囲を超えて いるのだろうが。

「ふーっ、ふーっ」

体の力を抜こうと銀子が息を吐いている。ティッシュで拭つた後も開かなかつた左瞼を瞬かせ、赤く染まつた顔を反らせた。

以前に尻を叩かれた時にほんの少しだが濡れていたが、今日は愛撫

らしい愛撫すらなく早々に挿入してしまっている。愛液で満たされていない膣内は、鋼介の逸物から供給される先走り汁が唯一と言つていい潤滑油だ。

本来ならば溢れるほどの蜜で満たしてもなお、慎重に事に臨まなければならない。それを鋼介は自身の暴れる性欲に任せて銀子に過大な負荷を掛けてしまつていた。

銀子が苦しそうに爪を立てていた腕をつねるように握つて辞めて欲しいと無言で懇願して来る。

鋼介は前のめりになつて動きを止める。銀子は知るよしもなかつただろうが、腰を振る直前で、彼女にとつては間一髪だつたかもしない。

落ち着いていた逸物も久しぶりの感覚に喜び、決して気持ちいいとは言えない膣肉の中で膨れ上がつている。当初よりも膣を圧迫していく、冷静に考えるとこのまま擦ると膣内を傷付けてしまいそうだ。自分の手に負えない事態には出来ない。そう判断した鋼介は慎重に逸物を引き抜く。途中、カリが襞を撫でると、銀子が幼けな声を漏らしたが構わない。

ようやく体内から異物が去つた銀子は身体を放るように大の字に手足を伸ばし息を吐く。安堵というよりも果然とした表情をしている。挿入前の他人事を俯瞰するようなものではなく、解放されたことに感情が付いてこないらしい。

先程まで逸物を受け入れていた股座に視線を向けているが、首を上げる気力がないのか鋼介に目を向けているように見える。

押し広げられた秘辱は紅潮し、可憐に閉じていた肉弁が大きな口を開けている。

ふと、飛んだ精液が絡んで銀子の髪が整髪剤で固めたように妙な艶が出て いることに気づいた。

「つ！」

髪に触ろうとして腕を伸ばした途端に銀子が震えて顔を反らせる。その姿にはいつもの不遜なまでの気高さは欠片もなく、そこにいたのは大人の怖さを知つた一人の幼女だ。

弟子を風呂に入れよう。（ついでにいたずら）

「落ち着いたか？」

「グスツ……うん」

初体験の感慨や感動、嫌悪すらも判別がおぼつかない年齢の銀子は呆然と天井を見ている。足を動かそうとしたが、股に痛みが来るらしく、表情を歪めて止める。

精子の付いた場所を避けて、鋼介は挿入の激痛に号泣していた銀子の髪を優しく撫でた。目尻には流れ落ちた涙の跡が線になつて残り、食んでいたタオルが首元におちている。鋼介に爪を立てていた腕も今はダランと脱力して万歳していた。

頭に浮かんだ朝まで放置するという選択肢を鋼介は即座に却下する。動きたくなさそうにしている銀子には申し訳ないが、このまま寝かせる訳にはいかない。彼女から放たれる精臭をどうにかしなくてはならない。

「立てるか？」

銀子の頭が横に揺れる。鋼介は彼女を横抱きにして部屋を後にする。暗い廊下を、感覚を頼りに歩いて浴室に向かう。今日は酒は飲んでいないので足取りがしつかりしている。

脱衣場に到着し、電気を付ける。敷物のないところに寝かせるのも微妙な気がしたので慎重に銀子を立たせる。

恐る恐る足を床に着けた銀子は、体重を乗せても痛みがないことを確認すると、鋼介の腕から少しづつ離れてその場に立つた。

先程、足を動かした時が相當に痛かったのか、直立して身動き一つしない。鋼介がパジャマを脱がせるからと、両手を上げさせたのが唯一の動きだ。どんな動きが痛みに繋がるのかわからないのか、身体と相談するように手を上げる。

未だに動けない銀子を抱えて浴室に移動する。浴槽のお湯が少しづかり冷めていたので追い焚きボタンを押して、銀子を湯船に浸ける。

「髪洗うから頭、こっちに向けてくれ」

浴槽の縁に手を着いて頭を向ける銀子にシャワーを掛ける。。

お湯が浴槽に入らないように注意しながら精子を洗い落とす。まだ銀子が自分でシャンプーが出来ないので、洗剤は使わない。注意していくとも咄嗟にボロが出てしまうので、警戒はしそうなくらいが丁度いい。些細なところから桂香に露見する可能性がある。

銀子の髪を流すと、鋼介は自分の身体を洗う。隠しようのない加齢臭を明日に残さないように耳の裏を丹念に洗い流す。寝てる間に再分泌されるのは解っているが、それを蓄積させないことが大事だ。ナイスミドルへの道は険しい。

髪を洗つてすつきりした鋼介は銀子を盗み見る。お湯で温まつて少しリラックスしているようだ。

「銀子、ワシも入るからちよつと退いてくれ」

痛みはもう平気なのか、銀子は素早く立ち上ると浴槽から出ようとする。

「いや、端っこにちよこつと退いててくれるだけでいい」

銀子の肩を掴んで浴槽の端に追いやつた鋼介は湯船に浸かり、膝の上に銀子を乗せて、わざと逸物を彼女の腿の間に通した。

初めての感覚に戸惑いの表情を銀子が見せる。逸物から離れようと足を開くが、鋼介の手が再び逸物を挟ませる。

「しょ」

「女の子が足を開きっぱなしなんははしたないやろ？」

当然のことと言つてゐる風な鋼介の口調に、銀子は自分の股から顔を出す逸物を見た後、反抗するのを諦めたのか湯を搔いて波紋を立てる。

鋼介は銀子を上下に揺らして逸物をしごく。フニフニとした柔らかい腿肉に挟まれて、落ち着いていた逸物が反り上がる。本番を与えられながら、強制的に中断したからか余計に敏感な気がする。

再チャレンスをやろうと逸物を股から引き抜いた瞬間、銀子が浴槽の壁に手を突いて抵抗する。どうやら、鋼介に任せているとまた非道い目に遭うと察したらしい。腕には力が込もっていて、なんとしても挿入だけは避けたいのが解った。

「そんな嫌か？」

膣口前の肉丘を逸物で突つきながら鋼介が尋ねると銀子が首を横に振つて意思表示する。

先程は強行しているので、今度は譲歩する番だ。鋼介は立ち上がりて浴槽の縁に腰掛ける。

いきり立つ逸物を見つめる銀子の様子に、そういえばまともに見せたことがなかつたのを思い出した。

銀子の目の前に逸物を突き出す。

「どうや、立派やろ？」

腹に力を入れて見栄を張りながら鋼介は自慢げに尋ねる。

「八一のよりおつきい」

小学生と比べられても全く嬉しくない。それよりも、どうして八一のサイズを知っているのかが引っ掛けた。

そのことを質問すると、

「お風呂で」

という言葉が返つてくる。

「でも、お前ら風呂は別々に入つとるやんか」

八一が小学校に上がるまで鋼介が一緒に風呂に入つていた。入学を期に一人で入るようになつたが、桂香と一緒に風呂に入つている銀子と風呂を一緒にすることは考えられない。

詳しい答えを求めるど、どうやら脱衣場に洗濯物を持つていつた時にたまたまみてしまつたらしい。恥ずかしがるかと思つていたが、淡々と説明していく姿に拍子抜けだ。

五歳ならもう少し恥じらいがありそうだが、彼女の頭の中は将棋が大半を占めていると思うと納得がいった。その手の話は全て耳を素通りしているのだろう。

そう思うと逸物に血液が集まる。無知なのは解つていたが、もしかしたらもつと深いいたずらが出来るかもしない。

「銀子」

名前を呼ばれた銀子は鋼介を見上げる。

「咥えてくれるなら股んどこに入れんはやめとくけど、どうする？」

鋼介は逸物を握つて迫る。そろりそろりと鈴口が近付き、先端が唇に触れたところで銀子は目を閉じて口を開けた。

噛まれないように注意しながら逸物を侵入させていく。薄く小さな乳歯の触れ心地は切れ味の悪い刃物のようだ。

陰毛の毛先が銀子の鼻をくすぐる。口内が小さいために逸物が收まりきらない。口が大きく開いて、唇の色が薄くなっている。

舌がカリの裏を撫でる。性技というわけではなさそうだ。触つても安全だと判断したのか舌を密着させてきた。下顎に着けたままは疲れるらしい。

「そつと口閉じて。それからストローでジュースを飲む感じで口ん中の空気を吸い込んで……、そうそう、そんな感じで頬つぺたがペちやんこになるくらい口ん中の空気を抜いて」

鋼介の指示通りに銀子は逸物をくわえて頬がくぼむほどに口内の空気を吸い込む。加減がわからないらしく首に筋を浮かべて顔を赤くする姿は、いかにも真面目な彼女らしい。限界だったのか逸物を締める気圧が緩み、銀子の頬が元に戻った。

しかし、銀子には精一杯でも鋼介には刺激が足りない。寸止めした逸物でも幼女の拙い口淫では果てるには足りなかつた。

鋼介は銀子の頭を掴み、ゆっくりと前後させる。最初は動きを解つてもらうために逸物はくわえるだけだ。

「えらいえらい。前歯が当たらんように注意しとるな。次は舌で先つちよをペロペロつてしてみ」

銀子の目の前に再度逸物を晒す。今度は彼女のよだれにまみれて光っている。口の中が乾いているのかよだれが長い糸を引いて湯船に落ちた。

鋼介は自分の身体が冷えているのに気がつく。胸下まで湯船に浸かっている銀子と違い、膝下までしか湯に浸かっていないので当たり前だ。一度しつかりと湯船に浸かっていたので湯冷めしている。

「まだいろんなしたいけど、しゃーない。銀子、口を開けて舌出してくれ」

銀子が指示通り大きく口を開けて舌を出すと、鋼介は逸物を擦り始

める。

数分擦り「うつ」と声を上げると同時に銀子の口の中に精子が飛び込んでいく。数滴が入った段階で危険を感じたのか銀子は口を閉じた。

「お湯が汚れるから手のひらに出しなさい」

下を向いた銀子は手を皿にして白濁液を吐き出す。入ったのは数滴だったが、口から出てくる量はそれより明らかに多く、濁りも少ない。おそらく大半は彼女の唾だろう。精子が不味いというのは本当らしい。

白濁液を捨てようと湯船の外に伸ばす銀子の手を鋼介が掴む。

「せつかくやし飲んでくれんか？ 不味いかもしれんけど、身体に悪いもんじやないし」

まだ味が残っているのか、銀子の舌が口の中を動くのが判った。

「いや」

当然ながら拒否される。不味くて吐き出したのに、それをもう一度口に入れ、且つ飲み込むようにといふのはとても従えないだろう。どうしようかと悩み、銀子を見ていると、彼女が寝る前によく桂香にホットミルクを作つてもらつてゐるのを思い出した。

「風呂から出たら口直しに蜂蜜ミルク作つたるから、な？」

いつもよりもほんの少しだけ豪華になるデザートに銀子が決断が揺らいでいる。自分の手と鋼介を交互に見る。鋼介は約束は守るとばかりに力強く頷く。こんな条件で飲んでくれるなら安いものだ。

答えが決まつたのか、手のひらに舌を伸ばす。一気に飲んだ方が楽だと思うが、銀子は猫がミルクを飲むようにちびちびと啜る。

「うまいか？」

万に一つも肯定されないと解つていながらも、鋼介はそう聞かずにはいられなかつた。

期待通りに銀子から「不味い」の答えが返つてきただことに満足した。

## 風呂上がりにもう一回

風呂上がり。鋼介は頭を拭いたタオルを肩に掛けて、約束の蜂蜜ミルクを作る為に冷蔵庫から牛乳を取り出した。

よく冷えた牛乳を湯飲みに注ぐ。吸い込まれるような白色が容器の七割ほどを満たす。

次に暗所から蜂蜜を入れたガラス瓶を取り出し、蓋を開ける。とても濃い飴色で味も濃厚なその品は地方に指導に行つた時に貰つた物で、後で値段を調べるとかなりの高級品だつた。

銀子と八一には開封した日の朝にメープルシロップ代わりに口にしたきりだ。セコいと思われても、子供の感覚で消費されではあまりにもつたいない。そう思わせる一品だ。

白い寝間着に着替えて髪を拭いている銀子も、苦労した末の対価にどこか嬉しそうだ。髪を叩き拭きする手が心なしか弾んで見える。

スプーンを琥珀色の液体に差し込む。救い上げる量以上の重量を感じながら持ち上げると、先端の壅みに瓶に入つていた時よりも光沢のある蜜が乗つていた。溢れる蜜も滴になることはなく、良く粘つていて、瓶に糸を落としている。

壅みを返し、ミルクに蜂蜜を投入する。トロリとした液体が穏やかな波紋を立てて白色の中に消えると、スプーンをマドラーにして混ぜた。

ふと、コンロが目に入る。どうせならレンジで作るよりも、火に掛けたほうが美味しそうだ。

戸棚から小さな鍋をコンロに置いてミルクを移すと、湯飲みのだけでは少なくなそなので、適当にミルクを足して火に掛ける。ついでに蜂蜜も追加しておく。

甘い香りが広がる。中火で温めつつ、蜂蜜がきれいに溶けているか鍋を傾けながら確かめる。

どこにも琥珀色の固形物が残つていないので確認して鋼介は湯飲みにミルクを戻す。もう一つ、自分の分を用意しても、鍋にはまだ一

一杯分くらいは残っていた。

「ほい」

湯飲みを銀子に手渡す。両手で受け取った銀子は水面を見た後、湯飲みを傾けてちびちびと飲む。

銀子の後ろに回つて髪の仕上げ拭きをする。これもいつもは桂香がやつてるので、鋼介もそれに倣つた。

「どう?」

「おいしい」

表情は見えないが、リラックスした声に、鋼介は肩の力が抜けるような気持ちになる。浴室の一件の余韻が残っていたのか、自覚しない内に気を張つていたようだ。

まだ奥に水気の残つている髪を梳るようにタオルで撫でていく。細い髪質は水分を拭き取りやすく、普段はする機会のない鋼介でもすんなりと乾かせた。

ゆつくりと味わつて飲んでいた銀子だったが、途中からは湯飲みの角度が鋭くなる。a

「飲んだか」

「うん」

一人言のつもりだつたが銀子に返事をされる。見れば、銀子の顔がもう一つの、鋼介の湯飲みを捉えていた。一杯では足りないようだ。  
「飲むか?」

「うん」

ついでに用意した物なので、渡すのは構わない。

ただ、ここで好きなだけ飲ませても良いものだろうか。アメの量はよく考えなくてはならない。

そう思うと、股間に血液が集まるのを感じた。考えるより先に答えは出している。

「ええけど、こっちのお願いも聞いてくれるか?」

「…………うん」

鋼介が隣に立つたことで「お願い」がどんなものか察したのだろう。長い沈黙に幼いなりの葛藤があつたことが窺える。

「脱がしてくれ」

着物をはだけさせて、トランクスを露出させて銀子に迫った。臨戦態勢の逸物が幕を張つている。

鋼介の方を向いた銀子は膝立ちになると、トランクスに手を掛けてのそのそと下ろす。が、

「下りない」

逸物に引っ掛けると早々に諦める。

「もう少し頑張つてみようか」

鋼介に手を取られ、銀子の両手が再びトランクスを掴む。今度は鋼介の補助でゆっくりと下ろしていく。

「つ!?

飛び出してきた逸物に銀子は驚いたように瞬いて、腰を落として割座に座つた。

「何ビッククリしとるんや。さつき見たやろ?」

浴室のときと同様に逸物を銀子の目の前に出して迫る。しかし、さんざん渡つた末にすんなりと受け入れた先程と違つて、払い除けて拒否する。

「どうした? さつきみたいにくわえるだけやぞ」

銀子は逸物： の根元に伸びる陰毛を指差した。

「それ

「毛?」

陰毛を摘まむ鋼介の指を銀子は真剣な顔で見る。

「汚い」

「汚いって、さつき風呂場で洗つたばかりやぞ」

「それでも汚い」

「気にしそすぎや」

「汚い」

「なら下を使うか?」

「つ!」

秘所を鋼介は足の指で触ると、挿入された時の痛みを思い出したのか銀子は顔を曇らせた。

鋼介は棚からハサミを持ち出す。銀子の正面に腰を下ろして陰毛を切り、ちぢれ毛をティッシュに乗せる。

「ん？」

視線を感じて鋼介は顔を上げると、銀子が慌てた様子で顔を背けた。自分にはまだ生えていない部位の体毛に興味があるのかかもしれない。

「やつてみるか？」

鋼介の差し出したハサミを受け取った銀子は、恐る恐るとした調子で陰毛を切っていく。完全に任せるのは不安なので、手を添えて補助する。

銀子は、剪定しているのとは逆の手で縮れ毛を摘まんでいる。ハサミで切り離されたそれを、鋼介の真似をするようにティッシュに乗せていった。

「もうええやろ」

幼女に剃毛を手伝わせるという行動は、暴力的なまでの性衝動を視覚に訴える。

斑に刈られた股間を払つた鋼介は、銀子の頭を掴むと股座に引き寄せた。

「これで咥えてくれるな？」

身体を反らせて逃げようとした銀子だったが、やはり大人の腕力には抗い切れない。要領はしっかりと身に付いているらしく、口内に逸物が侵入してくると、食い縛っていた歯を開いて迎える。

小さな口の中を逸物が前後する。

鋼介は短くなつた陰毛に触れる。伸びていたときにあつた弾力がなくなり、プラスチックの芝生のような触り心地だ。

銀子の方も、毎回ではないが、深くくわえる時に毛先が鼻先を突いていて、どこか不快そうだ。それでも、浴室のときよりも深く呑み込めている。動き事態は鋼介の腕からの指示に任せているので本人は気付いて無さそだが。

喉を突いてみたいという悪辣な誘惑を突っぱねる。さすがにそこまでハードなプレイを今の彼女に強いるのは酷というものである。

浴室の時と同じく、自分の手を使つてファニーツシュを迎える。

「銀子つ、口開けつ」

銀子は顔に飛んでくるのが嫌なのか、浴室の時より大きく口を開ける。

逸物から精液が吐き出される。銀子の要望通り、すべて彼女の口の中に。

「ちよい待ち」

当たり前のように精飲しようとした銀子の喉を鋼介はそつと掴んだ。飲み込む様子がないのがわかるとすぐさま手を放す。

「せつかく甘いもんがあるんやから、口ん中思いつきりまずくしてみんか？」

銀子は首を横に振る。鋼介の言わんとしていることが理解しているようだ。

鋼介は構わず話を続ける。

「何も難しいこと無いぞ。ただ、うがいするだけや」

先程よりも銀子は激しく首を振る。しかし、精液で膨らむ頬袋は萎むことはない。

「してくれたら吐き出してええから。な、頼む」

真剣に頼むと意固地になつて断られるかもしれない。そうなると後から同じように頼んだ時に意固地になつた時の感情を思い出しても拒否される可能性があり、それは非常に面倒だ。

両手を合わせて鋼介は、断つても構わないといった感じで軽い調子で頼む。

「せやけど、ワシはすぐ見たいっていうんは忘れんとつてくれな」

「……」

悲壮感に満ちた雰囲気で銀子はゆつくりとした動きで精液で口の中をゆすいでいく。浴室での発言を証明するように今にも泣きそうな顔をしていた。

「もつと音が出るように。空氣とよく混ぜてうがいするんや」

銀子は頬を左右交互に大きく膨らませてグチュグチュと下品な音が響かせる。

「もうええかな。そしたら口ん中見せてくれるか」

銀子の口内には大きさの異なる泡が白濁液に浮いている。早く吐き出したいのか、視線でティッシュを差して鋼介を急かした。

「よう泡立つとるな。せつかくやし、飲むか？」

口を開けたまま、銀子は首を横に振る。嫌悪しながらも、溢さないように気を付けているのか、小刻みに動くので口の中の精液が左右に波を立てた。約束と違うと言っているような気がした。

「……」

「な？」

膠着した空気の中、鋼介は銀子の両の肩を叩く。ここで拒否することを許さないと言外に圧力を掛けながら。

口を閉じた銀子は瞳を泳がせて試案している。居間から逃げたいのか、鋼介から離れようとしたが、肩をしつかりと拘束されている為に不可能だった。

やがて、覚悟した人間がする真剣な表情を作ると、一息に飲み下した。浴室でちびちびと飲んでいたが、やはり一氣の方がが本人も楽なようだ。

口をもごもごと動かしている。おそらく口内の精液の余韻を唾で洗い流しているのだろう。しかし、そう簡単にこびりついた精の味が落ちるとは思えない。舌に馴染んだ分は味覚こそは麻痺すると思うが、息を吐いた時には容赦なく精臭が嗅覚を刺激するだろう。栗の花と形容する人もいれば、イカ臭いと愚痴を溢す人もいる。銀子はどうだらう。

「鼻で深呼吸してみ？」

銀子は深くゆっくりと深呼吸すると顔をしかめた。息を吸うときはそもそもなさそうだが、吐くときには胃から漂う悪臭が鼻腔を通った事が原因だろう。どうやら彼女の感覚は後者を選んだようだ。早く飲ませろと目が訴えている。

「よう頑張つたな」

銀子は労いの言葉と共に差し出したミルクを口に含むと、口内をすいでから飲み込んだ。本当は吐き出してしまいたいのだろうが、鋼介

がどんな無理難題を言つてくるのか分からぬ以上、さつさと体内へ入れてしまつた方がいいと彼女も理解しているのかも知れない。

「もう一杯飲むか？」

「飲む」

ノータイムで返ってきた答えに鋼介は腰を上げた。

「おはようさん」

居間でテレビを見ていた八一に挨拶した鋼介は朝食の支度を始め。桂香に頼れないので食事は自分で作らなくてはならない。小さい弟子たちに自炊を強いるのは大人としても、内弟子を持つ師匠の面子としても許せなかつた。

寝不足で重い体で台所に向かう。昨夜ホットミルクを作つた鍋が目に入る。怪しまれないように、あの後すぐに洗つていたのを思い出す。これほどに用心深い行動を取つているのには自分でも驚きだつたが、露見すれば全てを失うのだ。可能性は積極的に潰していく。

銀子の姿が見えなかつたので、彼女の分の茶碗は用意しなかつた。遅くまで起こしていたのでまだ寝てるのだろう。

「八一、もう道場行くんか？」

鋼介は食べ終えた食器を洗いながら、居間で靴下を履いている八一に声を掛ける。

「うん」

「誰もおらんのやないか？ つていうか開いとるんか？」

現在の時刻は朝の八時半を回つた所だ。いくら休日で人が集まりやすいとは言つても、こんな時間から道場が空いているのか疑問だ。今の道場の営業時間を鋼介は知らなかつた。

「テキトーに探すから平気。行つてきます」

そう言うと、元気よく玄関に向かう。冬だというのに薄手の長袖だけで出かけようした八一にパークーを渡して鋼介は見送つた。

「大丈夫か？」

楽天的な言葉に若干の心配を口にした鋼介だつたが、物怖じしない八一の性格に親の笑みを浮かべた。

「さてと」

洗い物を終えた鋼介は一室の前に立つた。

扉をノックする。

「銀子、朝やぞ。いつまでも寝てたら牛になるぞ」

返事はない。それどころか反応した様子すらなかつた。

「入るで」

ドアを開けて部屋に入る。机とタンス、それに桂香が買つたクツシヨンくらいしか家具がない。女の子の部屋とは思えない殺風景さだ。暖房の入っていない室内はひんやりとしている。

布団に潜っている銀子の横を歩いて、カーテンを開く。太陽の明かりが部屋を照らし、鋼介の体をほんの少しだけ温めた。

「もう八一は道場に行つてもうたぞ。お前は行かんのか？」

行くことを強要しているわけではない。普段から八一と張り合っているので起こすにはこう言うのが一番効果的だという経験則だ。寝坊助を起こすのは、朝は時間のある鋼介の仕事だった。

尚も銀子は微動だにしない。普段なら眠そうに目を擦りながら布団から出てくるだけに珍しい。

「銀子大丈夫、つか？」

中から押さえられているのか布団が剥げない。

「ええ加減起きんとあか 「ダメっ」

上からは無理そのなので、足元から布団を捲ると、銀子が切羽詰まつたような声を上げる。見ると布団の真ん中に地図が書かれていた。そういうえば寝る前にトイレに行かせた記憶がない。

「あれだけ飲んでたら漏らすわな」

「……ごめんなさい」

布団の隅に正座している銀子は恥ずかしそうに視線を逸らす。逸物を扱うのは平気でも、おねしょは恥ずかしいというちぐはぐさに鋼介は思わず笑つてしまつた。それもまた親の笑みだった。

## はかない幼女

八一か桂香が家に居る時、鋼介は良き師匠として銀子に接している。才能を可能な限り伸ばしてやりたいという親心から指導にも熱が入る。

もちろん、それだけが理由ではない。銀子以外の二人の目がある状況では彼女に手が出せなかつた。逸る性欲を抑える代償行為として指導に集中している。

八一と銀子の対局結果を研究することもあれば、鋼介と対局することもある。一局が終わると感想戦を行うので、日に数局するのが限界だ。

場数をこなすのは道場に任せている。本能的な一手というものは感覺を磨くことでしか手に入らない。そして、それは明らかに上手である自分との対局では身に付きにくい。実力の近い相手と膝を突き合わせるのが一番だ。銀子も対局相手をとつかえひつかえしている。人見知りが抜けた代わりにいつも険しい顔をしていたが。

「行ってきます」

「行つてらっしゃーい」

時間の前後はあるものの、清滝家で一番早く出掛けるのは桂香だ。それを八一は毎朝それを見送っていた。

玄関を開けると暖かい風が吹く。春も半ばを過ぎた五月の朝、大型連休明けの登校日だ。

「八一、お前もはよ準備しや」

いつまでも玄関で立ち尽くす八一を鋼介は急かす。桂香の姿は既にある筈はないので、八一の行為に意味はないと判断したのだ。あえて理由を付けるなら時間潰しといったところか。

まだ集団登校の集合場所に行く時間に余裕はあるが、何事も時間前行動が大事だ。

鋼介は自分の事を棚に上げてそんなことを考えていた。

力なく返事をした八一は自分の部屋に戻る。

「まったく、せやから銀子のこと見習えつていつも言うどるのに。な

あ、銀子?」

鋼介は顔を上げて、目の前で足を伸ばして座る少女を見る。内弟子の一人である空 銀子は自分の爪先に向いていた視線をほんの少し上げた。こちらはしつかりと前日から準備を完了しており、脇にはランドセルが置かれている。

「よし、それじゃあ反対の足出しあ

鋼介は掴んでいた右足を解放し、今度は左脚を催促する。銀子が要望通りに脚を差し出すと、指先に爪切りを合わせた。

パチンッと音を立てる。切り離れた爪をゴミ箱に捨てて、次の指に移る。よくある朝の一幕だ。

四月から銀子も小学一年生となり、八一と一緒に学校へ通うようになった。鋼介は体力不足を心配したが、杞憂だったようだ。八一から特に何の報告もない。

「今日、体育ないんなら夜でもよかつたかもな」

爪を捨てながら鋼介は、ランドセルのフックに体操服を入れた袋がないことを確認しながら呟く。準備を済ませているので時間はあるものの、平日の朝にわざわざ時間を取る必要はないなと思ったのだ。

「別にいい。暇だし」

素つ気なく銀子は答える。集団登校で一人だけ早く登校することはできないので、彼女の言い分も尤もだ。

家を出るまで三十分近く余裕がある。八一はバタバタと家の門を右往左往している。銀子のように昨日のうちに準備をしておけばこんなことにはならなかつたのだろうが、今更である。

これもよくある朝の一幕だ。結局は間に合っているので、鋼介も特に注意はしない。

爪を切り終えた右足を解放する。

銀子は切り口を手でなぞり尖つていなかを確認する。

なだらかな弓形になつていると納得したのか、銀子は靴下を手に取り、膝を立てる。

「ピンクか」

当たり前のようスカートを捲つてショーツの色を口にする鋼介。

それを無視するように銀子は靴下を穿いた方の膝を伸ばし、反対の膝を立てる。

彼女が下着が見えないように気を付けながら靴下を穿いていることは鋼介も十分理解している。どれが鋼介の情欲を掻き立てるスイッチになるかわからないようで、賢い彼女は下着を見せる 것을避けている。

その仕草がかえって食指を大いに刺激する。隠そうと懸命になるほどに暴きたくなるのが男心だ。

ショーツの股の部分を横に引き、割れ目を眺める。銀子は何でもないようになっているが、靴下を持つ手が止める。これからされることを解つてているのか、足を開いて寝そべる。

いつもは夜にしか手を出していないので戸惑つてているようだ。しかも、今日は八一がいつここに来るかわからない。銀子は首をわずかにもたげて入口を見下ろす。そして、それを促すように鋼介に視線を移す。

今は止めてと訴えるよう目をしながら。

願いが通じたのか、鋼介の手が股から離れた。が、今度はショーツの腰部分に手を伸ばす。

「ダメツ」

反射的に鋼介の手を掴みショーツが下ろされるのを阻止した銀子。

「八一が来ちゃう」

だからこれ以上は止めてと言いたいのだろう。鋼介もそろそろ潮時と思つていたので異論はない。だが、ここで終わらせるつもりはなかつた。

「まあええわ。銀子、今日はパンツ穿かずに学校行つてみよか?」「え?」

感情のこもらない声が返つてくる。

「今日体育ないなら人前で服脱ぐことないやろ」

問題ない理由を説明するが、銀子の表情は固い。そこで鋼介は何故ノーパンで行かせようとしているのか理由を言つていなることに気が付く。

「人見知りを克服するための特訓や。緊張して気疲れしたら、肩の力が無理矢理にでも抜けるやろ？ そしたら人の目があつても少しはリラックス出来ると思うんやけど、銀子はどう思う？」

数秒思案した銀子は鋼介の手を放した。

「大丈夫？」

最後尾を歩く上級生の女子生徒が心配そうに銀子に話し掛ける。銀子は頷いて肯定する。

集団の列が縦に長く伸びている。距離にして五十メートルはあるだろう。だからなのか、女子生徒は急かすような言葉は口にしないが、斜め後ろから無言の圧力を加える。

もちろん銀子にもそれは伝わっている。だが、彼女は出来るだけ集団の中に居たくなかった。

(スースーする)

吹き上げてスカートの中に入つてくる風に心がざわつく。普段ショーツで隠されている場所が全くの無防備だというのが落ち着かない。

銀子は鋼介の言い分が詭弁だと解っている。集団にすら混じれないくなっている状況でどうやって人見知りが治せるというのか。

住宅街を出て、片側三車線の交差点に出る。横断歩道の前で立ち止まり、信号が変わるのを待つ。

通勤時間の車道は車の通行量も相応に多い。大阪という日本有数の大都市ならばなおさらだ。普通車の他にもトラックやダンプといた大型車も走っている。

(もつとゆっくり走つてよ)

大型車が走り抜ける度にスカートがはためく。それだけではなく、排気ガスの風が吹き上がつてくる度に、下着を身に着けていないという事実に憂鬱になつていく。いつバレるか心配で仕方がなかつた。離れていた集団に信号待ちのせいで追い付いてしまう。後ろの女

子生徒はほつとしているが、銀子にしてみれば舌打ちしたい気持ちだつた。

わざと遅く歩いて距離を取っていたのは下着を履いていないと悟られないためだ。効果があるかは謎だが、離れているという事実は気持ちをほんの少しだけ落ち着かせてくれていた。

銀子の周りに上級生が並ぶ。各々が心配で口にしているが銀子からすれば放つておいてと言いたかつた。しかし、一年生を放置するような薄情な人間はおらず、残りの道を手を繋いで登校することになった。

横断歩道の向こうでは八一が同級生とじゃれあつてゐる。その能天気な様子に銀子は腹を立てる。

同じ弟子なのに扱いが違い過ぎる。

信号が青に変わる。

横断歩道を渡つた銀子は八一の頭をはたいた。

「おはよう」

教室に入った銀子に女子生徒の一人が挨拶した。連休明けの教室は家族と出掛けた話や、連休中の自慢めいた思い出話で湧き立つてゐる。入学してから初めての連休明けでテンションが迷子になつてゐる。

入学早々にぼつちになつた銀子に声を掛けてきたのがいい例だ。

「おはよう」

挨拶を返されたのが意外だつたのか、女子生徒は自分の所属するグループに混じり何か話している。

銀子にとつてそれはどうでもよかつたが、仲良く話せる友達というのは少したけうらやまやしかつた。

幼稚園に通わなかつた銀子は友達の作り方が解らなかつた。

いや、正確に言うならコミュニケーションを怠つてゐた。初対面の相手にいつも通り人見知りをしていたのだが、気が付けば女子の中にグループが出来ていた。

最初、銀子は大して気にしてはいなかつた。元から自分から話すタイプではなかつたし、放課後は道場に行くので時間もて余すことはなかつた。むしろ彼女の中には友達と遊ぶという発想がなかつた。八一がたまに将棋よりも遊びを優先していたが、彼女には理解出来なかつた。

教材を机の中に入れる。四時間授業なので他の日よりも量は少ない。

ランドセルを後ろのロッカーにしまう。

始業のチャイムが鳴るまでは十分近くある。銀子は時間を潰そうと机に突っ伏した。お尻に椅子の感触がいつもよりはつきり伝わる。しかし、それもままならない。

男子生徒の一人が銀子の足元に消しゴムを落とした。これは男子の中だけで流行っている遊びで、拾うついでに下着を覗こうというなんとも稚拙な行為だ。

ちなみに、銀子が標的になつたのは今回が初めてだ。以前やろうとした男子を睨んでから彼女を避けている。今回は休み明けの空気のせいでも気が大きくなつていていたみたいだ。彼の後ろで数人がたむろして行方を見ている。

「消しゴム消しゴム」

いつもやっているように正面から机の下に潜り込む。この遊びを知つてゐる女子は拾つてくれるか、足を揃えてガードする。

銀子の場合は、

バンツ

消しゴムの隣、手のすぐ近くを踏みつけた。呆然と見上げてくる男子と目が合い、憐憫な視線を向ける。ゴミを見る目だ。

たじろいた男子は俯いたまま這つて後退していく。消しゴムの回収には成功していたが、銀子にちよつかいを出すのは二度としないと自分に誓う。たむろしていた男子に慰められている。

ようやく始業のチャイムが鳴つて、生徒が席に着いたことで銀子は肩の力を抜くことができた。

## 弟子（やいち）の居ぬ間に

最近、銀子が八一に負けることが目に見えて増えてきた。

史上最年少で小学生名人となり、その副賞で無試験で奨励会員になつた八一は、今までより高い次元で将棋を指しているからなのか、棋力もぐんと上がっている。

一方で銀子は、虚弱な身体のせいで今年の夏もあまり道場に行けていない。歩かせると、到着するまで体力を大きく減らしてしまうからだ。

八一には常に、時には師匠である鋼介にも傍若無人な態度を取る銀子だつたが、道場に通う日を制限されても何も言わなかつた。賢い彼女はタクシードの運賃が家計の負担になるのを察していたのだろう。

鋼介も出来るだけ丁寧に指導をしていたが、奨励会で揉まれている八一との差は開くばかりだ。

今日も奨励会日である八一は関西将棋会館へ行つている。桂香も出掛けており、家には鋼介と銀子だけだ。

二人は将棋盤を挟んで俯き合つている盤面は昨日の銀子と八一の対局、の勝負手の場面だつた。

「これが悪かつたな」

鋼介が相手側、銀子の駒を動かして咎める。一見すると無難な手に思えたが、そこから十数手先に詰みが合つた。要するに自滅で彼女の詰んでしまつたのだ。

感想戦でもう知つてゐる様子の銀子だつたが、静かに正座をして聞いてゐる。膝に乗せた拳をスカートを巻き込み強く握つていた。

「ねえ、師匠。そろそろ道場に歩いて行つてもいい?」

脈絡の無い質問に思えたが鋼介は特に気にしなかつた。

「せやな。涼しくなつてきたし、ええやろ」

季節は九月の中旬。日差しはまだ強いが、気温は落ち着いてきている。

顔を上げた銀子は、ようやくの許可に喜ぶというより安堵した顔を見せる。

「なんやほつとした顔しとるけど、どうしたんや？」

「……別に」

質問してみたが、鋼介には銀子の表情の理由がおおよそ理解出来た。

八一の半分しか道場に行けていないということは対局数も単純に考えると半分になる。鋼介が都合を合わせられない以上、銀子は一人研究をするしかなく、八一と比べると対局の経験値に差が出来てしまっていた。それを彼女は焦っているのだ。

言いにくいやが、元からの才能も八一の分がある。二つの要因が重なった結果として、銀子が勝負に負けるのも仕方のないことだった。

「師匠」

「ん？」

「八一に勝ちたい」

「ほう」

珍しい。銀子は将棋が強くなることに貪欲だが、特定の相手に戦意を向けるのは少ない。あえて言うならば全方位に戦意を向けていた。一番身近なライバルである八一の伸びている棋力に、自分の力が及ばなくなつてなつてきているのを実感する場面も増えてきているのだろう。

しかし、気掛かりなのは最近の彼女の八一への負け方だった。途中で勝負を諦めてしまっているきらいがあるのだ。本人に自覚はない様子だが、対局の途中で肩の力が抜けてしまっている場面があつた。これが本格的に癖になつてしまふとプロの世界では致命的だ。それどころかプロを名乗ることすら出来ないかも知れない。

「銀子、最近の八一をどう思う？」

「調子に乗ってる」

「調子が良い」ではなく、「調子に乗ってる」。

銀子が不機嫌そうに口にした言葉に鋼介は内心で苦笑いした。

八一本人は小学生名人になつたがらといって何の変化もない。奨励会という遊び場へ入る権利を得たことで実力を大いに伸ばしている。

「でも強くなつた」

銀子も八一が急速に力を付けていることを理解している。だから嫉妬がてらに「調子に乗つてる」なんて言い方をしたのだ。  
（気持ちの問題やからなあ）

棋力的には八一が大きくりードしているわけではない。確かに八一の伸びかたは早いが、それだけでは、これほど負けが込むとは思えない。ただ、鋼介には銀子の負け方に覚えがあつた。他ならぬ自分である。

「銀子、最近の八一の将棋はどうや？」

「どうつて？」

「やりにくいとか、押し負けるとか、とにかく感じたことで構わんから何かないか」

負け込むようになつてから初めて八一の思考と向き合つたのか、しばらく俯いて考えていた銀子は顔を上げると眉をひそめた。

「……気持ち悪い」

「気持ち悪い？」

これはまた苦手意識そのものな答えが返つてきた。鋼介は銀子の思考を解き解すように言葉を促す。

「毎回毎回別の戦法を使つてくるから遊ばれてるみたいで気持ち悪い。……勝てないし」

「勝てないし」の前に「それでも」と小さな声が入つていたのを鋼介はからうじて聞き逃さなかつた。

八一なりに研究をして披露しているのだろうが、これまで一緒にやつてきた相手にいきなり自分の知らない将棋を見せられた銀子は対抗策を立てる前にやられているのだろう。奨励会ならば相手を出し抜くように世間の流行りから外れた戦型が猛威を奮つっていても不思議はない。そして、それを八一が取り入れることも。

その得体の知れなさがプレッシャーになつてゐるらしく、それが弱気の原因のようだ。

「うーん」

まずは精神的に負けているのを改善しないと八一に勝つのは厳し

そうだ。だが、銀子にメンタルをコントロールさせるのは、いくら彼女が子供らしくない落ち着きを持つているとはいえ無理がある。

「何や？」

思案していると、音もなく銀子がすり寄つて着物の袖を引いた。目を閉じて首を反らしていたせいでちつとも気付かなかつた。

鋼介が見下ろすと、銀子も視線を下げて鋼介の股座を見た。

銀子の細腕がするすると伸びる。帯下の合わせを割つてトランクスに手を当てる。慣れた手付きでゴムを伸ばした。

「いやいや、そんなつもりはないぞ」

これは正直な気持ちだ。なんだかんだしながらも鋼介の中には指導中には手を出さないという自誓があつた。師匠として指導にかこつけるのは銀子の向上心を萎えさせるのではないかと危惧していたからだ。

「じゃあ、勝ちかた教えて」

普段なら絶対口にしない、安直な勝利の教示を求むる声。それを咎めるのが師匠としてのあるべき姿なのは理解しつつも、差が開くのを解つていながら道場に行く日を制限した本人としては強く出れなかつた。

トランクスから手を放した銀子は背中を丸めて正座している。鋼介の心意など知らない彼女は、拒否されたことに戸惑いを見せていた。

「だつて……」

さんざん性的な要求されたことで、性的な奉仕をすれば見返りがあることを銀子は学習したようだ。再度手を伸ばす素振りを見せたが、鋼介に止められる。

「数をこなして慣れるしかない。つていうより、口で説明しただけでものに出来るか？」

銀子が首を横に振る。

「とりあえず気持ちやな。形勢が悪なつても最後まで諦めない心を鍛えんと」

「そんなの持つてるつ！」

裂けるような声で銀子が叫んだ。

鋼介はなだめるように銀子の頭を撫でる。

「八一以外ならな」

衰える自分はいつか越えられていく。だから鋼介は八一の名前だけを口にした。

銀子は鋼介の言葉を聞いて不服そうにしたが、頭の片隅に置かれた図星を射抜かれたらしく、言い返せないでいる。泣き崩れたいのを耐えるようにいつも以上に固い表情をしていた。

「八一に、勝ちたい」

涙声で訴える姿は立派だが、そのためには横着せずに地力を磨くしかない。今回は気が逸つて魔が差したというところだろう。鋼介はそう信じている。

しかし、目の前の問題は八一に苦手意識を持つてしまつた銀子だ。さて、どうしたものか。

「せや」

鋼介の中に妙案が浮かぶ。

そそくさと将棋道具を片付け銀子と向き合う。

「銀子、お前が八一より勝つてるとこころがあるぞ」

「どこ？」

「これや」

鋼介が膝立ちでトランクスを下ろすとふにやふにやの逸物が現れる。いきり勃つたモノを何度も見ている銀子は動じた様子はない。ただ、一度拒まれたことを鋼介自らがやつてることに憮然としていた。

「銀子が勝つてること。それは師匠汁を口にしていることや」

「師匠汁？」

怪訝そうな顔で銀子が尋ねる。

「疑つどるな。食べたもんが食つた人の力になるんや。つまり、銀子より強いワシの汁を飲めば将棋が強くなる。かもしれん」

「なにそれ」

最後に付け加えた言葉に、期待して損したといった様子で銀子は呆

れた。

「どんなんことにも絶対つていうんはないからな。信じる信じないは自由や。でも、万が一でも飲むだけで強うなれたらラッキーやと思わんか」

「でも、さつきはたくさん差すしかないつてさつき」

「そや。スポーツ選手やて食べるだけやなくてトレーニングもしてるやろ？ ただ飲むだけやなくて、飲んでから将棋の訓練の効率を上げるんが目的やからな」

「効率……」

自分に言い聞かせるように銀子は口の中で呟く。

もちろん出任せである。せっかく銀子が自分から動いてくれているのを逃すことは出来ない。将棋道具がなければ自誓の範囲外だ。

銀子は逸物を一瞥すると四つん這いになり、右手で掴んだ。逸物が握力に負けて形を変える。

今まで固くなつた逸物しか触つたことのなかつた銀子は、充血していない海綿体を興味深そうに握っている。逸物の触り心地を確かめるように力の入れ具合を調節していた。

柔らかい手のひらの感触に逸物が勃起する。馴染みのある形ではあつても、指で輪を作れたサイズから自分の手首サイズに変わつた逸物に、銀子は躊躇している様子だつた。

しかし、それならば扱いを心得ていると言わんばかりに、銀子は口を大袈裟に開いて逸物を咥えた。肉竿を舐め回し、熱の籠る口内で蒸していく。唾液が過剰に生産されているのが判る。それでも銀子が止める様子はなかつた。

久しぶりの口淫に鋼介はすぐに達してしまう。

「一発目ッ」

鋼介は銀子の頭を掴み、股ぐらに顔を押し付ける。銀子も足の付け根に手を突いて喉に逸物を当たるのを避けた。

逸物の中を競り上がる感覚があつた直後、銀子の頭が後ろに震える。一度きりの動きで、その後は意識があるのか疑うほどに動かなかつた。

陰毛に鼻息が掛かつてくる。

肉竿を撫でる口内が波打つ。顎を閉じようとして逸物に歯が当たる。

銀子は喉を鳴らして精液を飲み下す。

「誰も一回だけなんて言うとらんぞ」

頭を上げようとした銀子を鋼介の手は放さなかつた。

「もう一滴も出らん」

肩から落ちかける着物を糺した鋼介は、股ぐらに顔を埋めて動かない銀子の頬を叩く。

「おうい、いつまで咥えとくつもりや?」

びくりと身体を震わせた銀子はのつそりとした動きで身体を上げる。逸物を口から抜くと唾液が糸を引く。それだけではなく銀子の顔のあつた場所の畳には水溜まりが出来ていて、いくつかの小さなも水溜まりが合わさつて出来たらしく、いびつ過ぎる橢円形をしていた。

さすがに五回も射精してしまふと虚脱感に座つていることすらも億劫になる。鋼介は後ろ手に畠に手を突き身体を支えたが、体内を巡る倦怠感に負けて仰向けになつた。

銀子の口を満たしていた逸物は見る影もなく縮小している。昂つていた気分が過ぎ、今はただ逸物が過重労働を訴えて熱を出していた。た。

「おえつ」

クールな雰囲気に嗜虐心が抑えきれない。その整つた顔を苦痛に歪ませたいという欲求が暴走してしまう。だが今回はさすがにやり過ぎた。逸物が咽頭を突き抜けて喉奥を犯して犯してしまつた。吐かなかつたのが不思議なくらいだ。

身体を起こした鋼介は、えづく銀子の背中をさすつてなだめる。喉を押さえている手が上に伸びて、頬の関節が外れていいかを確認し

ていた。

「大丈夫か？」

赤を通り越して顔を白くした銀子は咳が収まると、鋼介が片付けた将棋道具を用意する。そして、盤の上に駒が並べると幽鬼のゆうな顔で鋼介の指導を求めた。

「ただいまあ

「お帰り」

奨励会から帰つた八一を珍しく鋼介が出迎える。普段ならその場から声を掛けるだけなので、靴を脱ごうとかまちに腰掛けた八一が腰を捻る。

「どうしたの？」

鋼介は顔を寄せて囁く。

「いやな、ちょっと銀子がピリピリして、お前の帰つてくるの待つとつたんや。今から勝負したつてくれるか？」

「ちょっと疲れてるけど、いいよ」

「すまんな。それと銀子に疲れてるの気付かれんようにな。手を抜かれたと思つて余計へソ曲げるやろうから」

「わかった」

二人は居間に移動すると、こたつに入つて真剣な顔で盤を睨む銀子が目に入る。

盤面は直前の鋼介との対局で銀子が迷つた場面だつた。正解を選んでいたが、勘に任せた一手に彼女は納得出来ないらしく、鋼介を巻き込んで深く思考していた。

八一の声に意識を浮上させた鋼介と違い、銀子は未だに思考の海を潜行しているようで、待ちに待つた相手が帰つてきたというのに一向に気付く気配はない。

「あ、八一」

らしくない素直な声に、八一の身体から力が抜けるのが判つた。

「ただいま、銀子ちゃん」

「そつちに座つて

目で対面を差す。礼を欠く態度だつたが、傲岸不遜なのはいつものことなので八一が気にする様子はない。言われた通りに八一は銀子に相対すると駒を振つた。

お互に相手の頭を押さえるような将棋を差す。

奨励会での対局疲れているのか、八一自覚はない様子だが単純な力押しになつてゐる。これならば銀子が本来の実力が出せれば勝てるだろう。

しかし、疲れているのは銀子も同じようで咎める手が精彩に欠けていた。それだけならば問題にする必要はないが、相手の見せかけのプレッシャーに将の守りを固めている。

「それなら、これはどうだ!!

合い駒の連続。しかし、仕掛けた八一には既に詰みまでの道筋が見えているらしく、大駒を切ることも厭わない。

必至ではないが劣勢に銀子の手が止まる。駒に触れる直前に有効な手なのか自問しているようだ。

銀子は鋼介を見る。助けを求めているような表情はなく、何か強い思いを秘めたような険しさが滲み出でている。

鋼介が自分の腹を撫ると、銀子も腹に手を当て、数時間前の出来事を思い出しているのか顎にもう片方の手を伸ばした。

それだけだつたが、浮き足を地に着けるには効果があつたらしく、仕切り直すように一呼吸した銀子の目に鬪志が戻る。流れに任せて合い駒していた手が、しつかりと見極めて駒割を決めている。

元々が無理責めのきらいがあつただけに、形勢が逆転するのは実にあつさりしたものだつた。久しぶりの攻勢に銀子の手が冴える。

守勢に回つた八一が奪つた駒で将の周りに壁を作る。

しかし、一人研究で本ばかりを相手にしていた銀子は、プロの理論の一端を吸収していく終盤に強くなつてゐる。おそらくは序盤や中盤も力をつけてゐるはずだが、今回は萎縮していく見ることは出来なかつた。

「負けました」

「感想戦は後からにしよか。八一、夕飯前に風呂に入つて来なさい」必至を振り解こうとも粘つた八一だが、勝敗の気配が逆転して、それが決定的になると悔しさを隠すように平静すぎる態度で頭を下げる。

何かを言う前に 風呂に促して退室させた八一の座つていた場所に鋼介が腰を下ろす。

綱渡りの勝利だったのだろう。銀子は身体が机に寄り掛かつて深く息を吐いた。まるで蒸氣のように身体から鬪志が抜ける。

「勝つたな」

「うん」

棋力にさして差がない二人なので、精神的に補強すれば、いずれまた銀子は勝ち出すだろうと思っていた。しかし、こんなに早く勝利してしまうとは予想外だった。

「師匠汁効果あつたやろ?」

「うん」

銀子の表情が一気に曇る。

「でも、あんまりしたくない」

「したくない? ああ、イマラのことか。さすがに小二にやらせるんは厳しかったな。いつかの風呂場ん時みたいに自分で頭を動かしたほうが苦しくなかつたかもな」

下着を着けずに学校へ行かせたりはたびたびやっていたが、口淫させたのは実に一年ぶりだった。

「もうしたくない」

「そしたら師匠汁飲まれんぞ」

「師匠が自分の手で出してくれたらいい」

「そりや、ワガママつていうもんや。飲ませてもらう立場なんやから、銀子もそれなりに協力せんと」

「じゃあ手でする」

固い決意が感じ取れる声に、鋼介は仕方なく妥協して首を縊に振つた。

## 第二の刺客（おとこ） 前編

「それじゃ行くか」

電車から降りた鋼介ははぐれないよう銀子と手を繋いだ。駅のホームはそこそこ混雑していて、改札には行列が出来ている。カツプル、ファミリー、ツアラー、外国人観光客。人混みのグループは様々で、ここが有名な観光地だということを物語ついている。

空くのを待ち、改札を抜けて外に出た鋼介は、昼食を取るために近くのレストランに入った。

内装の年季がレストランの風格に花を添える。数個のシャンデリアしかなかつたが、良く艶の出ている壁板のお陰で暗く感じない。レンガ作りの建物に無理なく切り抜かれた窓から光を取り込んでいることもそれを助けた。

コートを椅子に掛けてテーブルに着いた鋼介はメニューを開くと、料理の値段にしまつたと内心で膝を打つ。

良く通る道にあつたレストランで油断していた。どの料理も普段食べているものよりも倍近くする値段で、品によつては五倍に迫るものもあつた。

富裕層をメインターゲットにしているらしく、店内にいる客はどことなく気品がある。仕事用のスーツのおっさんと、防寒最優先で洒落つ氣のない少女ははつきり言つて浮いていた。

しかし、普段なら候補にも入れない高級店に来たのだから、そそくさと退散するのはもつたいない。せつかくの機会なので何か食べよう。

開き直つた鋼介はそう考えを改めて、メニューに目を通す。

丸テーブルの対面に座る銀子は静かにウェイタレスが運んできたお冷やを眺めている。店の雰囲気をごく自然に受け入れているようだ。

「銀子は何にする？」

「これ」

メニューを差し出して尋ねると、銀子はビーフシチューを指す。

## 「ビーフシチューを2つ」

教育の行き届いた畏まつた態度で注文を受けたウェイトレスがバックヤードに入つたのと同時に、鋼介は肩の力を抜いた。

「緊張するな」

「別に」

鋼介は内緒話をするように、口に手を添えて銀子に話し掛ける。が、素つもない答えが帰つてくる。

「今日は、どこに行くの？」

今日の目的地を知らない銀子は、当たり前の疑問を口にする。昨日突然出掛けることを聞かされたのだ。

「お世話になつてる人んところや。先週、八一を連れて行つた時にな、話の流れで銀子にも会つてみたい言われてしもうてな」

「ふうん」

銀子は興味を失つたような相槌を打つが、八一のおまけのような扱いに不満をもつてるのは明らかだ。不機嫌オーラが身体から漂つている。

「つ！」

銀子があえぐように口を動かし、股の間に手を入れる。数秒の硬直の後、前のめりに姿勢を改めた。

「いくら知り合いかいなからつて、辺り構わずそんな殺氣立つたらいかん」

鋼介はポケットから出したりモコンをテーブルの上に置いた。手で覆い隠しているので他人に見つかる心配はない。

銀子の膣内には以前プレゼントしたローターが入つていて。滅多にない二人だけでの遠出は絶好の機会だ。

ローターで銀子を弄んでいると料理が運ばれてくる。ツヤのあるステップの中に大きめにカットされた野菜が浮かび、中心には厚切りの牛肉がメインとして堂々とした存在感を放つ。一緒に運ばれてきたバケツトは自家製らしく、香ばしい匂いをさせていた。

鋼介はステップを掬つて口に運ぶ。深みのある味わいと喉を通るまろやかさに、暫し言葉を失う。そして、やつと一言、

「『匂い』

と、息を吐くよう呟いた。

銀子は行儀よく黙々と食べている。椅子の高さが足りずに苦労している様子だが、子供用の足長の椅子を使うのはプライドが許さないらしい。子供用椅子では収まりが悪い程度には身長があるので、その気持ちも解らなくはない。

「あつ」

ただ、より注意していないと、服にスープが溢れるのを防ぐ役目を持つナップキンが役割を果たせず、今みたいに褐色のシミが服に出来る。

鋼介は席を立ち、予備のナップキンで服に付いたスープを拭き取つた。

抜けするような青空には雲の一かけらも無く、レストランを出た途端に寒風が吹き付ける。雑然とした香りの中に潮の香りが微妙に混じる。

街を歩く人はもなく厚着をしている。コートが手放せない季節に海水浴に挑戦するような物好きはそうそういない。観光資源が豊富なこの地ならなおさらだ。

通りにある洒落たアクセサリーショップは赤と緑をメインに店内を飾り付けていた。壁に貼られたポスターには、白いひげの老人が乗るそりをトナカイが引く絵がプリントされていて、街のあちこちがイルミネーションでデコレートされている。日が落ちて来れば、さぞ綺麗な景色が見られるだろう。

一月後のクリスマスに向けて街全体が一丸となつて商魂を燃やしてゐるような感じだった。

流れに任せて鋼介は通りを歩く。その横を、銀子が先ほどよりもヨリテンションを下げる着いてくる。

「そんな気落ちすな」

レストランでステップを溢したのは、長袖のワンピースだつた。服のことは無頓着な銀子だつたが、この服は例外だつた。かなりの頻度で着ているのでかなりのお気に入りだつたのだろう。

慰めの言葉も届いた様子はない。

白の生地に付いたステップが滲んだシミは、今はコートで隠れて見えない。その場で脱がせるわけにもいかず、結局は放置して目的地へ向かっている。

鋼介は帰宅を提案したが、シミを落とし切るのは不可能なことを解つているのか、銀子は諦めたように首を横に振つた。

人の往来が少なくなる。商業施設の数が減り、代わりに住宅が多くなる。緩やかな坂を上つた先の洋館のチャイムを鳴らした。

「清滌です」

「開いとるから勝手に入つてきてや」

家主から許可が出たので、鋼介は玄関のドアを開けた。付き合いも長く、お互い相手に遠慮するような仲でもない。性格もよく知つている。

だから、こういうイタズラを仕掛けてくることを事前に想定していくべきだつた。

「ねえ、師匠？」

「なんや」

「あれ、なに？」

「……大人の木馬や」

玄関ホールの中央で異彩を放つ物体を指差して銀子が尋ねる。鋼介は自分のことは棚に上げて、呆れながら答えた。

板を鋭角に張り合わせただけのシンプルな作りで、木製の首と頭が付いている、いわゆる三角木馬が玄関の中心に鎮座していた。

銀子が叩いて木馬を叩くと、中が空洞なのか低い音を立てた。銀子は鋼介を見上げて説明を求めるような顔をしている。自分の知つているのとは明らかに違う木馬に興味が沸いたのだろう。

鋼介は素知らぬ顔で足を進める。二人だけの時ならともかく、他人の目がある場所で、性的な言葉なしに説明出来る自信がない。ぽろつ

とどんでもない爆弾を口にしそうな自分がいる。

「どこに座るの？」

木馬の天辺に手を置いた銀子が尋ねる。今、手のある場所が正にそれだが。

鋼介はコートを脱ぐと木馬に跨がつた。角の位置は股の高さよりも僅かに高く、踵を上げる。逸物に体重が掛かるのを感じながら、鋼介は銀子に実践して見せる。

「師匠」

傍らに立つ銀子はいつの間にか左手に白い紙袋を抱えていた。どうやら、木馬が陰になつて見落としていたらしい。

視点の低い銀子は最初から気付いていたようで、鋼介が木馬に足が向けた時には紙袋に手を掛けていた。

そして、右手には細長いムチが握られている。

「ムチ？」

「馬の尻を叩くやつみたいやな」

「馬……」

呟いた銀子は鋼介の尻を叩き始める。小さく手首のスナップだけで振るつてるので痛くはないが、妙な性癖に目覚めそうだつた。

銀子もどことなく面白がつていた。

「やめい」

ムチを掴んだ鋼介は、そのまま取り上げて、三角木馬からおりた。よく見ると、先端部分はゴム製で、全力で人に使つても、ミミズ腫れは出来ても、血が出ることは無さそうだ。

玄関の隅にムチを投げ置く。

「まだ袋の中に何があるんか？」

「うん」

紙袋にから出てきたモノに鋼介は苦笑いしか出来なかつた。

白い土台の上に、明る過ぎる紫の疑似肉竿が生えたデイルドを銀子は呆然として眺める。見慣れた形ではあつても、玉袋や腿から独立して扱いやすいデイルドは興味があるらしく、ぺたぺたとあちこち触っている。

「師匠、これ

「おもちやや。今、腹ん中に入つてゐるのと同じな」

鋼介を見上げていた銀子の視線がデイルドに向き直つた。そして、デイルドを下腹部に当てて再び鋼介に正否を尋ねるような視線を向ける。鋼介が頷くと、またデイルドに視線を落とした。

ムチの横にデイルドを放つて、鋼介は家の奥に進む。天井の高い廊下を抜けて、いつも指導する時に使う部屋の扉を勢いよく開いた。

「鬼沢センセツ」

大きな窓で光を取り込む明るい部屋には、好好爺然とした男がアンティークな椅子に座つていた。

鬼沢 談。

大人の恋愛小説、官能小説の大家。

また愛棋家としても棋界に貢献している人物で、特に関西の棋界での影響は強い。関西棋院に所属する人間として、鬼沢の要望は断り難く、今回も会いたいと言うので、棋院に所属していない銀子を連れて來たのだった。

「やつと來たか。遅かつたやないか」

「玄関にあんなのを置いとかないで下さい！」

「ちよつと模様替えしたんや？」

「いつ？」

「今朝」

「確信犯か、コノヤロー！」

棋界のパトロンの一人であることを忘れたように鋼介は鬼沢に詰め寄る。

「まあ、ええやないか。ちよつとしたお茶目や。で、その子が銀子ちゃんかい？」

鬼沢は、適当に鋼介を宥めすかして、扉の前の銀子に目を向けた。肩透かしを食らつて毒氣を抜かれた鋼介は、手招きをして銀子を呼び寄せる。

「内弟子の空 銀子です。銀子、こつちは鬼沢 談 センセ言うて、ワシが昔から世話になつてる人や」

「プロ?」

「センセ」という言葉に銀子の目が光る。值踏みするように鬼沢の顔を観察し、

「こんな人、いた?」  
と、言葉を続けた。

「棋士のセンセやない。小説のセンセや」「小説……」

銀子の目の色が変わる。将棋関係以外の本なんてほとんど読まない銀子も、生の小説家に興味津々といった様子だ。

「それで今日、銀子を呼んだ理由は?」

「え? 無いよ。あえて言うなら会つてみたかったからかな」「そうですか」

事前に聞いていたとはい、本当に他意がないと答えられると気が抜ける。これなら断つても良かつたかもしないと思う反面、おかげで野外調教みたいなことが出来たので、あきれと感謝が半分半分だった。

「あと、ワシも青い実を食べてみたくてな」

鬼沢の口角がニヤリと上がり、怪しい笑みを作る。

「……何のことです?」

「とぼけんでもええよ。食べてるんやろ? 銀子ちゃん」

怪しさを通り越して喜色さえ浮かべて鬼沢は言葉を続ける。

「いつ気付きました?」

この老人の嗅覚に隠しても無駄だと判断した鋼介は、早々に取り繕うのを止めた。下手に誤魔化しても、結局は論破される未来しか見えなかつた。それに言葉を信じるなら、すぐに外にバラされることもないだろう。

促されて鋼介と銀子は鬼沢の対面にある椅子に座る。

「なんとなくやな。なんとなく木馬で遊んでた気がして、なんとなく銀子ちゃんが師匠の尻にムチを入れて、なんとなくデイルドをヘソんどこに当ててた気がしたんや」

どうやら玄関から見られていたらしい。出迎えが面倒で来ないと

思つて油断していた。

「でも、銀子はセンセの趣味じやないでしょ」

鬼沢の作品はほとんどが成熟した女性を描いている。それを嗜好に当て嵌めるなら銀子はあまりにも幼く、食指が反応するとは思えなかつた。

「確かにそうやけど、嫌いなわけやないで。たまには若い実も食べとなるときもあるよ」

「実といふか蓄ですけどね」

「まあ、言い方はどうでもええよ。それで、返事をもらえるかな?」

バレている以上、ここは銀子を抱かせて巻き込むしかない。幸いあちらもそのつもりのようだ。しかし、自分が折れたようで、鋼介の独占欲を刺激する。

「銀子はどうする?」

「え?」

そこで、銀子に選ばせることにした。初顔合わせなので、後々の心証を考えると、直接拒否されれば、鬼沢も今日のところは手を引いてくれるだろうと考えた。

鋼介の横で静かにしていた銀子は、唐突に話を振られて狼狽してい る。

「このじいさんが銀子のこと味見したいそや」

「味見?」

「そ、味見。ここの」

鋼介の手が股に伸びてきて反射的に銀子の手が動くが、もはや日常の一部になつているのか、防ぐまでの動きはない。ただ、膝の上にあつた手が胸の高さに上がつただけだった。

銀子も鋼介たちの会話がセックスを指していると解ったのか、目を開いて交互に二人を見る。そして、逃げられないと理解したのか、膝を抱えて俯いてしまつた。

「それでどうする?」

「どつちでもいい」

なげやりな返事に鋼介は頬を搔いた。

## 第二の刺客（おとこ） 中編

「コンドームはしてくださいよ」

せめてもの悪あがきに、そう提案する。とりあえず借り物だと意識してもらうために一線を引いておく。いざれはなし崩しにされてしまうだろうが、獲物を樂々と横取りされるのは面白くなかった。

「あんま使いたくないなあ。必要な歳でもないやろ」

案の定、妊娠する可能性のない相手に避妊具をするのが不服らしい。ここで引くわけにはいかない鋼介は鬼沢と目を合わせる。睨むというほどはないが、両者の目には力が込もつていて迫力があった。

鬼沢が小さく息をはく。

「まあええよ。挿入する時にはコンドーム着ける」

答えを渋つたわりにあつさりと了解したことに鋼介は訝しむ。この老人がのらりくらりと言葉巧みに言い訳をしてコンドームをしないのではという疑念が浮かぶ。

本番行為はこれまでに両手で数える程度しかしていない。他の家族の目を避ける必要があるので、八一と桂香が長時間出掛ける日になか機会がなかつた。

ふと、鋼介は肝心なことに気づいた。

「銀子、コンドームって知つとるか？」

「知らない」

性知識を吹き込むのは自分以外考えられない環境で、むしろ知つていたら驚くところだ。鬼沢の言う通り、必要になるのは数年後だと思っていたので、コンドームを見せたことすらない。学校の授業や友達に教えてもらつている可能性も限りなくゼロに近いだろう。

当然の答えに鋼介は何の感慨もなかつたが、このまますんなりと渡すほど鬼沢の言葉を信用していない。

「コンドーム、一つ貰えます？」

「何に使うんや？」

「軽く説明しどうと思つて」

使い方くらいは教えておくべきだつたと悔やみながらも、付け入る

隙を見せないように淡々と答える。

説明を鬼沢に任せるには不安すぎるの、せめて自分の口から説明したかった。

未だに恋人の噂が出る鬼沢がコンドームを持つていなければ考え難かった。毎回身体の外に射精しているにしても、一人か二人くらい真否は定かではなくても、鬼沢の血縁者を主張する者が出てきても不思議はない。鬼沢はそれだけの価値を持つ男だ。

それが一切ないということはフォローが上手いのか、可能性がないのか、その両方のどれかだ。

鋼介の予想は当たつていたようで、

「ちょっと待つとつてや」

そう言つて鬼沢は部屋から出ていく。追及がないのは気掛かりだつたが、こちらから打てる手はない。

ドアに向けている視線を銀子の方に移す。

彼女はスラックスを皺が寄るほどに強く握っている。抱えていた膝を伸ばしていた。

「どうした？」

スラックスを掴む手を上から覆うように自分の手を重ねた鋼介は、優しげな声で尋ねた。

返信はない。

鋼介が銀子の手を揉み解す。硬直していた筋肉が伸びると反比例して表情が固くなつていく。

何かを迷うように、頭をもたげては下ろすを繰り返していた銀子はようやく決心したのか、下が向いたまま話し始める。

「今日、あの人？」

「そうや」

「したくない」

「さつきどつちでもいいって言つたのは銀子やないか」

「やつぱり嫌」

鋼介は椅子から立ち上がり、身体を屈めて銀子の両手を取ると、彼女の膝の上に持つていく。目線の高さを合わせると、俯いていた銀子

が目だけ上げて鋼介を見た。

「いつぺん決まつたことはなかなか変えられん。今回も鬼沢センセが楽しみにしとるみたいやから、今さら止めるんは無理や。下手したらワシらの関係がバラされるかもしけん」

「別にいい」

「そうはいかない。将棋以外で飯を食つていく術など鋼介は知らない。棋界を追放されたら残るものなどない。」

今まで秘密にして来られたが、こういうふうに投げやりな態度だといつ口を滑らせるか不安になる。

「銀子、くれぐれも言うとくけど、ワシのことは周りには言うたらいかんぞ」

「わかってる」

数秒の沈黙を置いて、鋼介は銀子の手を取る。

「何も難しいことあらへん。言われたことだけをすればええんや」力づけるような、言い聞かせるような、優しい口調なのに迫力のある言葉が鋼介の口から出る。

「いつも通りや」

「……うん」

念押しするように鋼介が言うと、じつとして聞いていた銀子がようやく首を縦に振った。鋼介が頭を強めに撫ると、普段のすまし顔を少しだけ不機嫌そうに歪めて髪を手櫛で直した。身体の緊張が僅かに緩んだように見えた。

「おまたせ」

ようやく戻ってきた鬼沢からコンドームの入った袋を受け取った鋼介は、そのままバケツリレーのようなテンポの良さで銀子に渡した。

いきなりのプレゼントに銀子が目を丸くする。袋を摘まみ上げて、扱いを伺うように鋼介に視線を向ける。

鋼介が封を切るジエスチャेをすると、銀子は両端を摘まんで指示

通りに袋を破く。丸められたコンドームを抜き出し、初めて見るだろうそれを興味深げに眺める。そして、コンドームを翳して赤い半透明のナイロン越しに外を覗き見た。

「これ、なに？」

赤み掛かった景色から目を離した銀子が尋ねる。性具なのは解つてほしかつたが、銀子は中心の部位を用心深げに触つてているばかりだつた。

まあ、無理もないと鋼介は一人ごちる。小学二年生に見せるにはあまりにも早いことは鋼介にも解つていた。

「ちよつと席外してもらえます?」

コンドームを説明する姿を他人に見られるのは気まずく感じた鋼介は、銀子と二人きりにしてくれるように鬼沢に願い出る。

しかし、

「ワシのことは気にせんでええよ」

鬼沢は気遣いは無用とばかりな手を上げる。下手に問答しても時間の無駄なので、鋼介は銀子の前に立ち、スラックスのファスナーを下ろしてトランクスから逸物を抜き出した。

銀子は勃起していない逸物を一瞥すると、すぐさま掌のコンドームに視線を戻した。

「師匠」

銀子が戸惑つた声を上げる。内緒と言つた本人が人前で逸物を晒していることが理解できないといった様子だ。

「実物見せながらやないと説明しにくいからな」

鋼介はコンドームを顎で指す。見上げていた銀子はもう一度掌に視線を戻す。

腰を突き出した鋼介は下腹部に力を入れる。銀子から見られているという興奮も手伝つて、逸物はすぐに胴体とは垂直に反り上がつた。

「それじゃあ、被せてくれるか」

「被せる?」

「こうや」

そう言つて鋼介は亀頭の先にコンドームを乗せて銀子に持たせる  
と、彼女の手に自分の手を添えてガイドする。コンドームがくるくる  
と逸物を包み込む。サイズが小さいのか逸物が締め付けられるが借  
り物なので仕方ないと諦める。

テカテカと光る逸物を眺めていた銀子は、触り心地を確かめるよう  
に逸物を握つて、手を前後させる。

また、気になるのか、先端の液溜まりを摘まんでいた。  
ついでに逸物の言い方を改めさせる。

「そう言えば銀子、そこ、なんて言うんや」

鋼介が逸物を目で指す。

「……ちんちん」

「ちやう。チ○コや。はい、言い直し」

「……チ○コ」

「声が小さい。もう一回」

「チ○コ！」

「ええぞ。二人ん時はチ○コ呼びな」

今まで約束通りに内緒にしてきた銀子なので、これも誰にも漏らさ  
ないだろう。たとえ口を滑らせてても、同級生が言つていたと誤魔化せ  
る。

一人よがりにならないように、鋼介はそれを伝えておく。あらかじ  
め言い訳を教えておけば心配も少なくて済む。

銀子の頭を掴み、逸物との距離を詰める。銀子はいつも通りに口を開いて受け入れる。

冷えた逸物を暖めるには十分な温室は、コンドームのせいか感触が  
鈍い。

一方で、奉仕している銀子は、肉棒から味がしないからか、滑らか  
に頭を前後させる。小さな口に逸物を頬張る姿はいつそ可愛くすら  
見える。

「生よりも大分くわえやすそうやな」

銀子は顔を股間に埋めた状態で頷く。

「うつ」

限界に達した鋼介は喉を突かないよう気遣いながら、銀子に逸物を押し付ける。銀子の方も解つてはいるのか、すんなりと顔を股間に埋める。息の合つた動きだった。頭から手を放して銀子を解放する。コンドームを逸物から外す。射精して落ち着いているおかげか、楽に離れた。

「それじゃ、行こか」

鬼沢に部屋を出るよう目配せされた銀子は、判断を仰ぐように鋼介を見た。

「銀子だけですか」

鋼介が尋ねる。

「見てたいんなら構へんけど」

それは遠慮したい。消極的とはいって、銀子が自分で決めたことなので止めはしないが、客観的に彼女の恥態を見たいとは鋼介は思わなかつた。

## 第一の刺客（おとこ） 後編

コンドームを着けさせるように銀子に言い聞かせている鋼介を残して鬼沢は部屋をから出していく。開けたままのドアから銀子が着いてくる。

階段を昇り、薄暗い廊下を歩く。北向きに窓が嵌められていて太陽の明かりが一切入ってこない。昼の明るさのおかげで歩くには全く問題ないが、天井から吊るされている電灯が点いていないせいでも冷たい雰囲気がある。

廊下の中間にある部屋のドアの前で立ち止まつた鬼沢が後ろを振り返る。階段を昇り切ろうとしていた銀子は足をすくませて、上げ掛けた左足を戻した。

「こつちこつち」

鬼沢はドアを開いて悠々と手招きする。銀子は招かれるまま部屋に入った。

ひんやりとした廊下とは打つて変わつて、窓から眩しいほどの光を取り込んでいる部屋の中はポカポカと暖かい。全体を照らすには至らないが、白い天井も相まって廊下とは比較にならないほど明るかつた。

備え付けられている家具はシンプルな引き出し付きの白木の机とセミダブルサイズのベッドだけだ。部屋の広さに対しても数が極端に少なかつたが、すつきりしていて飾らないのはある意味でこの洋館によく似合っている。

机の上には綴じられていない紙山が無造作に散乱している。紙面には小説のアイデアと思われる単語や文章が走り書きされていた。「よいしょ、つと」

ベッドに腰掛けた鬼沢は隣を叩いて、銀子に座るように指示する。ドアを跨いだところで立ち尽くしていた銀子はのろのろと歩いて鬼沢の横に腰を下ろした。

「なにするか解つてる？」

「うん」

感情の感じられない声で銀子が答える。

「ならええ」

鬼沢は立ち上がり机に向かい、一番下段の引き出しを開けて、無骨なデザインのデジタルカメラを手に取る。

慣れた様子で容量と電力の残量を確認すると、銀子にレンズを向けた。

突然被写体にされた銀子は身体を強張らせる。しかし、すぐにレンズから目を外してカメラを拒絶する。

シャツジャーが切られる音だけが部屋の中に響く。要望を出すわけでもなく、鬼沢は素人の横好きと判る手つきで銀子をカメラに収めた。

不機嫌な顔をしていた銀子も、顔の筋肉が疲れてきたのか少し表情が緩む。

不機嫌顔をもう一度作るのが億劫なのか、いつもの澄まし顔をしている。相変わらず感心なさげにカメラから視線を外している。

「下着を撮りたいから服脱いでくれ」

コートのボタンに手を掛けた銀子だったが、そのまま動かず、外そうとしない。鬼沢が声を掛けても顔を険しくするだけだ。

やがて、上から順にゆっくりとボタンを外しコートがはだけると、躊躇つっていた理由がわかつた。

「こりや、なかなか派手に汚しとるなあ」

カメラを机に置いた鬼沢は白い生地に暗褐色のシミの付いたワンピースを見て呟いた。

「家に来る途中でやらかしたんか？」

頷いた銀子に鬼沢は歩み寄る。身体を固くして警戒した銀子だったが、ベッドから立ち上ることはせず、ワンピースに付いたシミを触る鬼沢の手を払うこともなく、首を横にして外に視線を向けている。

「何を溢したん?」

「……ビーフシチュー」

「そりやあまた、災難やつたな。でも、それとこれとは話は別や」

服から手を放した鬼沢は、慰めるように落胆している銀子に声を掛ける。

運が悪かつたとは思うが、全くの他人の不幸なのでこれ以上言える事はない。

それよりも、ここに連れ込んだ目的を果たす方が鬼沢にとつて重要なだつた。

下着姿になつた銀子をベッドの中央に割り座に座らせる。厚手の生地だつたおかげか、白いシャツにはどこにも染みている箇所はなかつた。

鬼沢は再びカメラを構える。

カシヤツ、カシヤツ。

規則的にシャツジャーが切られる音が鳴り響く。決して大きくはなかつたが、静寂の中ではひどく耳に残つた。

「じゃあ、裸になつてくれるか」

構えたカメラを下ろしながら、至つて当たり前のような口調で鬼沢は促す。

ベッドの上で黙つて写真に収められていた銀子は、やや不機嫌気味に顔を強張らせて下着を脱いでいく。

ビスクドールのような滑らかな肌と、限りなく平坦な乳房にぽつんと浮き立つ二つの小島。白い凧の中に微かに赤みを帯びて盛り上がる姿はいつそ神々しすらあつた。

きれいなタテスジが入つた股は一際色白で、白磁のような気品が感じられる。

カシヤツ、カシヤツ。

先程と同様にシャツジャー音が部屋の中に鳴り響く。

身に着けていた布を全て失つた銀子は、手で胸と股を隠す。いかにもいかがわしく、かえつて扇情的な姿をカメラに収めていく。途中、いくらかポーズに注文をつけると、嫌々といった感じで銀子は指示に従つていた。

「次は寝てもらつてええか?」

ベッド横に移動して、言われた通りに寝そべつた銀子を写真に収め

る。足を開かせてタテスジにカメラを寄せる。

カシヤツ、カシヤツ。

ひとしきり写真を撮つた鬼沢は、液晶画面で今しがた収めた銀子の恥態を確認する。最初は服を着てむすつとしていた銀子が、写真が流れるにつれて薄着になつていき、最後は裸の映像で終わる。

表情一つ変えずに見ていた鬼沢は、銀子に視線を戻すと、彼女の胸を指先で撫でた。

くすぐつたかつたのか銀子は身動きして逃げる。固い表情の銀子はますます人形めいてきていた。

ベッドに膝を着く。

「とりあえず、キスしようか」

返答を聞く前に鬼沢は唇を合わせた。口を開けて舌を受け入れようとする銀子を無視して、歯の側面を舐めていく。銀子は鬼沢の胸に手をやつて押し退けたが、首の後ろに手を回されて離せない。

執拗に口内を這いずり回つている内に胸に掛かる力が弱まる。鬼沢は空いている方の手で胸にある銀子の手を取り、彼女を引っ張り起こした。

逸物を露出させ、銀子に握らせる。銀子は慣れた様子で逸物を両手で包むと、たらりと滴らせた涎を塗り込むように擦り始める。

片手で竿を刺激しながら、もう片方の掌で鈴口を撫で回す。柔らかな手のぬくもりと感触が心地よく、加齢で精機能が衰えていなかつたら達していくだろう。

しかし、冷静になつてくると、光景は過激そのものだが、手の使い方がぎこちなく、リズムよく上下させるだけだ。もちろんそれだけでも十分に気持ちいいが。

銀子を覆い被さるように組みし抱いた鬼沢は逸物を膣口にあてがつた。先走りを塗りたくるようにゆるゆると腰を振つて逸物と気分を昂らせていく。

「あの」

「ん？」

言葉をつなげるのを氣後れしているのか、鬼沢を見上げる銀子は指

を組んで言いにくそうにしている。

何を言いたいのか鬼沢には解っていたが、構わず腰をくねらせる。

「……コンドーム、して」

「嫌、つて言うたらどうする？」

「師匠に言う」

押せば黙るかと思つていたが、そもそもいかないようだ。

言つてみただけで、にべもなく拒否されるのは想定の範囲内だった。強要してこれきりになつては意味がない。長い付き合いにしていくつもりなのでここは引き下がつておく。

コンドームを着けた鬼沢は裸になると、銀子の隣に寝転がる。視点が逆転した銀子は、怪しく薄笑いを浮かべる鬼沢の真意を探るように怪訝な顔で見下ろしている。そして、思案の末に鬼沢に寄り添うように横になる。

「それも嬉しいんやけど、今回は間違いやな」

鬼沢は自身の逸物を指した。勃起したそれは鋼介のよりも小さかつたが、先端に向かつて垂になつている。

視線を下に向けた銀子は、呆然とした顔で鬼沢を見返す。

「もしかして、上になつたこと無いんか？」

「上？」

とぼけているでもない様子に鬼沢は確信する。この子は騎乗位をしたことがない。

「いつもどういう風にしてるんや？」

「……師匠が勝手にしてる」

答え難そうに目を逸らした銀子は、沈黙に耐えられなかつたのかぽつりと呟いた。

「そりやまた」

鬼沢は顎に手を当てて場面を想像した。年端も行かない幼女を犯すのはさぞ楽しいだろう。だが、彼女の師匠と同じようにしては面白みに欠ける。

幸いというべきか、これからさせようとしていることを銀子は経験したことはないようだし、図らずも先んじれたことを喜んでおく。

「ワシの腹の上に跨つてくれるか」

ヘその辺りに尻を乗せた銀子を更に下に押しやり、腰を浮かせる。

逸物を握らせ、膣口にあてがわせる。

膝上の長さが足りず、ベッドに膝立ちが出来ない銀子は全体重を鬼沢に圧し掛ける。

「そのまま腰を落として」

銀子が恐る恐るといった様子で、ゆっくりと逸物を呑みこんでいく。半分が膣内に納まつたところで逸物から手を離させた鬼沢は、腕を前に出させ、手を組み合う。

前屈みになつた銀子の身体を揺らす。バランスを崩した銀子は腰が落ち、逸物が子宮を押し上げると苦しそうに目を強く閉じた。

きれいな顔の眉間に皺が寄る。

膣は自身から溢れる愛液だけで十分に濡れていて、ローションを使う必要はなさそうだ。

持ち主の態度とは裏腹に貪欲に逸物を貪る膣肉に、年甲斐もなく情欲を搔き立てられる。

そうとは気付かれないよう鬼沢は銀子の頬に手を当て、自分の方に顔を向けさせる。

「いつも動かれてばつかりみたいやし。たまには動いてみるのもええもんやぞ？」

逸物で下から突き上げる。緩慢な動作でも、普段との違いに戸惑うように鬼沢の手を強く握つた。

身体全体が鬼沢の動きに付き従つている。鬼沢の腰が浮けば銀子の身体も浮き、腰が落ちれば追いかけるように彼女の身体も落ちる。

更に動きを緩めた鬼沢は、握つてくる銀子の手を握り返した。唐突な返事に虚ろげにしていた銀子は息を吹き返すように鬼沢を見下ろす。

動くのを止めた鬼沢は下腹部を目で指した。銀子の視線も後を追い、逸物を差していることが判ると、さつきまでの一連の意味を悟ったのか、体勢を整える。

手を鬼沢の腰の辺りに着くと、呼吸を整えるように息をして、ゆつ

くりと腰を浮かせた。

「んっ」

小さな身体が落ちると同時に、愛らしい声が漏れる。

動かされることと動くことでは感じ方も違うらしく、もう一度腰を上げるのを躊躇つていてる。

腹を置かれた手には力が込められず、もう終わりにしたいと目で言つて いる。

「つ！」

鬼沢は銀子の細過ぎる腰に手を回すと、無遠慮に逸物を膣に突き立てる。

いきなりの刺激に驚いたのか、力なくしていた銀子の身体がぴんと伸びる。

「疲れたなら仕方ないな。銀子ちゃんはいつもみたいに力抜いとつてええよ」

鬼沢はさつきまでの教え込むような動きを辞めて、攻め立てることに注力している。銀子の身体を引き寄せ抱きつく。そして、全力で突き放して来る前に彼女のいつもの体勢、正常位になるように身体を回転させ場所を入れ替えた。

## 小学生の頃 前編

「よし」

入れ忘れた物がないことを確認した鋼介は、多少力任せに紺色のスーツケースのファスナーを閉じる。普段からよく使っているもので、一人旅なら余裕があるサイズだが、今回は二人分を入れているのでパンパンに膨らんでいた。ナイロンの生地だからこそどうにか収まってくれている。

新しいのを買うべきだったかなと今更なことを考え、玄関の框に置いた。隣には2サイズあまり大きなプラスチック製の白いスースケースが鎮座している。大事に扱われているのか、それとも購入されて間もないのか表面に傷や汚れは見当たらない。

並ぶとよりそれが顕著だ。鋼介の方のはタイヤがでこぼこと欠けているのに対して、白い方のはまだ滑らか部分をほとんど残している。

跳ねた泥が乾いて模様が付いている紺のケースとピカピカの表面が光を返す白のケースを俯瞰して、そろそろ買い替える時期なのかもしないと鋼介は改めて独り言ちた。

「用意終わつた?」

「ばつちりや」

居間にから出てきたパジャマ姿の桂香の方を振り向いた鋼介は指で作った丸を作つて見せる。白いスースケースは彼女の物だ。

明日から二泊三日で旅行だ。ただし、純粹に遊びに行くわけではない。銀子が出場している小学生将棋名人戦の決勝トーナメントのための東京遠征だつた。

「明後日かあ」

桂香はどこか羨ましそうな目で遠くを見やつた。

居間に腰を下ろした鋼介は一息を吐いた。

時刻は夜の十時を回つている。根を詰めさせないように銀子は既に就寝させており、そのついでに八一も床に就かせた。普段はあまりうるさく言わないと、大一番で体調不良で全力を出せなかつたという

事態は避けたかった。

桂香に礼を言いながらテーブルの上に置かれた湯飲みに口をつけ  
る。

「晩御飯も残しちゃつたけど。銀子ちゃん、やつぱり緊張してるのか  
しら？」

「こんだけデカい大会の前やからな。緊張もするやろ。本人が食べと  
うないんなら無理して食わせても辛い思いをさせるだけや」

桂香の話に鋼介は相槌を打つ。確かに銀子は夕飯をほとんど食べ  
ていなかつた。

今日のところはそれでもよかつた。最悪、明日の夕飯と明後日の朝  
食が入ればなんとかなると思つていて。

頭脳競技である将棋は、対局後に立つことも儘ならなくなることが  
あるほどに脳を酷使する世界だ。身体の中で一番エネルギーを使う  
器官をそれだけ消耗させるのだから、食事でしつかりと栄養を蓄えて  
おくことは非常に重要になる。

湯飲みを傾けていると桂香が再び質問してきた。

「勝てるかな？」

「正直微妙なところやな。いつもの調子が出せれば十分勝ち目はある  
んやけど」

鋼介の口が重くなる。気掛かりなのはやはり銀子の体力だ。

今は連休の真っ只中である。移動で使う新幹線が混むのは必至で、  
指定席を取つているとはいえ目的地に到着するまでにどれほど人に  
揉まれるか未知数だつた。足早に過ぎていく人波は彼女の体力を遠  
慮なく削つっていくだろう。

移動日と対局日が別な方が楽なのは明らかで、そのために前乗りを  
計画している。去年の八一の時に、上京、対局、帰阪を一日でやつた  
反省だつた。

八一の場合は盤に挑むと疲れを忘れていたが、同じスケジュールで  
銀子が耐えられるとは思えない。

体力の懸念は桂香も解つてはいるようで、父親から曖昧な答えを返さ  
れても物憂げな表情で俯いただけで、それ以上深く聞いてくることは

なかつた。

どんなに周到に準備していても、勝負に絶対はあり得ない。特に持ち時間の少ない小学生将棋名人戦では一瞬の閃きが勝敗を逆転させることもある。

飲み終わった湯呑みを台所に持つていただき、洗つて水切りかごに伏せた鋼介は自室に引つ込んだ。

布団に入つて、明後日の銀子に思いを巡らせる。

前回大会の決勝トーナメント出場者は八一以外は中学校に上がっているので、面子は総替わりしている。それでも、鋼介の見立てでは去年とレベルに差はない。毎年、雨後の筈のように英才、俊才が各地から頭角を見せている。

今大会に八一は出場していない。特別な事情があるわけではなく、奨励会員になつた八一はアマ大会には出られないのだ。

小学生将棋名人戦優勝の副賞には奨励会入会試験の一部免除がある。それを目的に去年は出場させていた。

思考を銀子に戻す。棋力が他の選手と拮抗している中で、やはり心配なのは体調面だ。決勝トーナメントでは準決勝、決勝と最大で二局差すことになる。短期決戦とはいえ、大一番で精神と体力をどれほど磨り減らすか未知数だ。いろいろと凶太い弟弟子の先例は全く参考にならない。

見た目以上に纖細な内面を持つ愛弟子に思いを巡らせる。しんとした空間に椅子に座つて盤に臨む姿が容易に浮かぶ。苦しそうに歯を食い縛り、膝の上に置かれた拳がスカートを巻き込んで握りしめられる姿が後に続く。

普通の親ならばそれほど勝負に執着するのを止めさせるかもしれない。だが、彼女が見据えているのはプロの世界で、そこでは勝負から逃げることは許されない。普通からかけ離れた倫理が働く修羅場なのだ。

自分も通つた道とはいえ、子供には厳しすぎる世界に顔を洗くない。それでも、いつの間にか自分の癖を真似していた弟子たちに、師匠らしいことがしてやれていると思え、鋼介は微睡に深く落ちていつ

た。

年度末の東京駅は、東京から離れる人間と、東京に来た人間とが入り交じって、歩くのも一苦労なほどに混雑していた。

碎冰船よろしく人波を割つて通り道を作る鋼介の後ろを銀子、八一、桂香の順で着いてきている。人波に慣れてはいても、年間有数の込み具合に気が滅入ってしまう。

「やつぱり連休前から来てた方がよかつたんじゃない？」

「そないな無駄遣い出来るかい」

あつけらかんと更に前倒しすることを提案した八一を鋼介は嗜める。旅程の都合上、これ以上滞在日数を増やすのは財布にかなり厳しい。

「銀子ちゃん、大丈夫?」

往来から階段脇に避難すると、壁に凭れて曲げた膝に顔を付けている銀子に桂香が声を掛けた。

「……大丈夫」

答えるが、普段より白い顔には全く説得力がない。

桂香は鋼介に目配せする。

「先にホテル行こか」

桂香が頷く。八一も何か言う様子はない。

地下鉄を使うつもりだつたが予定変更だ。駅の構内から出てタクシー乗り場に向かう。運良く數組の先客しかおらず、すぐに自分たちの順はやって來た。

タクシーの運転手に目的地を伝え、鋼介が助手席、子どもたちが後部席に座る。気分が優れない銀子が運転席の後ろ、彼女を介抱するために桂香が真ん中、やることのない八一鋼介の後ろだ。

走っているうちに少しは楽になつたのか、車から降りた銀子は微かに顔に色味が戻っている。しかし、気分は持ち直しても消耗した体力

は誤魔化しきれず、歩く足取りは重い。

高い天井のロビーで二枚のカードキーを受け取り、エレベーターホールに乗り込む。

目的階に到着しドアが開く。エレベーターホールを抜け、割り当てられた部屋の前で桂香たちとわかれ、鋼介は八一と一緒に入室した。内装はシンプルそのものだ。二つベッドが並ぶ室内は少々窮屈な印象を持つが、泊まるだけなので問題ない。

「はあ」

脱いだジャケットと一緒にベッドに腰を下ろした鋼介が深く息を吐く。対局で東京に来ることは年に数度あるが、今回のように引率で来たのはほどんどない。

一人で動くのとは違い、小さい子どもの面倒を見ながら移動するというのは思っていた以上にハードだつた。

八一はともかくとして、銀子ははぐれるような子ではない。ただ、土地勘のない場所で目を離すのは心配で、精神的に疲れていた。件の八一も奨励会に入つた後は、関東の将棋に触れさせるために何度も東京に連れてきていたので、好奇心を抑えて着いてきていた。

「師匠、東京タワーが見える！」

「そりや東京やからな。タワーもドームもあるやろ」

窓に手をついて、彼方に見える赤い電波塔に思いを馳せる八一の姿に思わず冷静に茶々を入れてしまつた。八一は気にする様子もなく外を眺めている。大人げない反応に鋼介は反省する。思えば去年は、朝に上京して、夜には帰阪してしまつたので観光した記憶はない。その後も、将棋会館周りしか連れていつた覚えしかなかつた。

今回、自分との扱いの差に愚痴の一つも溢すかと思つていたが、意外と人間が出来てゐるのか、八一は特に何かを言つてくることはなかつた。

早くも景色を眺めることに飽きたのか、部屋を出ていく八一にホテルから出ないように伝える。

静かになつた部屋の中で鋼介は仰向けにベッドに倒れ込むと、遠くに車のエンジン音を聞きながら目を閉じる。

コンコン。

「お父さん」

微睡んでいた鋼介は起き上がり、ノックされたドアを開いた。

「どないした？」

桂香は言い出し難そうに視線を泳がせる。

「銀子ちゃんが鳩守神社に行きたいって」

「明日のことを考えてあんまり無理はさせとうないんやが」

「私もそう言つて、銀子ちゃんも納得してくれたんだけど、一応伝えとこうと思つて」

銀子の気持ちも鋼介にはよく解る。僅かな支えだとしても、精神的な余裕が持ちたいのだろう。そして、明日の勝利を祈願したいのは鋼介も同じだった。

桂香たちの部屋に入つた鋼介はベッドで横になつている銀子の額に手を当てた。手のひらに伝わつてくる熱は健康とは言い難い。見れば白かつた顔に差してゐる赤みが強すぎる気がする。

「神社に行くよりも体休めたほうがええんやないか？」

銀子が首を横に振る。言い聞かせるつもりでの質問だつたが、却つて行けるかもと思わせてしまつたようだ。桂香の視線が痛い。

しかし、体調を崩し掛けている今の状態で外出させては明日に響く。兆候が出ているのに見逃すことはできない。

鋼介は一つの代案を出した。

「なら、桂香たちに銀子の分もお願ひしてきてもらうんはどうや？  
桂香もええか？」

「私はいいけど……」

答える桂香の言葉の歯切れが悪い。銀子もそれで意味があるのかと訝しげに鋼介を見やる。

「元気になつたらちゃんと来ますつて伝えとつたら、神さんもそこまでシビアやろうし。な？」

「……わかつた」

パジャマに着替える銀子を残して鋼介と桂香は廊下に出た。

「本当に良いのかしら？」

立った今自分たちの出てきたドアを見て桂香が呟く。銀子を置いていくことに後ろめたさがあるようだ。

「明日が本番やからな。用心しとかんと」

少しづつ身体は強くなっているとはいえ、それにかまけていると落とし穴に遭う。何度もサインを見逃して体調不良にさせたことがある、今回は同じ轍を踏むわけにはいかない。

来年もこうして決勝トーナメントに来られる保証はなく、文字通り小学生棋士にとつての頂に手を掛けるなんてもうないかもしない。ここで本人の意思を尊重して明日、体調のせいで思考が纏まらないでは本末転倒だ。願掛けと明日の体調では、天秤にかけるまでもなく後者が優先だ。

「銀子はワシが看とくから、お参りには八一と一人で行つてきや」「看病なら私がしどくのに」

「いや、お参りにはお前が行くべきや。一日でも早うな」

「……」

鋼介の言わんとしたところを悟ったのか桂香は沈黙する。

高校を卒業した彼女は女流棋士になりたいことを鋼介に打ち明けていた。どう考へても遅すぎる進路選択だった。

女流棋士になるためには、主として奨励会の類似機関である研修会で成績を残すして女流資格を得るのが本筋だ。例外として有名棋戦で成績を残す方法もあるが、どちらにしても相当な棋力が必要になる。

棋士としての一番の伸び盛りを無為に過ごしてしまった桂香は棋力を地道に伸ばしていくしかない。劇的な成長を見込むには数年遅い。

長期間将棋から離れていた桂香の棋力は小学生の段階で止まつており、それどころか退化している感じさえあつた。八一たちが来るまで意識して将棋と距離を取つていたようなので、当然のようにも思えるが。

過去の蓄積でどうにかEクラスに編入出来ている。直接聞くこと

はなかつたが、勝ち負けを繰り返しているらしいことは伝わってきていた。

年頃の実の娘のいきなりの弟子入りに、鋼介は扱いを持て余していった。いくら基礎は出来ていても、ブランクや退会年齢期限のこともある。まだ余裕があるとは言つても、他より遙かに遅いスタートだけに期限の文字はどうしても気になる。

研修会では規定の成績を残すと昇級できる。勝ち負けをシーソーのようにならぬで繰り返している現状では、昇る算段よりも降る心配をしなければならない。残された時間の中で彼女が燻つていられる時間は多くない。

女流棋士には将棋普及という側面が男性棋士より強く出る。対局数や対局料の少ない女流棋士にとつては対局以外の仕事も収入的な意味で大事で、それらの仕事はやはり若い方が重宝される。なので桂香には一日でも早く女流棋士になつて貰いたい。そのためには神頼みだつて望むところだ。

財布から出した一万円札を桂香に渡す。

「ついでに夕食も食べてきや」

「お父さんたちは？」

「銀子は多分今日もほとんど食えんやろうから、連れ出すよりもコンビニで食いもん買って部屋で食べた方が負担にならんやろ」

鋼介たちが予約した宿泊プランには夕食は含まれていない。大一番前に精が付くものを食べさせてやろうと思っていたが、今の銀子の容態ではやめておいたほうが良さそうだ。後からフルーツやデザートを食べさせたほうが無難だろう。

エレベーターでロビーに降りる桂香たちを見送った鋼介は、桂香から預かったカードキーを使って銀子たちの部屋を開けた。

しんとした室内を進んで、銀子の寝ているベッドの隣のベッドに腰を下ろした。やつて来ることを見越して背を向けるように寝ていると思うのは考えすぎだろうか。

「行かなかつたの？」

背を向けたまでの問い掛け。

「銀子一人を置いていくわけにはいかんからな」

「そう」

だらだらと話していくは銀子が休めないと想い、鋼介は腰を上げる。

「そいいえ、今日の夜ご飯どうする？」

「いらない」

もぞもぞと布団が動いて、腹に手を当てているのが判つた。緊張して腹痛まで気が回つていなかつたのを意識させてしまつたかもしない。

「少しくらい食べとかんと明日十分に戦えんぞ。コンビニかどつかで適当に買つてくるから何か食いたいものないか？」

「……ゼリー。モモの」

「わかつた。しかつり休んどくんやぞ」

「つ!?

何気なく鋼介が銀子の頭を撫でると、彼女の体が僅かに跳ねた。密室に二人きり。反応の理由はすぐに見当が付いた。

「さすがに病人にまでは手を出さんから安心しや」

自分の部屋に戻つた鋼介はスラックスを脱いだ。旅先にスーツを何着も持つていくのは億劫なので明日はこれを着回す予定なのだ。不測の事態で汚してしまふ前に着替えてしまう。

「マジかあ」

着替えを出そとスーツケースを手に取つた鋼介が落胆した声を上げる。布と角のフレームとの法則が破れてしまつてゐるのだ。原因ははつきりしている。入れ過ぎだ。

ひとまず帰つたら買い替えようと思ひながらズボンを穿いた鋼介は、財布を手にコンビニへ向かうために部屋を後にした。

タクシーの車窓から大阪よりも背の高いビルを見ながら、鳴滝 桂香は身の内を蠢く嫉妬に辟易していた。十も離れた少女に抱く感情ではない。正直、看病を鋼介が引き受けてほつとしていた。

自分よりはるかに年下の姉弟子がひどく羨ましかつた。比ぶべくもない才能の差を自覚していても、その気持ちは抑えきれない。

彼女の年の頃の時分は漠然と棋士を目指していた。その時点で覚悟の差は歴然だ。今はその夢に再挑戦している最中だが、ひたむきに全力を傾けている姿は一度諦めた人間には眩しすぎた。

一緒に暮らし始めて数年。初めて感じた劣等感を持て余す。

的外れな感情なのは解っている。それでも、体調を崩しても明日の対局に臨もうとする銀子がひどく羨ましい。

自分はその舞台にすら上がれないから。

去年の八一の時は男の子というのもあり、他人事として素直に応援出来た。しかし、同性である銀子が大舞台に立つと思うと、見当違いの嫉妬が心をささくれさせる。そんな自分がどうしようもなく嫌になる。

身体の弱さを微塵も感じさせない力強い差し手。だがそれも、彼女が纏う鎧でしかない。

鎧の奥にあるのは綿のように柔らかく纖細な精神と年相応な少女の顔だ。しかし、父親はそのことに全く気付いていない。隣に座る小さな兄弟子も。

「なに？」

視線に気付いた八一は桂香の方を振り向く。どことなく緊張氣味で目が泳いでいる。

「ううん、何でもない。何か食べたい料理とかつてある？」

銀子に嫉妬したついでに八一にまで矛先を向けたとは言えず、桂香は無難な質問を返した。

「桂香さんは何を食べたい？」

乗車前に、参拝した後に夕食を済ませることを伝えてるので主語を省いた質問でも八一に伝わった。

その上で聞き返されてしまつたことに桂香は苦笑いを浮かべる。この兄弟子は彼なりに自分をエスコートしているのだ。

八一の言葉に甘えることにする。

「そうね、プロ棋士の対局メシっていうの食べてみたいな。いい？」

「もちろん」

八一の即答に桂香は微笑んだ。

目的地に到着した二人はタクシーを降りる。大きな石製の鳥居が参拝者を出迎えている。

境内を抜けて、本殿に向かう。ピークを過ぎているのか人の数は多くない。

静かな敷地を散策した最後に社務所でお守りを購入し、お釣りを受け取るときにふと、それが目に入つた。

「おみくじ引いてかない？」

「いいよ」

おみくじ箱に入れた手を引き、吉凶の書かれた紙を広げる。

「吉か」

ため息交じりに無難な結果を口にしながら隣に目をやる。

「どうだつた？」

「小吉」

「そつか」

桂香はどちらの結果が上だつたかを思い出ししながらおみくじを結び所に結ぶ。少しでも高い方がご利益がありそうなので最上段だ。

なんとなく手を合わせ、帰ろうとしたところで、八一がおみくじ箱を見ていることに気付いた。

「どうしたの？」

「銀子ちゃんのも引いてきていい？」

尋ねてくる姿が余りに甘酸っぱく、吹き出しそうになるのを抑えながら桂香は八一の頭に手をやつた。

「いいと思うわよ」

桂香の賛同を得られた八一は跳ねるように社務所に戻る。財布からおみくじ代を出すと、即決した自分の時とは違い、紙山をまさぐつて品定めしていた。

ようやく引いたおみくじを開いた八一の顔が暗くなる。とぼとぼと結び所にいた桂香のところまで歩いてくると、手に持っているおみくじを差し出した。

「うわあ」

思わず桂香は声を上げてしまう。

結果は凶だった。これは報告できない。

「もう一回引いてくる」

「あ、待つて」

桂香が止める前に八一は社務所に駆け戻ってしまった。  
結果は三回連続の凶。四回目でやつと小吉が出たが、総合するとど  
れほどのご利益があるか疑問だった。

「こういうのは本人が引かないと意味が無いのよ。たぶん」

言いながら桂香はおみくじを最上段に結ぶ。小吉を一番外側にし  
て重ねて折り曲げて分厚くなつた紙はなかなか結ぶのに苦労した。  
周りのよりも主張の強い結び目を見て桂香が小さく息を吐く。隣  
ではばつが悪そうな顔で八一がおみくじを見ていた。

「銀子ちゃんには内緒ね」

「うん」

## 小学生の頃 中編

「おはよう」

テレビに繋いだイヤホンを外しながら、鋼介はベッドから身体を起こした銀子に話しかけた。

室内の光源はテレビだけで、閉じたカーテンからはうつすらと下から光が差している。

「桂香さんは」

「隣や。用心して今日は八一と寝てもらつとる」

もしも風邪ならば桂佳がうつされる可能性がある。よく起こす疲労からの発熱だろうから心配ないだろうが、それを理由に部屋を変わっていた。

銀子の熱はあれからなかなか下がらなかつた。一眠りするだけだろうというのは甘い考えだつたらしく、結局今まで寝てしまつていた。

時刻は午前零時を過ぎていて、この時間に起きるなら、いつそのこと朝まで寝ていれば良かつたのに。

しかし、起きてしまつたものは仕方ない。鋼介は椅子から立ち、枕元近くのつまみを回してベッドランプの明かりを点けた。

「腹、空いとらんか？」

「……空いた」

腹部を押さえて銀子が身体の調子を確かめるように呟いた。昼に手を当てていたから心配したが平気なようだ。

冷蔵庫からケーキとゼリーを取り出してテーブルに並べる。

銀子に目配せすると、彼女はベッドから降りて鋼介のいた場所とは対面に置かれた椅子に座つた。テレビの電源を切る。

「大一番前にこんな質素なもんで悪いな」

「別に。むしろこっちの方がいい」

プラスチックの包装を外してショートケーキを口に入れる姿は見ると嘘を言つていないことが判つた。東京に来て一番リラックスしている。

人に酔つたことだけが銀子が体調を崩した理由ではないと鋼介は思つていた。すれ違う人のほとんどは滅多に見ないような美少女である銀子を横目で見ていた。意識の有無に関わらずかなりの数の視線を感じた銀子が気疲れしてしまるのは無理はない。これほど注目されたのは彼女にとつて初めてだろう。

そんなことを考えているうちにケークを完食した銀子はもう一つの容器に手を伸ばした。が、触つただけで動きが止まる。紅茶の入ったペットボトルに口を付ける。

「もう入らんか？」

「うん」

鋼介はゼリーの入った容器を冷蔵庫に戻す。後で気が向いた時にも食べればいい。

椅子に戻つて銀子と向き合うと、彼女の寝間着の首周りが湿つているのに気づいた。部屋の温度を高めに設定し過ぎだつたのかもしれない。

暑くとも銀子のためにと我慢していたが、もう少し抑えて良かつたようだ。入口の手前に移動した鋼介は、リモコンでエアコンの温度を下げる。

天井から送られてくる風がほんの少し涼しくなる。後ろを振り向くと、銀子も暑かつたのか、襟を仰いで服の中の空氣を逃がしている。リモコンを操作していた鋼介に銀子は背中を見せていた。薄地の白い寝間着は透けて肌着が透けている。

浴衣のような一枚布の寝間着はホテルからの借りていて銀子の物ではない。洗濯で擦れたというよりも、始めから生地を薄く作つて数回の使用で破棄しているのだろう。衛生面を気にするホテルの心音が聞こえてくようだ。鋼介も同じのを着ている。

「汗かいとるみたいやけど風呂、入るか？　入るなら浴槽にお湯入れてくるけど」

「いい」

拒否されてしまった。

「なら身体くらいは拭いとき。そのままやと本当に風邪引くぞ」

鋼介はロッカーから出したバスタオルを銀子に渡す。受け取った銀子は首周りの汗を拭き取ると、服の下にタオルを入れて拭いていた。

「そない面倒なことしとらんで服を脱いだらええやんか」

自分の椅子に戻った鋼介は諭す。

一分近く固まっていた銀子はタオルをテーブルに置いて、服のボタンを外していく。

脱いだ寝間着を床に落とす。

「下着も脱いだらどうや？」

銀子はそのままで良くとも、汗を吸つた下着を替えるために脱がなくてはならない。水分を含んだ肌着はさぞ冷えるだろう。

今度は躊躇う様子もなく下着を脱いだ。鋼介が床に落とした下着を拾う。じつとりと濡れていて、予想通り冷たくなっていた。

鋼介はバスルームに向かい、お湯の入つた洗面器とタオルを手に戻つてくると、椅子ではなくベッドの足元に腰を下ろした。

「背中拭いたるから、こっちきや」

開いた脚の間にバスタオルで胸を隠す銀子が入つてくる。

「べたべたしてたら気持ち悪いからな」

肌着と同じように冷えている背中に優しくタオルを当てていく。思つていたほど背中はべたついてはいない。

銀子も鋼介が親切心からやつていると判つたのか、緊張を解いて身を任せきていた。

肩甲骨周りから背骨を伝つて腰の辺りを拭いていく。お湯に入れて温め直したタオルを首に当てる。

「気持ちええか」

「うん」

首の付け根をマッサージしていく。対局で長時間同じ姿勢を取る銀子は小学生なのに既に肩こり気味になつていて。ちなみに、八一にはくすぐつたといつて拒否されていた。むしろ鋼介がやつてもらう側だ。

「脇を拭くから手を頭の上で組んでくれ」

銀子は無造作に手を頭の後ろで組んだ。何の気なしに言つていたが、これではホールドアップをさせていたみたいだつた。

鋼介の性的な部分が刺激される。脇にあつた手を胸に伸ばす。いきなりの行動に銀子が肩を震わせる。しかし、両手は頭の後ろで組まれたまま下げる様子はない。

タオル越しに胸を揉むように手を動かす。相変わらずの貪相な身体は、擦ると身体ごと動いた。

鋼介は銀子の二の腕を掴み、彼女を半回転させる。足が絡んで倒れそうになる銀子を支える。手に持つていたバスタオルが寝間着の上に落ちた。

バランスを崩した拍子に手を頭から離した銀子は、再び胸を隠す。今度はバスタオルがないので手を広げて胸を隠していた。

「それじやあ邪魔になるから横に退けなさい」

何か言いたげに銀子が腕をだらんと落とした。

まじまじと銀子の裸体を見たのは久しぶりだつた。桂香や八一を意識して家ではほとんど手を出せない。せいぜい二人の目を盗んで精飲をさせている程度だ。

虚弱な身体でもしつかりと成長していく、ボディラインにはくびれが付いてきている。

鋼介は未熟な乳房を掴むと、いくらか形が浮いてきている乳首に吸い付いた。粒のような突起を舌で転がす。

音を立てて吸い上げる。乳房が引き延ばされて細長い錐が出来る。将来膨らむことになるだろう乳房も、今はまだ皮が有り余っている。やかな視線を返された。

「師匠」

乳首から口を離した鋼介が顔を上げると銀子と目が合つた。冷静に考えて、小学生の胸に顔を埋めていたというのはなかなかにシユールな気がする。鋼介が誤魔化すように笑い掛けると、銀子からは冷やかな視線を返された。

「どうした？」

「神社、行けない？」

まだ諦めてなかつたのかと呆れながらため息を吐く。おそらく好

き勝手にさせているのも、機嫌取りのつもりなのだろう。

「風呂を嫌がつたんは湯冷めしないようにな」

「そう」

時計を見ると午前一時近くを指していた。

将棋のために犠牲を厭わない姿は実に彼女らしい。それよりも一時間近く銀子を半裸にさせていたのはとんだ失敗だつた。身体から熱がほとんど抜けてしまつていて、今では触っている鋼介の手のほうが温かい。

銀子の様子からして寒いということはなさそうだ。

「残念やけど、こんな夜遅くに子供を連れていくわけにはいかん」

洗面器の入れなおした湯に浸したタオルで銀子の身体を拭き直す。

「今日の対局が終わつた後にゆつくり行けばええと思うけど」

銀子は厳しい顔で唇を引き締めた。

「なにを怖がつとるんや？」

「怖がつてない」

それならばそこまで拘る理由がわからない。最後に恃むのは自分の実力だ。結局は神頼みもその後押しをしてくれるものでしかない。

「桂香たちが代わりに行つてくれたやろ。それでも不満なんか？」

答えは返つてこない。代わりに銀子の手が鋼介の肩に置かれる。何も言つてくる様子はない。まるでいつもと違う弱弱しい目に見つめられてしまうと参つてしまいそうになる。

本人に情に訴えかけるような自覚があつたかは不明だが、その行動は大いに鋼介を悩ませた。それでもN.O.と言えた自分を鋼介はほめてやりたかった。

銀子が床に落としていたバスタオルを彼女の肩に掛ける。寝間着が濡れていて、代わりになりそうなものが他にないのだ。あいにく、スーツケースは共用している桂香が持つてしまつたため、部屋にある銀子の服は今日の対局で着るワンピースしかない。

「……私は八一より弱いから。だから神頼みでもなんでも、やれることはしたい」

鋼介は切羽詰まつたような真剣な眼差しの銀子の瞳を見返す。

「その気持ちはよう解る。けど、やつぱり外に連れてくことは出来ん」  
何かにすがりたい気持ちは解る。だが、この時間に小学生が出歩く  
のは余りに非常識だ。

鋼介は自分の着ていた寝間着を脱いで銀子に羽織らせる。  
不安そうに泳いだ銀子の目がある一点で止まる。

小さな手が鋼介の逸物を撫でた。

「なんのつもりや」

寝間着に手を入れて、その流れでトランクスの中にまで侵入する。

「師匠汁」

銀子の目が据わつていて怖い。

「わかつたからちよつと待つてくれ」

鋼介は寝間着をはだけさせてトランクスを下げる。勃起した逸物  
が反り返っている。

銀子が身体を曲げて逸物に顔を近付ける。

「ストップ」

鋼介は銀子のこめかみ辺りを両手で挟む。顔を固定された銀子が  
慄然とした表情で見上げた。

「どうせやつたら口やなくて、ここ使わせてくれ」

鋼介の伸ばした手が銀子の股座を押し上げる。

「銀子からお願ひしとるんやから、こつちの言い分を聞いてくれても  
ええはずやろ?」

「…………うん」

「そしたらベッドに寝てくれるか」

立ち上がった鋼介と入れ代わるように銀子がベッドに横になる。  
ランプの明かりが彼女の身体に陰影を落として、やけにいやらしい。  
「上から羽織つとき」

鋼介は自分の着ていた寝間着を銀子に渡す。このまま見ていたい  
気持ちもあるが、それよりも銀子の体調が優先だ。

寝間着を掛けるように前に隠した銀子に上げさせた足からショリー

ツを抜くと、ショーツを渡せと銀子が手を伸ばした。

拒否する理由もなく鋼介は素直に要求に従う。手にしたショーツを銀子は枕の横に置いた。

鋼介は寝間着の足元部分は捲り、腿を擦り合わせる足を開かせると、艶やかな桃色の口が顔をみせる。同じ年頃の少女が持っている白い膜は遙か昔に破れ去っている。指で開けば、真つ暗な膣内が見えた。

銀子の股座に顔を埋めた鋼介は彼女の秘辱に舌を這わせる。

「なんか懐かしいな」

こうしてクンニしたのは、おそらくローリーを与えた時以来だ。銀子が小学校に上がる前の出来事なのでかれこれ二年以上の間が経っている。

包皮を剥いて陰核を刺激すると、敏感な場所を責められた銀子は腰を浮かせる。舌先が薄紅の豆に触れる度、電気が流れるよう銀子の下半身は震えていた。

ギシツ

本番に移ろうと膝立ちで一步進んだ所で、ベッドが軋んだ。壁の厚さがどれほどあるかはわからない。このままでは隣に音が漏れる危険がある。

鋼介は銀子にベッドから下ろして、自分も後に続く。

「こつちに尻向けて、ベッドに腕を乗せや」

指示通りに銀子は鋼介に尻を向けてベッドに腕を乗せる。下りた場所がベッドの足元ではなく脇だつたので、距離は嫌でも近くなる。鋼介は銀子の腰に手を当てる。

銀子の髪が垂れる。銀髪がランプの明かりでオレンジに光る。小さな背中は華奢そのもので、美術品のような美しさと、押せば簡単に壊れてしまうような儂さを持ち合させていた。

腰を落とした鋼介は逸物を銀子に挿入していく。前戯のおかげで愛液が十分に中を濡らしている。さらに、体内にはまだ熱を持つているらしく、逸物を包む膣肉は熱い。

ゆっくりと逸物を前後させる。逸物の長さが僅かに膣の長さを上

回つてようで、突かれた銀子の身体が前に揺れる。

「ハア、ハア」

使うにしても、銀子が動かないで事が済ませられるようにするつもりだった。のだが、現実は彼女の具合の良さに腰を振る動きが止められない。

逸物が膣肉を抉る。カウパーと混じり合つた愛液が逸物に搔き出されて足元に飛び散る。銀子の身体の赤みが増している。ベッドに頭を伏せて抑えているが、揺れる身体に頭が付いて来ていない。

大人と子供で元々合つていない腰の高さが、銀子の膝が折れてしまつたことにより一層離れる。中腰を続けるには体力が足りない。

銀子の細腰を掴んで彼女を持ち上げる。爪先が地面から離れた。再び逸物を膣内に挿入する。

「ふつ、ふつ、ふつ」

ピストンに合わせて銀子の口から息が漏ってきた。下半身が宙に浮いているので、逸物を打ち付ける度に足がが振り子のように揺れている。

声を上げることもなくあえぐ後ろ姿は実に健気だ。ベッドに付けている腕も、体重がほとんど掛かっていないので音を立てることが多い。

夜の静寂の中に、肉がぶつかり合う音とお互いのあえぎ声が僅かに響く。鋼介は隣に聞こえないようにと努めていたが、まだ男を悦ばせることを知らないだろう銀子は声を上げる発想はないのかもしれない。

「し、師匠」

「ん、なんや?」

あえぎ声を縫うように呼ばれた鋼介は一旦腰を止め聞く体勢を取る。

「頭に血がのぼつてきつい」

形容ではなく、息を整えている銀子の顔は確かに赤くなっている。腰の高さが心臓より高かつたせいで、下半身に送られるはずだつた血液の一部が頭に行つたらしい。

鋼介は銀子を下ろす。床に足が着いた銀子は立つことが出来ず、膝から崩れるように座り込んだ。

冷めきっている銀子の背中に寝間着を掛ける。もちろん鋼介が銀子に渡した寝間着だ。

床に膝を着いた鋼介は銀子の背中を擦る。少しやり過ぎたかもしれない。

「そこまで欲しいなら手で擦つて口ん中に出したろうか？」

さすがに罪悪感を感じた鋼介は心配そうに銀子に尋ねる。

銀子の頭は横に揺れた。

「……大丈夫」

微かに頭を上げて横に向けた顔は疲れが見てとれ、やせ我慢しているのがはつきりと判る。

しかし、鋼介の逸物は未だに満足するには至っていない。足に負担のある姿勢で、性交に集中しきれなかつたせ이다。

枕を頭の下に入れて、銀子の頭の位置を高くする。

ベッドに手を着いて、膝立ちの銀子に覆い被さる。銀子の息が浅くなるのが判つた。

斜め下から逸物で股を突き上げる度に銀子の膝が浮くのも構わず、押し込むように腰を打ち付ける。

明後日以降に筋肉痛になるだろうなど確信しながらも、鋼介は動きを止めない。

「あツ、あツ」

掠れた息が漏れているだけだった口から声が出る。まだ耳を寄せなければ聞き取れないような小さい声でも、喉を震わせていることに変わりはない。

まだ愉しみたかったが、そろそろ逸物も堪えきれない。

腰の動きが速くなる。銀子の肩を掴んで浅いピストンを繰り返す。

「いくぞ、銀子っ」

銀子と腰を密着させた鋼介の身体が震える。銀子が眉をひそめるのも構わずに彼女の中に精液を放出した。

「疲れた」

倒れ込むように銀子の隣に上半身を投げた鋼介がぽつりと呟く。  
息は上がつており、好き勝手にされていた銀子のほうが落ち着いているくらいだ。

呆然としていた銀子の瞳に光が戻る。自身の股間に手をやり、溢れた精液を指に絡ませると、それを躊躇なく口に運んだ。

## 小学生の頃 後編

ガヤガヤとしている食堂。その一角で鋼介たちは朝食を摂つていた。朝食はバイキングで、和洋の料理が好きに選べるようになつてゐる。宿泊客はサラリーマンが多かつたのか背広姿の人間が目立つ。みそ汁と納豆、それに焼き鮭に白米と典型的な和食の鋼介。

サラダとスクランブルエッグ、コーンポタージュにロールパンと洋食を選んだ桂香。

和洋の節操なく、ただ自分の食べたいものを皿に載せている八一。そして、オニオングループとクロワッサンしか皿にない銀子。

一時間半後には決勝トーナメントが始まる。銀子の表情はいつにも増して硬く、緊張しているのは明らかだ。更に置かれた食事もほとんど手を付けていない。

「無理にとは言わんけど、少しは食べとかんと持たんぞ」

鋼介に諭されて無言でちぎったパンを口に運んだ銀子だったが、欠片を三つ胃に収めたところで手を下ろしてしまつた。

「どうぞさま」

「もういいの?」

桂香が心配そうに尋ねる。ここ数日食事量が減つていて、これから過酷な勝負が待つてているというのに、このままでは対局中に栄養不足で頭の回転が鈍くなることを心配しているのかもしれない。

普段なら真っ先に体調を気遣うだろうが、この大会屁の銀子の意気込みを知つて いるだけに、桂香には声を掛けることしかできないのが鋼介にも判つた。

桂香の心配を感じ取つたのか、銀子はパンをさらに細かくちぎつて口に運んだ。

「桂香は解説室に居る言うてたけど、八一はどうする?」

食事を終えて部屋に戻り、支度を整え、八一たちの部屋に銀子以外の三人が集まる。それぞれの今日の予定の確認なので、将棋大会に出

場する銀子には聞く必要は無い。それよりも集中を高める方が有意義に思えたので、今はもう一方の部屋で一人にさせている。

「俺も解説を見てようかな」

「ほう、八一はてつきり将棋会館に行くかと思うとつたが」

「将棋会館が開くのは十時だから、大会が終わってから全員で行こうよ」

八一是銀子の敗退を微塵も考えていない様子だ。

桂香は軽く目を開いた後、苦笑いを浮かべる。鋼介も同じ反応だ。  
「まあ、昼過ぎには終わるやろうからそっちのほうがええかもな」

持ち時間が少ない大会なので、一局の対局時間も短い。準決勝と決勝の三局が行われ、試合間のインターバルを含めても、おそらく五時間は掛からない。

人が少ない朝一番よりも、人が多い時間帯のほうが相手を選ぶことも出来るのでいいかもしれない。

その後いくつかの話をして、鋼介は一足先に解説室に行く八一たちを見送り、銀子が籠る部屋のドアを開いた。

閉め切られたカーテンのすき間から日の光が差しているが、照明の点いていない室内は薄暗い。

その光も避けるように、銀子は窓とは反対の壁の隅に移動させた椅子に座っている。鋼介が部屋に入ってきた瞬間に閉じていた目を開いた。

「桂香たちは解説室に行つたが、銀子はどうする？ もう少しくらいなら部屋に居ても構わんぞ」

警戒するように油断なく鋼介を銀子は見上げる。つい数時間前に自分を弄んだ相手に平静に接するのは不可能だろう。

行為にへとへとになつた銀子を風呂に入れ、その間に露見しそうなものは全て始末した。後は使用済みティッシュの入つたビニール袋を外のゴミ箱に捨てれば隠滅は完了する。

時刻は午前八時二十分。対局開始は九時からなので、まだ部屋で寛げる時間がある。肝心の会場がこのホテルの一室なのだ。移動には五分も掛からない。

少しは調子が戻ったのか、昨日よりは銀子の顔に生気が戻っている。それでもいつもよりは白いが。

鋼介が近寄ると、より表情を険しくして警戒の色を濃くした。

「今朝食えたらよかつたんやけどな」

鋼介はセカンドバッグから飴の入った袋を銀子に差し出す。それはブドウ糖を固めたもので、昨日、夕食を買いにコンビニに行つたときに見つけて購入した物だ。無用の物になつてくれればいいと思つていたが、今朝の食事量を見るにそいう訳にもいかないようだ。

「途中でガス欠になるわけにはいかんからな。対局の直前まで舐めどき」

プロ棋士も対局中に間食で栄養を補給する。それは銀子も知つてゐるはずで、自分が最後まで戦えるだけのエネルギーを蓄えていないことを自覚しているのか、受け取つた袋を開けると飴玉を二つ、口に放つた。

小学生将棋名人戦はタイトルホルダーや高段者が解説役を務めることが多い。ここで優勝した棋士は将来プロになる確率が高く、世間からの注目もアマチュア大会にしては高い。

しかし、会場まで足を運ぶプロ棋士は少なく、せいぜいが選手の師匠や兄弟弟子くらいだ。結局は小学生同士の勝負なので、後から棋譜を見ればほとんどの手の思考をプロ棋士ならばトレースが出来る。棋力的にも参考になることは皆無と言つてよく、応援以外に来る意味はない。

対局室に向かう銀子を見送つた鋼介は、エントランスの上の階にある共有スペースに置かれたソファに座つて息を吐いた。

解説の邪魔になるので解説室には終盤頃を見計らつて行くつもりだ。関西大会の時に粗相をしてしまい、桂佳に通じて解説室に居ることを禁止されていた。

八一と一緒に検討していただけだつたのに、と鋼介は思う。それが大盤そつちのけで注目されていたのは終局してから知り、桂佳に上記の処分を言い渡された。

解説が上手く進まない苦労はよく知っているので、鋼介も納得している。

時刻は午前九時十分を回ったところで、銀子たちは、まだお互いに地固めをしている段階だろう。

手持無沙汰でチエックアウトする宿泊客で賑わうエントランスをなんとなく見下ろす。客だけではなく、清掃員や出入業者の姿もちらほらと見かけ、休日にも関わらず忙しなく動いている人影を見ると、同じスーツ姿でも、世間と違う流れで生きていると、鋼介は解りきつていたことを改めて実感していた。

もう少し盤面が搔き乱された頃合いに解説室に行こうと決め、隅のラックから新聞を取つてみると、ソファに深く座り直す。

「会場に居なくてええんか？」

読んでいた新聞を下ろして目を上げると、仕立ての良い和服姿の鬼沢 談の姿があつた。

「おはようございます。銀子の応援に来てくれたんですか？」

「そうや、つて言いたいけど、東京に来る用事があつたからそのついでや」

鋼介の対面の椅子に鬼沢は腰を下ろした。相変わらず好々爺然とした雰囲気は残しながらも、向き合うと文化人らしい威厳と貫禄がある。

畳んだ新聞テーブルに置く。

「銀子ちゃんの対局見なくてええんか？」

この時間に来ただけあつて銀子の対局開始時間は把握済みらしい。

鋼介が関西大会のあらましを話すと鬼沢はかみ殺したようなくつくつとした笑いを浮かべた。

「入室禁止にされなかつただけよかつたやないか」

「そうですけど」

慰めているつもりか分からず、とりあえず言葉を返す。

「それでここで時間を潰してると」

「他に行く宛てもないですからね」

一局に一時間もかかるないだろうから、将棋会館に行くような時間

はない。そのほかの宛ても弟子が戦っている最中に出掛けるには憚られる。

「まあ、ちょうどよかつたから良かつたわ」

鬼沢は足元に置いていた書類鞄から祝儀袋を取り出して、テーブルの上に置いた。

「これは？」

鋼介は用は済んだとばかりに立ち上がる鬼沢に尋ねる。

「ちょっと氣いが早いけど銀子ちゃんの優勝祝いや。直接渡したいけど、これから人と会わないかんから代わりに渡しとつてや」

そう言うと、鬼沢はホテルから出ていつてしまつた。

鋼介は小学生に贈るにはいさきか分厚すぎる祝儀袋をポケットにしまう。

おそらくこれは一種の契約金だと鋼介はすぐに気づいた。つまりはまた連れてこいということだ。

鬼沢の所へは去年一度連れていったきりだ。連れて行こうとも、嫌と言われてしまう。それも、桂佳の居る時に返答するものだから、説得の機会がない。執拗にしていると桂佳に怪しまれる。

銀子のことなので、今大会に優勝すれば八一の後を追うように奨励会に入るのは明らかだ。そうなれば鬼沢の所に連れていくても将棋連盟からの仕事を覚えさせていると理由をでつち上げることが出来る。奨励会は会員のアルバイトを禁止する代わりに棋戦の記録係などの仕事を斡旋している。

銀子の人見知りは桂佳も良く知っているので、多少の嫌がりはそのせいだと思ってくれるだろう。

いくらしつかりしていても、まだまだ幼い銀子に任せられる仕事は少なく、公的な仕事はほとんど皆無だ。お金稼ぐ必要があるような年齢でもない。

出来ることが限られている現状で、仕事「みたいなもの」を経験させることは、銀子にとつても何かしらの刺激になるはずだ。

とりあえず結論は先送りにして、時計の長針が六の数字を回つていることに気付いた鋼介は席を立ち、解説室になつてゐる会議室に足を

向けた。

「はあ」

トイレの個室ドアを閉めた銀子は、普段の彼女からは想像も出来ない気の抜けた声を漏らした。

メインで撮られるのは手元だとはいえ、対局風景をカメラで撮られるのは予想以上に緊張して疲れるものだつた。手筋を誤るような真似はしなかつたが、いつも通りの将棋が差せたかと聞かれたら首を横に振るだろう。

結果だけを見れば銀子の勝利だつたが、内容はなかなかの接戦だつた。慎重になり過ぎて防御を固めるあまり相手に機先を譲つてしまつた。

十数手で逆襲したもの、主導権を握るまでは注意して盤面を見ていくなくてはならなかつたので殊更に神経を使つた。目の奥がジンジンと熱い。

およそ一時間後に決勝戦だというのに、集中しきれていない自分に銀子は苛立つ。が、すぐにその焦りが判断力を鈍らせると自省して息を吐いた。

カサツ

個室から出て手を洗い、ハンカチを取りうとポケットに手を入れると、中にあつた何かが音を立てた。

ハンカチを洗面台に置いて、握り隠せるほどの小さな袋をポケットから出した。

それは今朝、鋼介から渡された袋の中にあつたもので、小袋に一つづつ包装されていたので、いくつかをポケットに入れていた。

銀子は今日の深夜の出来事を思い出す。

どうしてか、普段なら絶対口にしないような弱音が出てしまつた後悔に頭を振り、師匠の逸物の感触が残る下腹部に手をやつた。

久しぶりに逸物を挿入されたが、相変わらず慣れるということはない。好き勝手に玩具のように扱われ、口に欲しいと言つているのに、やはり好き勝手にナカに出される。

逸物から飛び出た精子が膣壁を打つ感触。背中がぞくりとして、腕に鳥肌が立つ。おまけに電気が走ったように身体が強張り、直後に力が入らなくなる。

身体のコントロールが奪われたような気分がして嫌いだ。未知の感覺に身を任せる真似は銀子には出来なかつた。

唯一の効果があつたとすれば、行為後に入浴した後にすぐさま寝られたことだ。今も頭は燻っているのに、身体の調子が良いのが解る。精神よりも肉体が先に音を上げることが多い銀子は、珍しい自分の体調に表情を曇らせる。

廊下に出た銀子は袋を破つて飴玉を口に入れる。甘さが口に広がる。

二個、三國と食べるうちに落ち着いてきて、頭の冴えが戻つて来たような気がする。

単に栄養を補給したから頭が働き始めただけだが、そんなことを知らない銀子は改めて味わうと甘くて美味しいおやつをもう一つ口に運んだ。

「こんなところにおつたんか」

ぶらぶらと館内を歩いていた鋼介は、トイレから出てきた銀子を見つけて歩み寄る。

今、二人のいる廊下は会場から離れており、人の姿はない。大会の雰囲気もここまでには届いてこない。

時間を見計らつたつもりで解説室に行くと、既に銀子の勝利で決着していた。形勢は完全には傾いていなかつたが、どうやら銀子のカウンターが上手くはまつて相手の戦意を挫いたようだ。一度勝ちが見えた状態から劣勢に追いやられるのは精神的にかなりきつい。

対局者控え室に銀子の姿はなく、静かな場所に居るだろうと見当を付けたが、まさか本当に遭遇するとは思わなかつた。人の流れから離れた場所を探していたがbingoだつたらしい。

条件反射的に「おめでとう」と言いそうになり、すんでのところで口をつむいだ。その言葉を聞いたら、銀子が肩の力を抜いてしまうよ

うな気がした。

どれだけ社交辞令だと解つても、労われると人は安堵してしまうものだ。一度弛んだ緊張と集中の糸を締め直すのは非常に手間が掛かる。

鋼介たちプロ棋士は、普段、公式戦を一日に複数局する機会は少ない。しかし、アマチュア棋士である銀子はそうではない。それは鋼介もよく承知している。

にも関わらず言いそうになつたのは、銀子の纏う空気が、まるで僅差で負けたことを頭の中で整理している。プロ棋士のようだつたからだ。

表情こそいつもの無愛想なそれだが、いつもの強気な雰囲気は失せ、心ここにあらずといった様子で物思いに耽つていて。

時折、聞き取れないような小さな声を漏らしているが、どうやら頭の中では先ほどの対局を暗譜しているようだ。

あまり良い状態ではない。すぐに次の決勝戦がある。

勝った勝負とはいえ、いつまでも終わつた将棋を引きずつていて勝てる試合ではない。それは本人も理解しているはずだ。

対局を冷静に分析する几帳面な部分と、自覚はないだろうが軽い逃避心理が混ざりあって思考の沼にはまつてしまつたらしい。先の不安を考えないように、手近な問題で頭を満たすのに、将棋の検討なんて格好の課題だろう。相手をより早く詰ます手を考えていれば、時間はいくらでも潰せる。

とはいっても、休みなくそんなことをしていては疲れてしまう。

疲労で判断力を鈍らせる前に止めるのも師匠の役割だ。

「ややこしいこと考えとるみたいやけど、とりあえず今は休んどき。対局にまで影響したら銀子もいややろ？」

顔を上げた銀子は頭を横に振つた。

「無理」

先ほど将棋が頭から離れてくれないと銀子は言つた。

鋼介は上を向いて顎に手を当て考える風な仕草をした後、銀子を歩いてきた方向に目をやると、何かを思いついたのか銀子を見下ろす。

「トイレに行こうか」

「？」

唐突な提案に銀子は珍しく目を丸くする。

説明を求める視線を無視して、銀子の背中を押してトイレに向かう。

男性トイレに。

重心を後ろにやり、足取りを重くして抵抗する銀子だったが、床が絨毯からタイルに変わると僅かに抵抗が弱まる。

始めて内側から見るであろう男性トイレに視線が散っている。

大便器が置かれた個室に銀子の背中を押して入った鋼介は、後ろ手にドアを閉じて鍵を掛けた。

換気扇の音がトイレを支配している。

「やつてしもうてなんやけどドキドキするな。」

「……」

鋼介は深呼吸しながら言つた。カメラや人の目に注意したが、いつもより数段犯罪めいたシチュエーションに緊張して、内心気が気ではなかつた。

それに反比例するように仄暗い興奮と高揚が身を包む。  
小便器寄りに取り付けられた蛍光灯が間接照明のように個室を薄暗くしている。

二人の距離は五十センチも離れていない。僅かに粗くなつた銀子の吐息が鋼介の耳を撫でる。銀子も緊張しているのか、顔が強張つている。

沈黙が一分弱続く。

堪えきれなかつたのか、声を潜めて銀子は口を開いた。

「それで次は？」

「次……」

そう言われても思い付きの行動なので鋼介は答えに詰まる。少しばかり取り乱させて、頭にある棋譜を吹き飛ばさせるつもりだったのだが、予想外に冷静な銀子は訝しんだ表情をしただけだ。  
更に数十秒の沈黙。

「じゃあスカート上げてくれるか」

どつしりと便座に座つて見る体勢になつた鋼介は、手のひらを上にして銀子のスカートを指差した後、その指を曲げた。

捲り上げられたスカートを鳩尾の所で押さえさせる。真白い肌と茶色い太線があつた。

「トイレから出てきてたけど、取らんかつたんか？」

鋼介が太線の端を搔くと、線がめくれて、白っぽい裏面と隠れていた白肌が顔を出す。

太線の正体は布ガムテープだ。昨日、旅行鞄の応急修理用に購入したものだつた。

ペリペリと音を立ててテープが剥がされていく。

見える所は剥がしきり、残るはショーツの中だけになつた。

「パンツ下ろしや」

銀子は言われた通り膝下までショーツを下ろす。

「敏感な場所やからな。他人に剥いでもらうより、自分でした方がええやろ」

鋼介は、まだ下腹部から下が張り付いているガムテープを銀子に渡した。

銀子は受け取つたガムテープをそろそろと剥がしていく。

個室にテンポが遅くなつたペリペリと音が響く。

「ちよつと赤なつてしまつたな」

テープが貼られていた場所をなぞりながら鋼介は呟いた。肌がかぶれてしまつたようだ。

遊んでいた方の手でトイレットペーパーを巻き取つてずり下されたショーツの上に置く。

腹部を撫でていた指が骨盤をすり抜けて、柔らかい外陰を割り開いた。

ぱっくりと開かれた肉の蕾から雨垂れのように滴が落ちる。

ただの白く濁つた水のように見えるそれは深夜に注いだ精液だ。時間がたつた精液に出したてのような粘りはない。銀子が執拗に口

に持つていくものだから、体の中にあればいいのだろうとテープで蓋をしたのだった。

膝の高さにあつたトイレットペーパーに染みが出来、同じ場所に滴り落ちる白濁が薄くなつた精液で染みが広がる。

静寂を破るように入り口ドアは開かれ、銀子が身体を震わせる。相変わらずの固い表情の銀子だつたが、鋼介が見上げると、慌てたように顔を反らした。

「しかし、去年も優勝したのが小三なのも驚いたけど、今年の勝ち上がってきたのが小二なのも驚きだよな。二年連続で最年少優勝の記録更新するのかね」

「しかも二人とも清滝八段の内弟子らしいぜ」

「みたいだな。今時内弟子なんてつて思つたけど、将棋に集中させるにはいいのかもな」

どうやら将棋大会の観客らしく、先ほどの試合の銀子の筋の良さを褒めている。本人が聞いていないと思つてか、誉め言葉が手放し気味だ。

鋼介は指を曲げて、銀子の膣から精液を搔き出す。立つた状態の膣内は狭く、爪先が膣壁を擦つていて解つた。

銀子は唇を口の中に巻き込んで耐えている。両手は膣をまさぐる鋼介の腕の上に置かれ、身体が震えると引き離そうと下に押しやる。しかしその動きも、鋼介は肘を曲げていなしてしまう。

用を足した男たちがトイレから出ていくと、鋼介も膣から手を離した。指が精液で照つていて、

その指を銀子の口の前に運ぶ。数秒眺めた銀子が鋼介を一瞥する。視線を向けられた鋼介は小さく頷いた。

銀子は口を指が入る分だけ開いて、唇を尖らせて指を含む。舌がチロチロと指を舐ていて、

指を動かして全体を舐めさせる。その間を縫うように舌下を撫でた。

頃合いを見て指を引き抜く。銀子はいつの間にか口をすぼめていて、離れることを惜しむように唇が音を立てた。

「そんじや、そろそろ行くか

「え？」

指をトイレットペーパーで拭きながら鋼介がそう言うと、銀子の口から呆然としたような声が漏れた。

「そろそろ対局も後半に入るやろうからな。銀子みたいに思つてたより早く決着したら会場の見学者も一回バラけて、こつちにも人が来るから、その前にトイレから出とかんと」

腕時計を見る。時刻は午前十時半を回ろうかとしていた。便座から立ち上がった鋼介が鍵に手を掛けると、うつ向き氣味に顔を伏せた銀子に袖の上に手を置かれた。

「どないした？」

「……欲しい」

銀子の視線が鋼介の股間に向けられる。

「でもな、時間が……」

言い切る前にファスナーに手が伸びてくる。

慣れた手つきでトランクス越しに逸物を触る銀子は鋼介の顔を見上げた。無表情に近いが、纏う雰囲気でなんとなく弱気になつていることが伝わってきた。こんな気休めにすがるのだから精神が相当ナーバスになつてているのだろう。

「……手早くな」

トランクスから出した逸物に銀子は顔を近づけ、竿の根元を掴んでくわえる。

生暖かい口内で、小学生とは思えない舌使いで的確に情欲を刺激する。頭を前後に動かしている。

時間がないことは銀子も理解しているのかいつもより積極的に舌で逸物を舐めている。カリのの裏を小さい舌が這う感触が気持ちいい。

しかし、便座を横に見ながらの空間は狭い。縦長の空間をわざわざ横に使つていて背中がトイレの壁に接触する。銀子のほうも逸物をくわえるために腰を曲げた拍子に突き出した尻が壁に当たつて窮屈そうにしている。

鋼介は個室のドアを背中にして銀子を便座に座らせた。自分が座つてしまふと銀子をタイルの上にひざまづかせるからだ。

銀子は便座の縁に尻の位置を調整して浮いていた足を地に着けた。

銀子は自然な動きで差し出された逸物を口に運ぶ。頬を窪ませ、口内全体でしごいている。

「出すぞっ」

もつと奉仕させてから射精することも出来たが、時間がないのでせりあがつてくる性欲に任せた。

銀子のこめかみ辺りを掴んで逸物を深く呑み込ませる。鼠径部に

当たられている手に力が入り、喉奥を突かれないようにして いた。

逸物が震えて、精液は口内を留まることなく直接銀子の体内に流れしていく。

銀子はいつの間にか口を開けた状態で膣下できるようになつていて、平然と精液を胃に納めていく。

逸物を口から引き抜く。よだれが糸を引いて滴り落ち、タイルに小さな水溜まりを作った。